# 風の少年・花の少女

未華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の少年・花の少女

【Ｎコード】
Ｎ９２５３Ｐ

【作者名】
未華

【あらすじ】
幕末の京に、一人の少女が足を踏み入れた。幼馴染との約束を胸に、向かう先は、”壬生狼”と呼ばれ京の民に恐れられている新撰組。
やがて、大好きな幼馴染の側にいるために、少女は新撰組入隊を決意する。
新撰組の面々に反発しながらも、少女はやがて知ることになる。
時代に翻弄されながら、自分の信念を貫く男たちの強さと儚さを。

そして、少女が見つけ出す”未来(こたえ)”とは？
ちょっと勝気少女の新撰組ライフ。
基本シリアス。時々コメディです。

## 序章（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

# 序章

少年は『風』で少女は『花』だった。

ふと過ぎった二人の姿に男は笑う。

胸は赤く染まり、周りの騒音も聞こえはしない。
ただ静かだった。
新しい時代が始まっている。

けれどそこに自分の場所は……ない。

そう思うからここで死ぬ。
けれど悔いはない。
託した者たちがいる。

別れ際の少女の挑むような不敵な微笑と、少年の痛いほどに真っ直ぐな瞳を思い出す。

『そろそろ行きませんか？』

自分を覗き込む青年を見て男は笑う。
その青年の後ろには、見知った者たちの顔がある。
安堵感が広がる。

「来るのが遅せぇんだよ」

掠れた声で悪態を付く。

それが最後だった。
新撰組副長。土方歳三。
明治二年　函館にて闘死。

幕末。
嵐の時代。
人々は翻弄された。
生きることと死ぬことは隣り合わせだった。
何が『善』で何が『悪』なのか。
それさえも定かではない時代。
ひたすら戦ったのは、己が信じる正義のため。
ある者は流れに身を任せ、ある者は流れに抗った。
それぞれの想いがぶつかり砕け、交じり合う。
やがて、新たな時代を覗かせても、強い『想い』は消えることはない。
たとえ、”容（かたち）”がなくとも、想いは確かにここにある……。

## 京の茶店にて（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 京の茶店にて

慶応三年　八月。
京の町は今日も暑い。
蝉がひきりなしに鳴き続け、店先にした打ち水も一時と持たず、乾いた往来を歩く人の足つきもどこか重い。

「今日も暑いどすなぁ」

打ち水をし終えて、茶店の店主は馴染み客に言葉をかける。

「まったく、やりきれませんわ」

パタパタと団扇を扇ぎながら客は茶を啜る。

確かにやりきれない。
店主は心の中で相槌する。
打ち水をしたのは今日三度目。
けれどその効果も無いに等しい。
気休めにしかならない。
だがしかし、茶店にはひと時の涼を求めて客足は絶えない。
そのことを考えれば、まあこの暑さも我慢できないというものでもない。

「暑さのせいやろか。ここのところ諍い事も増えて。昨夜も死人が出た言う話や。京の町も物騒になりましたわ」

声を潜めて馴染み客は耳打ちする。

「またどすか」

眉を顰めため息を漏らす。
その話に取り直しかけた気持ちがまたもや沈む。
客が言うように立て続けに物騒な事が続いている。
暑さの所為というのには多すぎるほどに。
平穏であったはずの京は変わった。
それにともなってここ数年で客の質も大分変わった。
親しみ深い京の言葉に混じり、江戸や長州。その他、訛り言葉が行き交っている。
客に変わりはないのだがどうも物騒でいけない。
声を荒げ唾を飛ばして話すその姿は、どこか野蛮で京人とは違う人種にも見えてしまう。
今も店先には、長州か薩摩かという浪士風の男たちが、茶を啜りながらコソコソと話し込んでいる。

（触らぬ神に祟なしやな）

その間をさり気なく通り過ぎて店主は心の中で呟く。

「すみません」

店の奥へ引っ込もうとしていたその時少女に声をかけられた。
ももわれの髪に、小花の髪飾りを差して格子しまの着物姿。
意志の強そうな眉とどこか愛嬌のある瞳。
赤みを帯びた薄い唇。
幼さが残るその顔はどこか人なつっこい。
目を引く美人ではないが、『かわいらしい』と形容できる容姿をしている。

「はい。どないな御用ですやろ」

親にお使いを頼まれたか、それとも稽古帰りの休憩をするつもりか、頭の中で思いを巡らせながら、店主はにこやかな顔で頭を下げる。

下げてから「はて？」と眉を動かす。

よく見れば少女の姿は旅装束だった。

足袋にこびり付いた泥具合から、それなりの距離を移動したと見える。

けれど、少女に連れの姿はなし。

「新撰組の屯所の場所を教えていただけませんか？　この近くだと聞いたのですが、道がわからなくなってしまって」

そんなことに思いを巡らせていると、思いがけない言葉が飛び込んできた。

「新撰組……どすか？」

数秒の空白ののち店主は少女の言葉を反芻してみる。

「はい」

それに深く頷く少女。

顔には笑顔さえ零れている。

「本気どすか？　あんさん……」

店主はマジマジと少女を見る。

”新撰組”その名前を聞いただけでゾッとする。

『壬生狼』

狼のように残忍な人斬り集団。
京では彼らを知らないものはいない。

四年前に幕府の清河八郎が京の治安のためと銘打ち、浪士組などと名を付けて江戸で荒くれ共を集めたのが始まり。
京に入ってきた数百人の者を見たときには目を剥いたものだが、それも一月と経たずして、またも江戸に引き上げていった。
それに安堵したのも束の間、その中の十数名は京に居座ってしまった。
それが『新撰組』と改名し、幕府の後ろ盾があることをいいことに、我が物顔で京を闊歩するようになっていた。
最初数十名だったそれが、今となっては数百名という大集団になっている。
そんな集団が動けば血が流れないはずがない。
新撰組が起こす事件はいつも血生臭く容赦ない。

三年前の事件。
京を焼き討ちにしようと、池田屋で談合していた討幕派の浪士を襲撃した事件もその一つだ。
仲間の一人を拷問し口を割らせ、池田屋に乗り込み有無を言わさず刀を抜いた。
その場は大乱闘となり幾人もの死者が出たという。
その後、京の道を血染めのダンダラ姿で列を成した新撰組の姿は、後々の語り草にもなったほどだ。

思えば、あの事件から新撰組の名は皆の知るところとなり、畏怖の対象になったのだ。
京の危機を救った新撰組の活躍を京人としては応援するべきなのかもしれない。
だが、池田屋から出てきた新撰組のあまりにも凄まじい戦いの後は、京人を震え上がらせた。
『尊敬』よりも『恐怖』が植えつけられてしまった。
感謝をしていないわけではない。
けれど、早急で容赦のないその『正義』は、『静けさと平穏』を尊ぶ京では受け入れづらいものだった。

目の前の少女と新撰組。
その二つが結びつきようも無く店主は混乱するばかりだ。

「あそこは、女子が一人で行くような場所じゃあありゃしません。悪いことはいいません。やめたほうがよろしおす」

店主は大きく頭を振って声を潜める。
それに対し少女は答える。

「どうしても行かなければいけなのです。会いたい人がいるのです」
「会いたい人？」

少女の真摯の瞳を見て閃くものがあった。
親兄弟か恋人か。
今更だが、少女の言葉に京訛りはない。
話し方の感じからすると江戸の者なのだろう。
そもそも、きりりとはっきりとした顔立ちは江戸女のものだ。

「知り合いが居るんどすか？」

「はい」
「そうどしたか」
なんにしろ少女は決心しているようだった。
止めても無駄だろう。
そんな気がした。
（若いのに難儀なことや……）
店主は少女の行く末を案じながら、丁寧な説明をし始めた。
「ありがとうございました！」
聞き終えると少女は深々と頭を下げる。
「いえ。気をつけておいきやす」
複雑な表情の店主に少女は何度も礼を言い茶店を出ていった。
「大丈夫やろか？　あの娘はん。狼の群れに子猫が飛び込むようなもんや」
隣りで聞いていた馴染み客は神妙そうに少女の後姿を見送る。
「いくらなんでもあないな子供に手は出さんやろ。知り合いが居てはるみたいやし」
「それならいいんやけど」
そう答えて、何事もなかったかのように茶を啜り団子をつまむ。

「なんにせよ、触らぬ神に祟なしや」
先ほど心の中で呟いた言葉を声に出し、店主は重く深いため息を付いた。

茶店を出ると、強い日差しが少女を照りつけた。
その太陽を仰ぎ見て目を細め、少女はにっこりと微笑む。
江戸を出て二月。
長い長い旅路を経て辿り着いた京。
目指すは新撰組屯所があるという不動堂村。
『新撰組』
そこにずっと捜していた人が居る。

「もうすぐ会いに行くわ」

高鳴る鼓動を抑えつつ、少女は呟き微笑みをこぼす。
彼女の名は宮崎芳乃(みやざきよしの)。
固い決意を胸に、新撰組を目指し江戸から京へとやってきた少女。
彼女はまだ知らない。
思想行き交う京の町の混沌も、目指す『新撰組』で待ち受けている運命も。
今この時、芳乃は嵐の時代に足を踏み入れたのである。

# 新撰組屯所（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

# 新撰組屯所（1）

茶店の主から教えられた道を進み、芳乃は目的地に辿り着く。

「ここが……」

高い堀が周りを囲み中は見えないが、その大きさは下手な大名屋敷よりずっと大きい。

何百という隊士が寝起きし、中には寺の庫裏のように広い台所や三十人は一度に入れる広い風呂場まであるという。居室はもちろん、客舎や物見。別棟には道場まであるという話だから、半端な大きさではない。

門の前には、新撰組の名が掲げられているが、芳乃は一瞬入るのを躊躇する。

話には聞いていたが、あまりの大きさに少しばかり気後れしていた。

「ええいっ、当たって砕けろだ」

自分に気合を入れると、深呼吸をし芳乃は門をくぐる。

玄関先の戸は開いていたが、そこに人の姿はなかった。

一瞬躊躇いながらも、芳乃は意を決して声を出す。

「すみません。誰かいませんか？」

声が震えた。

ここまで来て微かな緊張が走る。

「何だ？」

ほどなくして出てきたのは、厳つい顔をした中年の男だった。

芳乃を上から下から探るように見てから、あからさまに眉を顰める。

「あの！　ここに市村鉄之介（いちむらてつのすけ）という方はいらっしゃいますか？」

とても友好的とはいえない男の視線に動じることなく、芳乃はにっこり笑顔で尋ねる。

「市村？　お前、そいつに何のようだ？」

「え？」

男の不審そうな視線を受けて、芳乃は答えに窮する。

「……それは本人に直接伝えます」

暫く思案してから芳乃はきっぱりと言い放つ。

それは本人に言うべきことであって、他人に話すべきことではない。

そう結論付けた。

「ふん。帰れ、帰れ。何にせよ、子供が来る場所じゃねぇんだ」

芳乃の言葉を聞くやいなや、男はシッシッと手を払ってその場から去ろうとした。

誰か隊長クラスの者への訪問者ならばいざしらず、名も知らない平隊士への面会者など、いちいち相手になどしていられない。

「なっ。待ってください！　私は市村さんに会うために、江戸から出てきたのです。ここで帰れと言われても、帰るわけには行きません！」

芳乃は慌てて男を引き止める。

「そんなこと俺の知ったことか。皆忙しいのだ。お前のような小娘を相手にしている暇はない」

イライラとした口調で男は言う。

夏のうだる様な暑さ。

ただでさえ苛立っているのに、しつこい訪問者に男はうんざりしていた。

「でも！」

「えぇい！　煩い！　サッサと帰れと言っている。帰らぬのなら、叩ききるぞ！」

怒りに任せて男は脇差を握る。

「分かりました……。ならば、あなたの手は煩わせません。自分で探します」

芳乃は男に臆することなく言い放つ。

普通の少女ならば、恐ろしさに逃げ出すところだが、芳乃は恐怖よりも先に怒りが勝っていた。

ここに辿り着くまでの道のりは、決して楽なものではなかった。

危険な目にも幾度と無く遭ったし、思い起こせば命の危険にさらされたことだってなかったわけじゃない。

そんな思いをして辿り着いたのだ。

男一人に怒鳴られたくらいで帰れる道理がない。
むしろ望むところである。

「失礼します」

脅せば恐れをなして帰るだろうと踏んでいた男は、思わぬ反撃に呆気にとられている。
変わって、そんな男を尻目に芳乃は平然と敷居をまたぐ。

「ふざけるな！　本当に斬るぞ！」

入り込んで来た芳乃を見て、男は我に返り刀を鞘から引き抜く。
ここまで来たら、引っ込みが付かない。
京で鬼とまで言われる新撰組の隊士が、小娘一人になめられたとあっては面目が立たない。

「サッサと帰れ！」

凄みのある男の声。

「刀は安易に抜くものではないのではないですか？　私はただ人に会わせてほしい。そうお願いしただけです」

まったく動じることなく芳乃は睨み返すように男を見る。
芳乃の父は町医者だった。
その父の手伝いを芳乃は幼い頃からしていた。
診療所には、傷を負って殺気だった男たちが担ぎ込まれてくることだってある。
荒くれ者には馴れている。
力で優位に立とうとする者たちを、言葉で打ち負かしてきたのだ。

口三寸はお手の物。

「いいかげんに……」

落ち着き払った芳乃の態度に、男の顔が怒りのため朱に染まる。

「何の騒ぎだ」

重なる声。

芳乃は後ろに気配を感じ振り返る。

真後ろに男が二人立っていた。

「何だ？　その刀は」

一人が、男が振りかざしている刀を見て形のいい眉を顰めている。

背の高い男だった。

髪は総髪で一つにまとめて下げている。

目元は涼しげで、つい眼がいってしまうような美男子だ。

「あ、いえ。土方先生。その……」

男は見る見るうちに顔色を変えていく。

「何か騒ぎかね？」

背の高い男……土方と呼ばれた男の横にもう一人。

厳つい顔をしたどこか威厳ある風貌。

髪は総髪ながらきちんと結い上げている。

落ち着いた様子で目の前の光景に動じる風もなく、やんわりとした口調で尋ねる。

「こ、近藤局長」

その人物に、男の顔色は更に悪くなった。

## 新撰組屯所（2）

「何の騒ぎだと聞いている」

土方は声を強める。

大声を出したわけではないというのに、先ほどの男の声よりも数段凄みが聞いている。

「は、はい。そこにいる娘が、隊士の一人に会いたいとしつこいものでつい……」

その言葉で、二人の視線が始めて芳乃に向く。

「あの！　私、市村鉄之介さんにどうしても会いたいのです。会わせてはいただけないのですか？」

どうやらこの二人は、組の幹部であるらしい。

芳乃は両手を胸の前で握り締め祈るように懇願する。

「ふーん。市村にねぇ」

土方は小さく鼻を鳴らしておもしろそうにニヤリと笑う。

「ふむ。市村君と言うと？」

近藤と呼ばれた男が土方に尋ねる。

「この間の隊士募集で入隊した一人だよ。にしても、あの真面目だけが取り柄のような市村にねぇ」

近藤の問いにサラリと答えて、土方はジロジロと芳乃を見る。
そのからかうような視線にムッとして、芳乃は負け時と土方を見返す。
その視線を受けて取り、土方は「おっ」と声を上げる。
「私は、宮崎芳乃と申します。鉄之介さんとは同郷の間柄でございます。私は暫くして江戸に移り住みまして、今日、江戸からやっと京に辿り着いたのです」
好奇の視線を打ち負かすように、芳乃ははっきりとした口調で言い放つ。
「ほぅ。江戸から京まで……。親兄弟と一緒にか？」
「いいえ。私一人です。父母はすでに亡くなり兄弟はおりませんから」
問いに、芳乃ははっきりと答える。
「これは驚いた」
近藤は目を見開く。
なにせ江戸から京までといえば、相当な距離がある上にこのご時世。治安もいいとはいえない。女の一人旅など無謀に近いことだ。それをまだ幼さが残るこの少女がやってのけたというのだから、驚くのも無理がないことだった。
「ふむ。わざわざここまで来たのには相当な理由があるのだろう。会せてあげようじゃないか」

同意を求めるかのように近藤は土方を見る。
「局長がそう言うなら俺は反対しねぇよ」
あっさりと土方も同意する。
「そういうわけだ。その物騒なものをしまって下がりなさい」
「は、はい」
近藤の一言で固まったままだった男は慌てて刀を鞘に納める。
「し、失礼します！」
近藤、土方に一礼をして男は足早にその場を去る。
が、去り際にジロリと睨まれたのを、芳乃は見逃していなかった。

今、芳乃の前には近藤と土方が歩いている。
芳乃はその後を数歩後に付いていく。
途中出会う者達は、二人の姿を見ると礼して道を譲っていく。
（まさか、いきなりこんな偉い人と出会うことになるなんて）
付いていきながら芳乃は嘆息する。
二人の肩書きを聞いて驚いた。

厳つい男の名は近藤勇（こんどういさみ）。
新撰組局長。
言わずと知れた、新撰組の頂点に立つ男。
そして、もう一人の背の高い男は土方歳三（ひじかたとしぞう）。
新撰組副長。

つまり、新撰組の中心人物の二人に出会ってしまったのだ。

（なんだか、話と全然違うわ）

『人斬り集団』だとか『壬生狼』だとか言われ、恐れられている新撰組。
その頂点にいる男はさぞや恐ろしい者なのだろうと、少々恐れを抱いていた芳乃だったが、前を歩く近藤という男はイメージと違っていた。
確かに厳つい顔をしてはいるが、決して人間離れした殺人鬼などと言うものではない。
それどころか、どこかゆったりとした雰囲気があり、一言二言言葉を交わしただけではあるが、好感を持てる。
が、変わって持てないのは、同じく芳乃の前を歩くもう一人の男。
新撰組副長。土方歳三だ。
自分を見るその目は、からかうような含みがある。
真面目も真面目。大真面目な芳乃にとっては、ひどく腹が立つことだった。
腹が立つと、芳乃は妙に冷静になるところがある。
カーッと頭に血が上って、一定の域に達すると水でもかけられたように、頭がすぅと冷えて相手への攻撃態勢に入るのだ。
それが例え、男だろうと年上だろうと、身分の高い者だろうと関係ない。

怒りの琴線に触れられると、自分でも驚くくらいに、冷静に物事に対処しだすのだ。
今回の応対の男にしても、土方にしてもそうだ。
気持ちが張っている分、怒りが上がるのも早かった。

（失敗しちゃったな）

こともあろうに、副長に生意気な態度を取ってしまったのだ。
怒った様子はないがあの場合、問答無用で切り殺されたって文句は言えない。
なにせ、新撰組は幕府から、『切り捨て御免』の許可を受けている。
突然押しかけて来て、無礼を働いたのは芳乃の方。
理由は十分にある。そう考えて今更ながら恐怖に震える。

「よい建物であろう。大名屋敷にも引けをとらぬ」

何の気もないように、近藤は唐突に芳乃に言葉をかける。

「そ、そうですね」

頭の中で反省会を開いていた芳乃は、近藤の言葉に我に返り慌てて相槌をする。
言われて、芳乃は改めて屋敷を見回す。
外から見てもそうだが確かに立派な佇まいだ。
まだ建てられて間もないらしい。
木の香りをはっきりと感じられる。
ピカピカに磨かれた廊下。
一寸の狂いもないよう建てられた柱。
途中には、大広間や練習場らしき場所もあった。

確かに、下手な大名屋敷よりもずっと立派ではないかと思う。

「あの、前は西本願寺が住まいだったのですよね」

それは京に来る道々情報収集したものだ。

元々新撰組は、西本願寺に間借りしていたのだが、訓練に格好をつけて、相当無茶苦茶な騒ぎをしていたとか。

堪ったものではないのは寺の者たちだ。

ただでさえ荒くれ者の多い新撰組に、ビクビクしながら生活しているのだ。

気の休まる時がない。

そんなわけで、資金は西本願寺が負担をして、この不動堂村の堂々たる屋敷が出来たのである。

新撰組に気を使いに使って、西本願寺の者も気の毒だ。

と、そういう話だ。

新撰組をよく思わない京人の悪意も加わっているのだろうが、どこまでが本当なのか。

「よく知っているな。そうだ。だが、あそこは手狭でな。訓練するにも、不便で行けなかった」

芳乃の問いに、近藤は小さく首を振る。

「坊さんも煩かったしな」

そこに、土方がボソリと付け加える。

「はぁ。そうなんですか……」

二人のその答えに、噂もあながち嘘ではなさそうだと思う芳乃だ

った。

## 再会（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 再会（1）

「さあ、入りたまえ」

芳乃は屋敷南奥の、こじんまりとした座敷に通された。
どうやら客室らしい。
新しい、青々とした畳が美しい。
芳乃は緊張した面持ちで勧められた座に腰掛け、近藤は上座に座る。
土方は、少し離れた窓際に座を崩して腰かける。

「市村です」

ほどなくして障子越しに声がする。

「入れ」

その言葉と共に、ゆっくりと障子が開く。

現れたのは一人の少年。
市村鉄之介。
その人だった。

（鉄ちゃんだ……）

見た瞬間に、芳乃はすぐに分かった。
それは十年ぶりの再会。
鉄之介はまったくといっていいほど変わっていなかった。

確かに、昔と比べれば多少大人びた顔つきをしてはいる。
けれど、愛嬌のある大きな瞳、意志の強そうな口元。
緩やかに流れる眉。
男にしては、サラサラと綺麗な黒髪。
月代のない総髪を上に束ねただけの髪型も同じで、輪郭さえさほどの変わりもない。
しいて言うのなら、背が幾分か高くなっているということくらいなもの。
だが、それは芳乃も同じことで、並んで歩けば大体同じ大きさくらいだろう。
相変わらず華奢な体つきで、青年というには幼く、少年と言う方がしっくりとくる。
あまりの代わり映えのなさに、拍子抜けしたくらいだ。

「お前、こいつを知っているか？」

出し抜けに、土方が親指を芳乃に向けて鉄之介に問う。

「はい？」

いきなり言われた鉄之介は面食らった様子で、ポカンとした顔をしている。

「聞いてんだよ」
「は、はい！」

土方の言葉に呆けていた鉄之介は、慌てて視線を芳乃に向ける。
芳乃と鉄之介の視線がぶつかる。
どうしようもない懐かしさがこみ上げる。

「お、お久しぶりです」
始めに口を開いたのは芳乃だった。
上ずる声ながら何とかそう言葉を吐く。
「……」
が、鉄之介は無言だった。
無言で、ただ芳乃を見ている。
「あの……」
その姿に芳乃は不安になる。
いきなり押しかけてきて迷惑だったのだろうか？
そんな考えが頭を過ぎる。
いくら『約束』だからといって、少々不躾過ぎただろうか？
「あの、どなたでしょうか？」
耳を疑う。
思わず鉄之介を凝視する。
「あ、いえ。すみません。僕はどうも人の顔を覚えるのは苦手らしく……。僕が、何かあなたに失礼なことでも……」
芳乃の視線を受けてとり、何を勘違いしたか鉄之介はシドロモドロになる。
どうやら、というか、間違いなく本気で芳乃のことを忘れているらしい。

「う、嘘でしょ！？」

頭を木槌でおもいっきり叩かれた気分だ。

あまりのショックに言葉が出てこない。

江戸からここに来るまで、「忘れられている」などということは、微塵も思いもしなかった。

芳乃は今日のこの日、鉄之介と再会することだけを楽しみに、生きてきたというのに。

たった一つの『約束』だけを頼りにここまでやって来たのに。

「本当に彼女のことを知らないのか？」

芳乃のあまりの落胆振りを哀れと思ったのか、近藤がもう一度鉄之介に聞き返す。

「は、はぁ」

困った様子で、鉄之介はしきりに首を捻っている。

「だ、そうだお嬢さん。帰った方がいいんじゃねぇか？」

土方は素っ気無く言い放つ。

「冗談じゃない！　私は鉄ちゃんに会うために江戸から出てきたのよ？　そりゃあ、勝手に押しかけて来たのではあるけれど、覚えていないから帰れなんて納得いかないっ！」

土方の言葉に芳乃の中の何かがキレる。

完全に地が出ている。

周りの者が面食らっている様子も目に入っていない。

「鉄……ちゃん？　江戸から……って、もしかしてお芳……ちゃん？」

芳乃の変貌振りに呆気に取られていた鉄之介は、芳乃の言葉に声を上げた。

「もしかしなくてもそうです！　信じられない……。どうして、すぐに気が付いてくれないのよっ」

芳乃は半なき状態で癇癪を起こす。

少なからず期待をしていた分、その怒りと悲しみは大きい。

「ごめん。だって、あんまり女の子らしくなっていたから、全然分からなくて……でもやっぱりお芳ちゃんだ。昔と変わっていない」

そう言ってクリクリとした瞳を白黒させながら笑顔を零す。

「鉄ちゃんも変わってない……」

人を和ませる独特な雰囲気。

芳乃はいつだって鉄之介の笑顔には勝てないのだ。

今も体中から沸き立つくらいの怒りが、自然と消え去ってしまっている。

「思い出したのか。よかったな」

「はい」

隣で見ていた近藤も気を取り直して我事のように嬉しそうに笑い、

つられて芳乃も笑顔で返事をする。

「……なんだかなぁ」

土方が呆れたようにため息を付いたが、芳乃はそれを無視した。

## 再会（2）

「でも、どうしてお芳ちゃんがここに？」
「それは、あの……」
だが、続きの言葉が出てこない。
「僕に会いにここまで来てくれたって……」
「美濃で鉄ちゃんが新撰組に入隊したということを聞いたから」
芳乃は父と共に江戸に住んでいたのだが、鉄之介に会うため故郷の美濃に行き、そこで初めて鉄之介が新撰組に入隊したと知ったのだ。
「そうですか。美濃に行ったということはうちのことを聞いたのですね」
鉄之介の顔に初めて影が落ちる。
「うん。美濃の土地を離れるようにとのお達しがされたのだと……」
ズキリと痛む胸。
末席ながら立派な武家であった市村家。
それが些細な事件によって、長暇を出され美濃の土地を離れなければいけなくなったのだと聞いた。　芳乃はわけ合って一時市村家に預けられていたことがある。
芳乃にとって市村家の人々は家族同然だった。
長暇……事実上の解雇。
それがどんなに屈辱的でつらいことか。

武家の出ではない芳乃でも分かる。
芳乃にとってもう一つの家族とも言える市村家の人々。
思い出すと胸が痛む。
シュンとなった芳乃を見て、鉄之介は気を取り直したようにすぐに柔和な微笑みを浮かべる。

「けれど心配しないでください。僕はこの新撰組で元気にしていますから。まだまだ未熟だけど、一刻も早く剣の腕を磨いて、幕府のために尽力を尽くし、市村家の汚名も晴らすつもりです」
「ふむ。いい心がけだ」

鉄之介の言葉に、近藤はうんうんと頷いている。

「だがな、鉄。おめぇの場合、何においても半人前以下だからな。半端なことじゃ、強くはなれねぇ。覚悟しとくんだな」

土方は、鉄之介を一瞥して言い放つ。

「はい！」

鉄之介は土方の言葉に、顔を高揚させて心底嬉しそうに大きな声で返事をした。
そんな鉄之介の姿を見て芳乃は少し安堵する。
てっきり新撰組で辛い思いをしているのではないかと思ったが、そういうことはないらしい。少なくとも、この場所にいるということを苦にしている様子は見られない。
昔と変わらず、屈託のない澄んだ瞳をしている。

「お芳ちゃん？」

黙り込んだ芳乃を鉄之介が不思議そうに覗き込む。

「……」

けれど、そんな鉄之介の姿は少し寂しくもある。
今の鉄之介にとって芳乃はただの幼馴染でしかない。
とても、最後に交わした約束など覚えていないだろう。
今の鉄之介にはこの『新撰組』が自分の居場所で進もうとしている道。
十年前、たった五歳の子供同士の約束。
そんなものは忘れていて当たり前……。
そう。それが普通だ。
けれど、芳乃はずっとその約束を信じて待っていたのだ。

（このまま別れてしまっていいの？）

いいや。いいわけがない。
忘れたままなんて悲しすぎる。
このままなかったことにするなんて嫌だ。
ならば……。

「お願いがあります」

ゆっくりと鉄之介たちを見回し、芳乃は静かに口を開く。

「？」

鉄之介は不思議そうに芳乃を見ている。
土方、近藤の視線も芳乃に向けられる。

「私を新撰組に入隊させてください」

静かに、けれどきっぱりはっきりと芳乃は言い放つ。

「……」

シィンと静まり返る場。

「失礼します。お茶を……」

障子越しに男の声。

「ふざけんじゃねぇっ！」

が、唐突な土方の怒鳴り声に、障子の外で派手な音がした。

タイミングよく……というのか、お茶を運んできた男が、怒鳴り声に驚いてお茶の入ったお盆をひっくり返したのだ。

「し、失礼しました！」

自分に向けられた言葉と勘違いしたのか、その男は慌しくその場から逃げ出していった。通りがかりの幾人かが何事かと立ち止まる。

「冗談を言っているつもりはありません」

緊迫した障子の中で、芳乃は怯むことなく言い放つ。

興奮して立ち上がった土方はギロリと芳乃を睨む。

その瞳は殺気だっている。

「なお更悪い。寝言は寝てから言いやがれ。てめぇ、自分が何を言

ってやがるのか分かってんのか？」

冷たい刃のような瞳。先ほどまでのからかうような色は消え、変わりに狼のような凶暴な色を称えている。

「殺される」その瞳とかち合っただけで、そんなひらめきが頭を過ぎる。

だが、芳乃は恐怖を必死で中に押し留める。

「だから、新撰組に入隊させて下さいと言ったのです」

膝に乗せた両手を握り締める。

手は、暑さの所為だけではない汗が出ている。

何とか平静を保ってはいるが、ややもすると土方の剣幕に怯みそうになってしまう。

「どういうことだね。訳を聞こうか？」

先ほどから変わらず静かだが、近藤のその目も明らかに違う。

芳乃の奥底まで探るかのような強い眼差し。

「んなこたぁ、聞くことはねぇよ。近藤さん」

土方は冷たい声で言い放つ。

「落ち着け、歳。いいから座れ」

近藤の一言に、土方は「ふん」と鼻を鳴らして、その場にどっかりと座る。

## 入隊試験（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 入隊試験（1）

「お芳ちゃん……」

あまりの事に、鉄之介も呆気にとられている様子だ。

「私には行くあてがないのです」

芳乃は大きく音をたてる心臓を押さえ込み言い募る。

「美濃で母が死んで、父と江戸に移り住みました。それがつい二月ほど前に、その父も病に倒れ亡くなりました。面倒を見てくれるといっていた親類に父の財産を奪われてしまい、私もあと少しで身売りされてしまうところでした……」

と、半分は本当。

半分は予想である。

父の葬式の後、芳乃を引き取ってくれるという親類がいたにはいた。

だが、母が病に臥した時、そんな母を疎んじ懸命に看病する父には「どうせすぐに死ぬものを」

と冷たい言葉を浴びせ、父が死ぬその時まで何の音沙汰もなかったというのに、いきなり葬式に現れた親類は、突然優しく芳乃にその話をもちかけたのだ。

それを信じるほど芳乃も馬鹿ではない。

血は水よりも濃いとは言うが、それがどれほどあてにならないことか、芳乃は嫌というほど知っている。

大方、父が残した微々たる財を欲してのことだろう。

「そんなことが……」

鉄之介が気の毒そうに芳乃を見る。

「ふぅむ。お主も苦労したのだな」

近藤は少しばかり視線を和らげる。

ただ一人、土方は相変わらず眉根を寄せて微動だにしない。

「他に頼れる親戚もいませんでしたし、途方に暮れているとき、昔お世話になった市村家の方を思い出し、故郷の美濃に戻ったのです。けれど、すでに市村家の人々はいらっしゃらず、仲のよかった鉄之介さんは新撰組に入隊したのだと聞いて。居ても立っても居られず京まで来たのです」

「話は分かった。だが……」

近藤は眉根を寄せて渋い顔になる。

「そんなこと、新撰組には何の関係もねぇ。新撰組に入隊している鉄にもだ。ここは駆け込み寺じゃねぇんだ。何の役にも立たねぇ小娘を引き取ってやる義務も義理もねぇ。身売りが嫌なら、坊さんにでも泣きつきゃいいだろうが」

言葉を濁す近藤に代わり、土方は突き放すように言葉を吐き出す。

その言葉を聞いた途端、芳乃の中にまたも怒りが湧き上がる。

「どうして、何の役にも立たないって決め付けるのですか？　私にだって出来ることはあると思います。雑用でも何でもやります！剣を持って戦えというのなら戦います！」

握り締めた両手に更に力を込める。

土方の言っていることは正しい。
もっともだ。
けれど、芳乃は引き下がらない。
いや、引き下がれない。

居場所がない。
それは本当のこと。
父がいなくなった今、芳乃には心から信頼出来る相手は鉄之介以外に居ないのだ。
それになにより、まるで自分を役立たずの荷物のように言われることは我慢ならない。

『新撰組』は、可能性を広げる場だといった人がいた。
身分など関係ない。
志あらば受け入れられる。
だからこそ、貧乏浪人の集まり百姓の成り上がりと陰口を叩かれ、京の人々は『壬生狼』と後ろ指を指す。
だが、自分自身しか持ち合わせていない者にとっては、無限の可能性を秘めた場所。
それは芳乃も同じことだ。
今の芳乃はまさしく、可能性を求めていた。

自分が生きる場所がほしい。

それが鉄之介の側であったならどんなにいいだろう。
鉄之介の行く道を自分も一緒に行きたい。
その場所が、人斬り集団と言われる『新撰組』であっても構わない。

鉄之介の選んだ場所。
そこには何かきっとある。
そう思えるから。
だから芳乃は、至極真面目に入隊を希望したのだ。
そこにある無限の可能性。
鉄之介が惹き付けられた何かを知りたいから。
「剣を持って戦う？　お前が？」
土方は明らかな嘲りを含んだ笑みを浮かべる。
「女だと思って侮らないで下さい。私だって竹刀ぐらい持ちます」
睨むように土方を見ながら芳乃は言葉を吐き出す。
剣術を教えてくれたのは市村家の長兄だった。
女の子だからといって遊び半分で竹刀を握らせてくれたわけじゃない。
普通の男子でも根を上げるような訓練をこなしていた。
本当は、「つらいからやめる」と言い出すのを、女が竹刀を持つということを反対した周りが期待していたことだったらしいのだが、芳乃は絶対にやめたいと言う言葉を口には出さなかった。
そのため、市村家にいた期間はほぼ毎日竹刀を握っていた。
鉄之介は他に道場にも通っていたが、当然のことながら芳乃は道場には通えなかった。
それの悔しさがまたバネになって、訓練にいっそう熱中したものだ。
江戸に出てからも、「女のたしなみ」そっちのけで剣術に没頭し

て、一時は竹刀を持つことを禁じられたほどだった。

「近藤さん。ここまで言うんだ。試験をしてみないか？」

「おいおい。歳……」

「土方先生っ」

土方の発言に近藤も鉄之介も慌てる。

「やります！　何をすればいいのですか？」

そんな二人を尻目に、芳乃ははっきりとした口調で言い放つ。

「その試験に合格すれば、入隊を許可して下さるんですよね？」

「いいぜ。合格すれば……な」

芳乃の視線を受けてとり、土方はにやりと含みのある笑いを見せる。

「しかし試験といっても、まさか大の男と剣術試合をさせるわけにはいくまい」

新撰組では入隊試験として、剣術試合をすることになっている。

別に勝ち負けの問題ではない。

希望者の太刀筋や動き気迫を見て取り、本当に『新撰組』に相応しいかどうかを見極めるのだ。

だが、試合はあくまで真剣勝負。

竹刀での戦いといえども、その試合風景は凄まじいものがある。

なにせ実践は人斬り。集まってくる者たちも一癖も二癖もある曲者ぞろい。

大の男でも、怖気づいて逃げ帰る者が毎回何人かいる。

「そのまさかだよ。実践で敵は選べねぇんだ。試験だって人を選ばさない。こいつだけ、特別扱いは出来ないだろ？」

土方はあっさりと言い放つ。

「無理です！　お芳ちゃんは女子です。いくら剣術の経験があるといっても、いきなりそんな……」

それに異論を唱えたのは鉄之介だ。

だが土方の視線を受けて、言葉は徐々に小さくなっていく。

「そういえば、お前も相当打ち込まれていたんだっけな。弱くて何度でも倒せるのに、一向にあきらめずすぐに向かってきやがって、そのしつこさには呆れたと、野村が言っていたぞ」

クックと、土方は喉を鳴らして笑う。

「いえ、その話はもう……」

鉄之介は赤くなって俯く。

入隊してからも散々からかわれ続けたことだった。

あの気迫には鬼気迫るものがあったと。

敵も剣を交えることなく逃げ出す。

などと笑い話にされていた。

「お芳さん本気なのかい？」

近藤は真面目な顔で、芳乃に向き直り尋ねる。

ただの試験といっても無事では済まないはずだ。
現に、鉄之介も試合の後は身体のあちらこちらに痣ができていた。
もっとも鉄之介の場合は、「打ち込まれすぎ」というのがあるのだが。

「もちろんです。異存はありません」

挑むように土方を見てはっきりと言い放つ。

「じゃあ、善は急げだ。道場にいくぞ」

芳乃の返事を聞き、土方は立ち上がり障子を開け放つ。

「うわっ」

幾人かが、その場から蜘蛛の子が逃げ出すように散っていく。

「ちっ。立ち聞きしてやがったな」

土方は憮然とした面持ちで言葉を吐き出す。
元はといえば、土方の怒鳴り声が始まりなのだが、そんなこと当の本人は気付いていなかった。

## 入隊試験（2）

道場を目指す道すがら、鉄之介が芳乃に耳打ちをする。

「お願いですから止めてください。行くあてがないのなら、僕が母に手紙を書きます。あなた一人くらいなら……」

「鉄ちゃん。『約束』を覚えている？」

鉄之介の言葉を遮り芳乃は静かに問う。

「約束？」

鉄之介はキョトンとした顔で芳乃を見る。

その顔を見て芳乃は小さく嘆息する。

それは十年も前の話だ。

『嫌っ。絶対に絶対にぜったいに嫌！！　江戸になんか行かない。私はここにいるのっ』

それは母が死に、美濃から江戸へと出発するというその日のこと。

芳乃は、鉄之介と離れるのは嫌だと駄々をこねた。

『お芳ちゃーんっ。危ないよぉ。降りてきてよっ』

泣きべそをかいた鉄之介の姿が小さく見える。

芳乃は屋敷の瓦に届こうかという大木によじ登り、天辺近くの枝に座り込み、幹にしがみ付いていた。

小さな子供であることの特権。

出発直前のその時に、スルスルと幹によじ登り細い枝を足場に、あっという間に、誰の手も届かないそこに登ってしまった。

気づいた時には後の祭り。

青い顔をする大人たちを尻目に、芳乃はてこでもそこから離れない。

昔から、一度言い出したら聞かない頑固なところがあった。

我儘ではないのだが、自分の信念は常に貫く。

それが父の教えであったし、芳乃の性分だった。

『江戸に行かなくていいっていうまで、ここから降りないんだからっ』

芳乃は木登りが得意だ。

しかし、さすがにこんな高さまで登ったのは初めてのこと。

豆粒大の人々を見下ろして、芳乃はブルリと小さく震え、けれど精一杯の虚勢を張り言い放つ。

芳乃は鉄之介と別れたくなかった。

母が病のおりに預けられたのが、父と旧知の間柄であった鉄之介の父の家。

市村家だった。

そこで鉄之介と知り合い仲良くなった。

寂しいとき悲しいとき、いつも傍に居てくれた鉄之介。

芳乃がこの世で一番信頼出来る大好きな人。

一緒にいることが当たり前。

鉄之介と離れるなどありえない。
鉄之介と離れるくらいなら死んだほうがマシだ。

『困ったな。どうしたらいいだろう』

頑固な娘に父親はすっかりお手上げだ。
五歳の子供といえどあなどれない。
その無茶苦茶な破天荒ぶりは、父親だからこそ嫌というほど身にしみている。
無理に説き伏せたところで決して折れはしない。
これは一刻や二刻の長期戦は免れない。
一種の我慢比べ。

困り果てている大人たちを尻目に、鉄之介が行動を起こしていた。
いつの間にか、芳乃のいる大樹へと登っていたのである。

『来ないでよっ。鉄ちゃん木登り下手くそなくせに！　危ないよ。落ちちゃうっ』

芳乃は知っている。
鉄之介は高い所が苦手なのだ。
庭にある小さな桜の木にだって半分しか登れない。
なのに、鉄之介は臆することなく登り続ける。
何度か足を滑らせずり落ちそうになりながらも、何とか芳乃に手が届く距離までやってきた。

『お芳ちゃん……』

荒い息を整えつつ、鉄之介は芳乃の名を呼ぶ。

『何しに来たのよっ。ばかっ』

八つ当たり気味に芳乃は言い放つ。

『お芳ちゃん。おじさんを困らせちゃだめだよ』

『なによぉ。鉄ちゃんは私がいなくなっちゃってもいいの！？　鉄ちゃんのあほぅっ』

そう言うと、シャックリをあげながら泣きじゃくる。

『泣かないで、お芳ちゃん。僕だってお芳ちゃんが江戸に行っちゃうなんて嫌だよ？　でも、またきっと会えるから』

『……だって美濃と江戸じゃ遠いもの。今度はいつ会えるか分からないじゃない。それに私は、鉄ちゃんといつも一緒がいいのっ。一日だって鉄ちゃんに会えないのは嫌っ』

駄々っ子のように嫌々と首を振る芳乃に、鉄之介が小指を差し出す。

『？』

『じゃあ、約束する。僕が元服したらお芳ちゃんを迎えに行くから』

『元服したら？』

『うん。元服したらお芳ちゃんをお嫁さんにする。必ず迎えに行くから』

屈託のない柔らかな笑顔。

『本当？』

『うんっ』

『きっと。きっとだよ……』

芳乃は鉄之介の小指に自分の指を絡める。
鉄之介の言葉なら信じられる。
なぜなら、鉄之介は一度たりとも、約束を違えた事がなかったから……。

別れ際、互いの小指を絡めて鉄之介が言ってくれた言葉。
今にして思えば、もう二度と会えないと泣きじゃくる自分を諌めるための、ただの思いつきの言葉だったのかもしれない。
『約束』というには、あまりにも不確かなものだった。

「ううん。何でもないわ。私、もう決めたの。私も鉄ちゃんが見ているものを見たい。だから、ここに居たい。分かっているわ。これは私の我侭。だから、その我侭を通すために、私はやることはしなければ」

心配そうな鉄之介を元気付けるように、芳乃はニッコリと微笑む。
その笑顔に、鉄之介は小さく息を吐き肩を落とす。
こうなってしまっては、何を言っても聞かない。
昔から、人一倍勝気な性格で物事を曲げるということを知らない。
その笑顔を見て、昔から変わってはいないのだと鉄之介は悟る。

(ああ、お芳ちゃんはこういう人だったんだ……。容姿は女子らしく、見違えるほど綺麗になったというのに)

中身は勝気な昔のままだ。
そのことに半分安堵し、半分不安に陥る不憫な鉄之介だった。

## 入隊試験（3）

道場は住居区から少し離れた別棟にあった。
中に入って驚く。
竹刀を交える者たちもいたが、それ以上に物見のように道場の端に集まった男たちが山といた。
中に入ってきた芳乃たちに一斉に目を向ける。

「おう。待ってたぜ！」

その中から男が一人、声を張り上げて出てきた。

「ふぅん。この娘か？」

男は大柄で、近くで見るとけっこうな迫力がある。
キリリッと整った顔立ちをしているのだがどこか粗暴な雰囲気がある。
そんな男に至近距離で見下ろされ、芳乃は思わず後ず去る。

「おいおい。こんな細っけぇ腕で本当に竹刀なんか握れんのかよ？」

そんな芳乃にお構いなしに、男はずけずけと言い放つ。

「お前たちは一体何をしているんだ？」

土方が男に向かって冷やかな口調で言う。

「あ？　何か女が入隊試合やるって聞いてよ。見学に来たんだろうが」

悪びれた様子もなくそう答える。
どうやらその他の男たちも、どこからか話を聞きつけて集まってきたらしい。
「原田。お前は見回り当番ではないのか？」
男に土方は苦い顔を向ける。
「代わってもらったんだよ。見学禁止だとか硬いことは言うな。こんなおもしれぇ見物、独り占めするのはずるいからな」
ニヤニヤとしながら、男……原田は土方の肩に腕を乗せて耳打ちする。
「好きにしろ」
ため息を付き言い放つ。
「なにやら大事になってしまったな。大丈夫か？」
近藤が気遣わしげに芳乃をみる。
「へ、平気です」
それに芳乃は引きつった笑いを返す。
怖気づいたわけではない。
ただ、周りの野次馬たちの姿に面食らっていた。

（本当にここってどうなっているのかしら）

人がこんなにも真面目だというのに、周りは冷やかし半分おもしろ半分。

腹立たしいとかそういう域を超えてあきれてしまう。

「さて、問題は誰と組んでもらうかだな」

近藤が小さく首を捻る。

「私は誰でも構いません」

芳乃は静かに言う。

相手が誰だろうと、全力を尽くすまでだ。

「私がやりましょう」

野次馬の中から声が上がる。

その顔に見覚えがあった。

芳乃を玄関口で追い返そうとしたその男だった。

芳乃と目が合うと、ニヤリと下卑な笑みを浮かべた。

芳乃はキッと睨み返す。

「お前は確か一番隊だったか」

「はい。一番隊隊士、石田です」

石田は、土方に一礼をする。

「いいだろう。よし！　鉄、この女にお前の防具を貸してやれ」

「あ、はい。お芳ちゃん、こちらに」
鉄之介は芳乃を道場の隅に連れて行き、置いてあった自分の防具を差し出す。
「ありがとう」
芳乃はそれを受け取り身に着ける。
「いいですか、お芳ちゃん。一番隊は、十番まである隊の中でも特に優れた人の集まりなんです。だめだと思ったらすぐに『参った』といってください」
ひどく真剣な顔で鉄之介は言う。
「大丈夫。こう見えても、竹刀は握りなれているし……」
言いかけた芳乃の腕を鉄之介が掴む。
力強いその手に、芳乃は驚いて鉄之介を見る。
そこには、真摯な瞳をした鉄之介の姿があった。
「ここは、あなたが考えるほど甘い場所ではないのです。約束してください！　危険だと思ったら、意地を張らずに降参すると。いざとなれば、あなたの身の置き場所は必ず確保するようにします。だから、絶対に無理はしないでください」
その顔にドキリとする。
芳乃は思わず頷く。
そうしてやっと鉄之介は安心したように息を吐く。

（鉄ちゃんてこんなに力が強かったかな）

掴まれた腕が少しばかり痛い。

「あの、腕を……」

「あ、ああっ！　す、すみません」

我に返った鉄之介は慌てて手を離す。

「じゃあ行ってくるね」

深呼吸をしてから竹刀を受け取る。

竹刀を持つのは父が死んで以来のことだ。

芳乃が竹刀を持つことを、父はあまり好ましく思っていなかった。

いやそもそも、争いごとを好まぬ人だった。

誰であろうと刀を持つことをひどく嫌っていた。

刀は人の命を奪うもの。

人を守る為など大義名分に過ぎない。

「他人を傷つけて何が守れるというのか」

刀傷で担ぎ込まれる患者を見ては、そう言って眉を顰めていた。

そんな父が今の自分を見たらどう思うだろうか？

きっとひどく落胆することだろう。

（それでも私はやめません）

父の苦い顔が頭を過ぎって、少しだけ胸が痛む。

『生きることさえままならない時代です。後悔のない生き方をしなさい』

死の間際、父はそう芳乃に言い残した。

けれどまさかこんな事態になるなど、思いもしなかったに違いない。

「用意はいいか？」

道場の真ん中に立ち、土方がチラリと芳乃を見る。

「はい」

そう言うと、すでに待っていた石田と対峙する。

（嫌な感じ）

ニヤニヤと笑っているのが武具の下からも見て取れる。

完全に侮られている。

芳乃はキリリと下唇を噛んだ。

## 入隊試験（4）

「構え」

土方の鋭い声を合図に、芳乃と石田は竹刀を交える。

「始め！」

その言葉と共に芳乃は一旦後ろに引く。
間合いを取るためだった。
だが、相手はそのまま一歩踏み込んできた。
引くだろうと鷹を括っていた芳乃は虚を突かれる。
相手の振り上げられた竹刀を寸でのところで受け止める。
バシッ。
その場に竹刀がぶつかる音が響く。

「痛っ」

強い力だった。
受けるには受けたがその衝撃は竹刀を伝い、芳乃の手に鈍い痛みをもたらす。
力の強さは決定的。
石田は尚も、強い打ち込みを続けざまに向けてくる。
少しでも気を抜けば、竹刀は吹き飛ばされてしまいそうだった。
四方八方からの打ち込みを、芳乃は辛うじて受けている。
受けることが精一杯だった。
打ち込む隙がない。

「時間の問題か」

土方はそれを見るに付け、ボソリと言葉を吐く。

「しかし、よく受けているな。いい筋をしている。大したものだ」

近藤は感心したように言う。

最初の一打で、竹刀を飛ばしていてもおかしくはない状況だというのに。

「お芳ちゃん」

鉄之介は祈るような気持ちで固唾を呑んで見守っている。

バシッ、バシッ、バシィッ！

一定のリズムを作り竹刀は振り下ろされる。

芳乃は徐々に後退し、追い詰められている。

相手は自分をいたぶって楽しんでいるのだ。

何度も竹刀は振り下ろされているのに、どこか決定打にかける。

それは決定打を打てないのではなく、打たないのだ。

とことん嬲って、弱ったところを打ち込むつもりだ。

それが手に取るように分かって芳乃に悔しさがこみ上げてくる。

だが、ここで冷静さを無くしたら、相手の思うツボだ。

芳乃は自分自身を宥める。

隙はきっとある。

相手の竹刀を受け取りながら、必死に間合いを計る。

一歩、また一歩と後ろに下がっていく。

後一歩下がれば、場外となるその時、一筋の光が差し込む。

相手がほんの一瞬、勝機を見て取り油断が生じたのだ。

竹刀を振り下ろす動きが鈍った。最初で最後の好機。

（いまだっ）

「やぁっ！」

芳乃は竹刀を素早く突き出す。

渾身の一撃だった。

その一撃は、見事に石田の胴を捕らえていた。

「一本！」

振り上げられた手と確かなその言葉が芳乃の勝利を宣言した。

その場にザワメキが広がる。

当の芳乃は未だに信じられず呆然としている。

打ち込まれた石田も、まさかの出来事に固まっている。

「私、勝ったの？」

声に出してみても実感がない。

「お芳ちゃん！」

声に見てみると、高揚した顔の鉄之介が大きく頷いて見せた。

それを見て、やっとジワジワと喜びが広がっていく。

芳乃は鉄之介に小さくお辞儀を返す。

「おいっ！　ちょっと待て」

戻ろうとした芳乃を、石田は肩を掴んで乱暴に引き止める。
「何ですか？」
芳乃は冷やかな目で相手を見る。
「今のは油断していたのだ。本気を出せばお前など……」
「その台詞、実戦の時にも言うつもりですかねぇ」
「何だと！？」
皮肉を込めた言葉が聞こえて、石田は声の主を捜して鬼の形相で辺りを見回す。
「誰だ！」
「僕ですよ」
その答えと共に人垣の奥から姿を現したのは、何とも不可思議な青年だった。
肌が恐ろしく白い。
祇園の舞妓らは白粉を塗りたくるというが、そういった類の人工的な白さとは違い、透き通るような白さだった。
身体も細くどこか弱々しい。
それなのに妙に強い存在感がある。
それはきっと、瞳の所為だと芳乃は思う。
黒いその瞳には力強い炎が宿っている。
顔立ちは整っており、間違いなく芳乃や鉄之介より年上だというのに、どこか悪戯好きな子供のようなあどけなさがある。
強いのか弱いのか。
子供なのか大人なのか。さっぱり分からない。

「勝ちは勝ちだよ。今のが真剣ならば君はわき腹を突かれていた。死なないまでも大怪我だ。そんな状態で、果たしてその台詞がいえるかい？」

ニコニコと微笑んでいるのに、その声音には有無を言わさない力強さがある。

「……」

石田は眉根を寄せて押し黙り、青年に一礼すると道場から出て行った。

## 入隊試験（5）

「やれやれだね」

出て行った石田を見て、青年は芳乃に微笑みかける。

「あの、ありがとうございました！」

「いえいえ。別に僕は何もしていないよ」

礼を言った芳乃に青年は驚いたように首を振る。

「でも」

「総司。起きて平気なのか？」

芳乃の言葉を横取り土方が眉根を寄せる。

土方の台詞に改めて青年の様子を見ると、確かに浴衣の寝間着姿だ。

「やだなぁ。僕は元々本当にそんなに悪くないんですよ。それなのに、みんなが大げさに言って。もう直っちゃいましたよぉ」

パタパタと手を振りながら、茶目っ気を含んだ笑いで軽く答える。

「阿呆が。そんな簡単に直るか。サッサと戻って寝ろ」

笑み一つ浮かべず土方は睨むように青年を見る。

「困ったな。土方さんてば、すっかり世話女房になっちゃって。どうせ世話を焼いてくれるなら、もっとかわいい人にお願いしたいのに」

土方の睨みをまったく意に介さず、青年は腕組をしてうんうんと頷いている。

（何なんだろこの人……）

会話がかみ合っていない。
というか、ワザと話の筋を曲げている。
まるで、土方をからかっているのかようだ。

「お前は……」
「そんなことより、試合の結果が出たんですよ」
「あ！」

その言葉に芳乃は思い出す。
そうなのだ。
自分は試合に勝った。
試合に勝ったということは、もちろん試験に合格したということだ。
晴れて、新撰組に入隊できる。
そういうことだ。

「これで、入隊を許可してくださるんですよね？」
「……」

問う芳乃に土方は無言になる。

「ダメですよ～土方さん。武士に二言はないですよね？」

青年がダメだしするかのように土方に言う。

「……あぁ。武士に二言はねぇ。許可してやるよ」

土方は深いため息を付いて答えた。

「悪い。近藤さん。そういう訳だから、いいかい？」

振り返り、近藤に同意を求める。

「仕方あるまい。約束は約束だ。宮崎芳乃。新撰組への入隊を許可する」

局長である近藤のその言葉に、周りからひときわ大きいザワメキが起きる。

「よかったですね、お芳ちゃん！」

駆け寄ってきた鉄之介は思わず芳乃の手を強く握り締める。

「うんっ！」

芳乃は、鉄之介の温かな手を取り赤くなりながらにっこりと微笑む。

「すげえよ、お前。俺ぁ、気に入ったぞ」

と、いつの間にか芳乃の目の前に来ていた原田が、芳乃の背中を

バシバシと叩く。

「きゃっ」

その強い力に、芳乃はよろめき、こけそうになるのを鉄之介が慌てて支える。

「あ？　悪ぃ。そういえば、あんた女だったんだよな。力の加減すんの忘れちまったぜ」

ガハハッと豪快な笑いを飛ばす。

（全然、悪いと思っていないじゃないのよ）

芳乃は恨めしげに大男を見る。

「コホン。ただし、暫くは仮隊士として様子を見る。剣の稽古はしてもらうが仮隊士として、主に屯所内での雑務をしてもらうことになるから、そのつもりで」

大騒ぎのその場の空気を諌める様に、近藤は咳払い一つしてから言う。

「分かりました」

今はともかく、ここに鉄之介の側にいられるということだけでいい。

どんなことでもやっていける。

芳乃は高鳴る胸に手を置く。

「と、いうわけで話が決まったところで、一つお願いがあるのですが」

相変わらずニコニコと微笑む青年が人差し指を立てる。

「何だ？」

「お芳ちゃんを僕に下さい」

にっこり笑顔で、青年はその指を芳乃に向ける。

「はぁ！？」

思わず土方は素っ頓狂な声を上げる。

芳乃も鉄之介も驚いて青年を見る。

周りの野次馬たちも、一斉に青年に視線を送る。

「あ、やだなぁ。変な意味に取らないで下さいよ？　だから、僕も市村君のような子がほしいんです」

一瞬キョトンとした顔をしてから、青年はケラケラと笑い出した。

「小姓に……ということか？」

近藤は合点がいったとうように、言葉を漏らす。

「そうです。だって土方さんには市村君ていう小姓がいるし、近藤さんにも野村君がいるでしょう？」

（鉄ちゃんが土方さんの小姓？）

沖田の言葉に芳乃は驚いて鉄之介を見る。
鉄之介は芳乃の視線には気付かず、丸い目をして青年を見ている。
「ほら、特に僕の場合はこの頃療養中で、身の回りの細々したことを頼む相手がほしいわけです。だって、いきなりお菓子が食べたくなる時だってあるじゃないですか」
「それはお前だけだろうが」
何の脈略もなさそうなその台詞に、あきれ返った顔で土方が突っ込みを入れる。
「ともかくどうも皆、菓子を買ってきてくれと頼むと嫌そうな顔をするし。その点、お芳ちゃんは女子だしとても頼みいいわけです。もちろん、その他諸々お願いしたいこともありますし。どうでしょうか？」
「ふむ。まあ、よかろう。確かに一理ある。そういうことでいいかな。お芳さん」
「はい。私は構いません」
近藤の視線を受けてとり芳乃は頷く。
いいもなにも、芳乃には拒む権利はないはずだ。
「ふふ。じゃあ、これからよろしく。お芳ちゃん」
「は、はぁ……」
青年が差し出した手を芳乃は取る。
（ところでこの人って何者？）
にこにこと微笑む青年を前に、芳乃は首を捻る。

こうして芳乃は無事（？）に新撰組入隊を果たし、小姓兼雑用係となったのだった。

## 狼の住処！？（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 狼の住処！？（1）

世の中は厳しい。
そう実感するのに、芳乃は三日とかからなかった。

「沖田先生っ！　何をしてらっしゃるんですか！？」

スパーンと障子を開け放ち、芳乃は外にいる沖田に向かって叫ぶ。
どうも静かすぎると、部屋を覗いてみれば案の定だ。

「鬼ごっこですよ。お芳ちゃんも入りますか？」

まったく悪びれる様子もなく沖田は上機嫌で言葉をかける。

「入りません！　お願いですから、ちゃんと寝ていてください。薬もちゃんと飲んでくださいよ！」

近所の子供らと駆け回っている沖田に芳乃は懇願する。
沖田総司（おきたそうじ）。
新撰組一番隊隊長。
道場にやってきた青年のことを、そう説明してくれたのは鉄之介だった。

「沖田先生は、新撰組一の剣の達人でいらっしゃるんですよ。近藤局長や土方先生とは、新撰組結成前からの旧知の間柄で、皆が一目置いている人なんです」

そう言う自分も憧れているのですが、と、鉄之介は照れくさそう

に笑った。

「けれど、今は胸を患ってらっしゃって療養中なのです。幾度か喀血されたこともあって、今は絶対安静だとか」

鉄之介のその言葉で合点がいった。

沖田のあの尋常ではない白さは、病からきているのだ。

芳乃は曲がりなりにも医者の娘。

いくら元気そうに見える沖田でも、それがどれほど悪いのか、その顔色を見れば分かる。

喀血を何度もしているとなれば、甘く見ていい状態ではない。

ないのだが、沖田は大人しく寝ていてはくれない。

医者からだされた薬も、素直に飲んだためしがない。

今も枕元に手付かずの薬の包みがあった。

沖田はちょっと目を離すと、飲まずに捨ててしまう。

その行動はまるで子供そのもだ。

そんな人が隊の隊長。

その上、剣の達人などとは到底信じられない芳乃だった。

「沖田先生！」

一向に鬼ごっこをやめない沖田を、芳乃は鬼の形相で睨む。

「怖いですよ、お芳ちゃん。何だか土方さんに似てきましたね」

やっと戻ってきた沖田は縁側に腰をかけてクスクスと笑う。

「それだけは嫌です……」

土方歳三。

彼が鬼副長と呼ばれ、隊員の間でも恐れられているということもだんだんと分かってきた。
ただし、恐れているほかに憧れている者もいる。
例えば、市村鉄之介。
芳乃にしてみれば、土方はとても印象のいい相手ではない。
今も土方は芳乃の一番の天敵だ。
はっきりいって嫌いな相手。
それなのに、何の因果か鉄之介は土方を心底心酔している。

「あの方は僕の理想なんです」

そう熱く語る鉄之介の瞳は輝いている。

「鉄ちゃんがあんな風になるのは絶対に嫌だわ……」

それを思い出して芳乃は思わず呟く。

「ふーん。この頃、市村君に会えないからお芳ちゃんは怖い顔になっているのかな」
「なっ！？　ち、違いますよ」

と、慌てて首振ったが、それが不満の一つであることは確かだ。
新撰組に入隊して暫くは、鉄之介も気にかけてちょくちょく顔を出してくれていたのだが、ここ暫くは言葉すら交わしていない。

「いいですよ。隠さなくても。お芳ちゃんは市村君を好いているのでしょう？」

芳乃の顔を覗き込んで、沖田はすんなりと言い放つ。

「そ、そんなことは！　鉄ちゃんとは幼馴染でそれだけのこと……です！」

シドロモドロになりながら、芳乃は言葉を吐き出す。

「そんな真っ赤な顔をしていっても、説得力にかけるんですけどねぇ」

誰が見ても分かるほど赤い顔をしている芳乃を見て、沖田は耐え切れずに噴出す。

「お、沖田先生！」

「ごめん、ごめん。でも、そうだよね？　もしかして、新撰組に入ったのも市村君のためじゃない？」

「……」

沖田の瞳を受けて芳乃は答えに詰まる。

「おかしいと思ったんです。いくら身寄りがないからといって、新撰組に入隊しようだなんて。こういっちゃあなんですが、ワザワザ江戸から来てまであなたのように若い女子が身を寄せるような場所じゃない。最初は、どこからかの間者かなにかだと思ったんですがね」

「違います！」

思わぬ言葉に芳乃は強い口調で否定する。

「分かっていますよ。見る限りそれらしい動きはまったくないですし、お芳ちゃんのその性格じゃあ、馬鹿正直すぎて到底務まらないでしょうしね」

「それってどういう意味ですか？」
芳乃は頬を膨らませ沖田を見る。
「怒らないでくださいよ。それにしてもこんなとこまで追いかけてきちゃうなんて、お芳ちゃんは本当に市村君が好きなんだね」
そう言った沖田は柔らかい笑みを浮かべている。
からかいや嘲りではない、温かな笑顔だった。
それを見て思わず芳乃はポロリと言葉を零す。
「……鉄ちゃんは私にとって『特別』なんです」
「特別？」
「あ！　それより、薬を飲んでくださいよ。話をすり替えて誤魔化してないですか？」
「あはは」とわざとらしい笑い方をする沖田に薬の包みを手渡す。
「だってすごく苦いんですよ、コレ」
二十歳すぎの男とは思えない情けない目で沖田は芳乃に訴える。
「良薬は口に苦しです。沖田先生だって、一日も早く直りたいでしょう？　そのためには、きちんと薬を飲んで安静にすること。それが一番なんですから」
子供を諭すような柔らかな口調で、芳乃は言う。
「直りますかね」

フッと表情を翳らせ、沖田は小さく笑う。

「直ります！　弱気は損気です！　ダメですよ。絶対に直すんだって、強い意志がなければ」

芳乃は両手をグッと握り締めて力説する。

「あはは。そうですね。お芳ちゃんの言うとおりです。がんばります」

そう言うと、沖田は薬の包みを開き一気に飲み下した。

## 狼の住処！？（2）

沖田の部屋を出て芳乃はソッとため息を付く。

新撰組に入隊して数日が経とうとしていた。

ココで暮らすのは想像していたよりずっと大変だ。

ともかく雑務が多すぎる。

沖田の身の回りの世話から、その他の隊士の食事の支度。

掃除や洗濯。

江戸に居た頃は、父と自分の二人分でよかった。

それがここではその数倍。

半端な仕事量ではない。

そして加えて……。

「お芳ちゃん」

（来た）

芳乃は大きくため息を付く。

「どうしたの元気ないな。そうだこれから茶店にでも……」

「行きません」

「じゃあ、そこいらに散歩に……」

「まだ仕事が残っているので失礼します」

男の言葉を遮って、芳乃はスタスタと歩き去る。

そう。屯所に入ってから、やたらと馴れ馴れしく言葉をかけられる。

昼間はまだいい。
問題は夜だ。
芳乃の寝間は建物の奥にある。
近くには近藤や土方。沖田など、幹部クラスの部屋が連なっている。
始めは新入隊士である自分の部屋がなぜ？　と首を傾げたが、その理由はすぐに発覚した。
初日、部屋に戻ろうとしたその時土方が芳乃にこう言った。
「言っておくが自分の身は自分で守れ。とりあえず、短刀の一つも布団に忍ばせておくんだな」
「はい？」
わけが分からない芳乃に、土方はそれだけ言い残し自分の部屋に帰っていった。
ネズミでも出るのかと思い、芳乃は首を傾げつつ短刀を握り締めて寝た。
と、その日の夜に障子越しに小さな悲鳴が聞こえた。
驚いて芳乃が出てみると、そこには土下座する若い一人の隊士と、それに刀を突きつける土方の姿あった。
「も、申し訳ありせん！」
若い隊士は床に頭を擦り付けてガタガタと震えている。
「あの、一体どうしたのですか？」
驚いて芳乃は土方に問う。
「夜這いだよ」

「え！？　土方さんにですか？」

土方の答えに、芳乃は驚きの声を上げる。

「馬鹿か。お前にだ」

「……わ、私！？」

思わず自分自身を指差して確認を取る。

「へぇ。ここなら、僕も土方さんもいるし来る人もいないと思っていたんですが、いい度胸ですねぇ」

同じく起き出して来た沖田が、クスクスとおかしそうに笑う。

「たくっ。来るなら来るで、もっとうまく忍び込めばいいものを。気配で目が覚めちまったじゃねぇか」

不機嫌極まりない様子で土方が言葉を吐く。

「ちょ、うまく来ればいいものでもないでしょう！？」

思わず芳乃は叫ぶ。

下手をしたら、自分は襲われていたのかもしれないのだ。

そう考えて芳乃はゾッとする。

「だから言っておいただろ。自分の身は自分で守れと」

平然と土方は言う。

その台詞で、土方の言ったことを思い出す。

なるほど。そういうことだったのか。
短刀で戦う相手は夜這いをしにくる不届き者。
それにしても、自分に夜這いをかけようなど考える輩がいるとは思いもしなかった。

「けっこう目を付けられてますから、気を付けて下さいね」

首を傾げる芳乃に、沖田がコソリと耳打ちする。

今まで男所帯だった屯所に、突然女子が乱入してきたのだ。
色めき立つのも無理はない。
それなりの地位にある者は祇園や色町で女には不自由はしていないのだが、問題は入隊してまもない下っ端たちだ。
京に不慣れな者たちは、特定の恋人もおらず、祇園など高級すぎて足を踏み入れることも出来ない。　まして、女を買うことなど到底無理な話。
そんなところに飛び込んできた芳乃は、まさしく鴨が葱をしょってやってきたようなもの。
幼さは残るものの、本人に自覚はないが芳乃はそれなりに整ったかわいらしい容姿をしている。
若い隊士たちにとっては、捨て置けない相手というわけだ。
それを見越して、土方や沖田の配慮によって、芳乃の部屋は平隊士がおいそれと足を踏み入れられない、幹部の連なる一角に置いたのだった。

「とりあえず、今回だけは見逃してやる。ただし次に来た者は、士道不覚悟で叩き斬るから、そのつもりでいろ」

刀を鞘に収め、土方は低い声音で言い放つ。

「は、はい！」

若い隊士は、転がるように逃げていった。

「どうやら近藤さんは起こさずに済んだようだな。まったく。てめぇらも、戻って寝ろ」

そう芳乃たちに言葉をかけ、不機嫌面を下げて土方は部屋に引き上げる。

「それじゃあ、くれぐれも気をつけて」

くすくすと笑いながら、沖田は芳乃の肩をポンポンと叩く。

「気を付けるといっても……」

芳乃は途方に暮れる。

それから、芳乃は安眠出来ない日々が続いている。

土方の脅しが効いたのか、それ以来不埒者は現れていないが気は抜けない。

おかげで寝不足は否めない。

芳乃は思わず欠伸をする。

と、背後に人の気配を感じた。

「いい身分だな。芳坊」

その声が誰なのか。

芳乃には分かっていた。

振り返ると、想像通りの人物。

なるべく出会いたくないその相手の姿に思わず眉を顰めた。

## 出会い（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 出会い（1）

「何度もいいますが、その呼び方やめていただけませんか？」

現れた天敵を睨んで芳乃は言う。

「いいから、サッサと仕事をしろ」

「分かっています。これからお使いに行くところです」

沖田に頼まれて菓子屋に行くのだ。

後には、夕餉の支度やら仕事が山とある。

「なら、そんなところで欠伸をしている場合じゃねぇだろうが」

「土方さんこそ、仕事はないんですか？」

「山とあるさ。けどな、仕事をしない隊士を注意するのも仕事のうちだ」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「そうですか。それじゃあ、私は忙しいので行きます！」

芳乃はスタスタと歩き出す。

「外で油を売るなよ、芳坊」

「〜っ！」

芳乃が嫌がるのを知っていて、土方はワザとそのあだ名で呼ぶ。

土方曰く
『男を打ち負かすなんざ女じゃねぇよ。芳乃なんて女っぽい名前はもったいねぇ。芳坊で十分だろう』　だそうだ。
近頃は幾人かが真似て『芳坊』の名が定着しつつある。
その一件の所為もあり、芳乃の土方嫌いは益々強くなるのだった。

外は太陽がジリジリと照りつける。
普通に歩いているだけでも、汗がジットリと滲んでくる。
額の汗は拭っても拭ってもキリがない。

「どうしてこんなに暑いのよ」

芳乃は八つ当たり気味に空に向かって言い放つ。
何だかクラクラする。
寝不足な上にこの頃疲れ気味で、食事もあまりのどを通っていない。
元気がとり得の芳乃だが、新撰組入隊してから体調はいいとは言い難い。
けれど弱音を吐いている場合ではない。
無理に入隊を頼んだのは自分。
ここで泣き事をいえば、土方や自分をよく思わない一部の隊士はここぞとばかりに自分を追い出そうとするだろう。

「よし！　がんばるぞ」

萎えてしまいそうな気分を奮い立たせ、芳乃はグッと両手に力を入れる。

「えっと。どこの道だっけなぁ」

気合を入れたのはいいが何も考えずに歩いていた。

目的の菓子屋への道順を一生懸命思い出そうとする。

なにせ、京に来て数日。

やっと屯所内の造りを覚えたところで、京の街中は不慣れだ。

それでなくとも芳乃はけっこうな方向音痴でもある。

沖田に前にも一度お使いを頼まれて、昼近くから出て帰りは夕暮れになってしまったということもあった。

それ以来、沖田は事細かに道順を教えてくれるようになっていた。

今日もじっくりと菓子屋までの道順を教えてもらったはずだ。

それなのに寝不足でボゥッとしていた所為か、その説明の記憶は薄い。

「えっと。確か、一度大通りに出て……きゃあっ」

慌てて曲がり角を曲がった芳乃は、前から来た男と出会い頭に衝突しとしまった。

芳乃はそのまま弾かれて、その場に尻餅をつく。

「無礼者！」

倒れた芳乃に向かって男が仁王立ちのまま怒鳴る。

「痛たっ……」

倒れた拍子に付いた手のひらに痛みが走る。

「ふんっ。小娘が余所見をしているからだ」

そんな芳乃に向かって、ぶつかった浪士風の男は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「どうしたんですか？」

後から数人の袴姿の男たちが現れる。

「この小娘が、人にぶつかってきたのだ。まったく失礼極まりない」

倒れて怪我をしたのは芳乃の方だ。

相手は無傷で大した衝撃も受けてはいない。

それなのに倒れたままの芳乃を見下して、男は手を差し伸べることもしない。

「確かに私も余所見をしました。けれど、あなたも不用意に飛び出して来たではありませんか」

ゆっくりと立ち上がり芳乃は噛み付くように男に言う。

「なんだと？」

「謝ります。だから、あなたも謝ってください」

寝不足の頭がズキズキと痛み出す。

気持ちがイライラとする。

汚れてしまった着物と手のひらの痛みが、苛立ちを一層強くする。

「ふざけるなっ。俺を誰だと思っている！」

「小娘が生意気なっ」

後ろにいた男たちも芳乃をグルリと取り囲みギロリと睨む。
幾人かは腰に差した刀の柄に手をかけている。
通りすがりの者たちはチラリと視線を走らせてから、逃げるように足早にその間を通り抜けていく。
下手に巻き込まれたら自分の命も危ない。
京では日常的に、斬るの斬られるのということが、町並みで平然と起きていた。
刀を持たない町人たちが身を守るには「関わらないこと」だ。
芳乃の姿を気の毒そうに見ながらも、誰も間に入って止めようというものはいない。

（私は間違っていない）

芳乃はキュッと下唇をかみ締める。

相手が誰だろうと間違っていることは間違っている。
芳乃は引くつもりはなかった。
一歩も引かず、にじり寄ってくる男たちをただ睨むように見ていた。
いざとなれば芳乃も短刀を抜くつもりだった。
いつなにがあるか分からない。
江戸を出る時に買い求めたものだった。
まだ一度も使ったことはないが、いつか使うことはあるだろうと覚悟はしていた。
無意識に手を胸元に持っていく。

「どうなされたのですか？」

一触即発の雰囲気の中、妙にその場にそぐわない明るい声が響いた。

## 出会い（2）

その場の者が皆、声の主を振り返る。

目元の柔らかい優男風の若者。

年の頃は二十半ばくらいか。

細身の身体をしているが、鍛えられた引き締まった体躯。

周りの男たちと大差ない格好をしているのに、どこかの若旦那かそれとも旗本のお坊ちゃまか、というようなそんな余裕のある雰囲気を持っている。

独特の雰囲気を持った青年だった。

「ああ。藤堂君。いやなに、この小娘が無礼を働いたものでな」

芳乃とぶつかった男がそう言い放つ。

「違います。無礼というのならあなた方でしょう。お互いの不注意でぶつかったのです。お互いに謝りましょうというのに、刀を抜くなどと！」

臆することなく芳乃は周りの男たちを見回す。

「えぇいっ、うるさい！　小娘ごときに下げる頭など持ち合わせておらぬわっ。我を張るというなら、叩き斬ってくれるっ」

男は刀を鞘から半身抜きかける。

「待ってください」

それを藤堂は上から素早く押さえつけて止める。

「藤堂君っ」

男はギロリと藤堂を睨む。

「分かりました。ここは俺がかわりに謝りますから」

「何？」

藤堂の申し出に男は目を丸くする。

「待ってください！　あなたにはっ」

関係ない。

そう言い掛けて、芳乃は言葉を止める。

向けられた藤堂の強い眼差しに圧倒されたのだ。

『黙っていろ』

言葉に出さなくても鋭い目がそう言い放っていた。

（なんて人だろう）

その場の空気を和ませるかのような雰囲気を持ち合わせながら、同時に人を飲み込むほどの圧力を持ち合わせている。

一瞬、芳乃は怒りを忘れて藤堂に見入っていた。

「お嬢さんにも俺が謝ります。どうか、俺に免じて双方引いていただけませんか？」

口調や表情は柔らかでありながら、その目は鋭く相手をけん制している。

「むっ」

その目を向けられて、男は小さく呻き眉を顰める。

その場の空気が一瞬止まる。

「こんなみっとも無い騒ぎ。伊東先生のもっとも嫌うことではないか？」

低い声がその場を一突きする。

見れば藤堂の後にもう一人男がいた。

目元の鋭い冷たい雰囲気の男だった。

藤堂を「陽」とするならば、この男は「陰」

まったく正反対の印象を受ける。

陰のこの男を見たときその冷たい風貌に、芳乃は一瞬ヒヤリと冷たいものを感じた。

容姿そのものは、目元の鋭さ以外際立ったものはない。

ただ、男が纏う空気。

それがどうしようもなく陰気でひどく暗いものに感じた。

それになぜだろう？

鋭い目の先に、どうしようもない憂いを含んでいる。

「斉藤君っ」

男は真っ赤な顔で斉藤と呼んだ陰の男を睨みつける。

「斉藤さんの言うとおりです。周りを見てくださいよ」

声を潜めて、藤堂は男に耳打ちする。
見ると、いつの間にか遠巻きに見物人が出来ている。
その様子に気が付いた男は、ひどくバツが悪そうに言葉を吐き出す。
「ふんっ。馬鹿馬鹿しい。行くぞ！」
今だ柄を押さえつけている藤堂の手を払いのけ、男は踵を返しその場を後にした。
他の者たちもすっかり毒気を抜かれ、苦笑をしつつその後に続いた。

## 出会い（3）

見物人もバラバラと消え去り、後には芳乃と藤堂それに斉藤が残される。

「すまない」

唐突に藤堂は芳乃に頭を下げる。

「え！？　あ、あの？」

芳乃は面食らう。

謝るのは芳乃の方であるはずだ。

あのままいけば、殺傷事件に発展していたのを止めてくれたのだ。

「あの人も決して悪い人ではないんだ。ただ先ほどの集会で不本意なことがあって、少しイライラしていたのだと思う。だからあの人を許してやってほしい」

「あ、いえ。私も少し……というかかなり、意地になってしまって。反省しています」

相手も悪いが、自分に非がないのかといえばそうでもない。

もう少し言い方を変えていれば、あんな険悪にならずに済んだかもしれない。

しゅんとなる芳乃を見て藤堂は小さく笑う。

口の端に八重歯が除く。

「？」

その笑みの意味を捉えかねて芳乃は小首を傾げる。

「いや、先ほど啖呵を切るあなたを見た時、なんて度胸の据わった子だろうと思ったけれど、こうして話をしてみれば、普通の可愛い女子なのだなと思って。あなたはおもしろい子だね」

そう言った藤堂の目は柔らかく人懐っこいものに戻っている。

（人のこと言えるのかしら？）

あの場を丸め込んだ気迫。

今の藤堂の姿からは想像も出来ない。

今目の前にいる藤堂は、気のいい好青年といった感じで、争いごととは無縁の平和そうな雰囲気を醸し出している。

「自己紹介がまだだったね。俺は藤堂平助（とうどうへいすけ）。こう見えても、津藩主藤堂和泉守の落胤ていう、由緒正しき血筋なんだ。今は高台寺でさっきの方々なんかと、ある先生の下で生活をしている」

好青年の言葉に芳乃は驚いて目を見開く。

「落胤」

つまりは津藩主の子供だということだ。

はっきりとした身分はもらえないにしろ、半分は高貴な血が流れていることになる。

そんな大それた話、とても信じられるものでもない。

それでも、「もしかしたら」と思ってしまうのは、藤堂のすれた

雰囲気のない屈託のなさと、人を魅了する生まれながらの雰囲気を目の当たりにしている所為かもしれない。

「藤堂君。あまりそういうことは……」

横から斉藤と呼ばれていた男が苦い顔をしている。

「なんだい。いいだろ。本当のことなんだし。といっても、斉藤さんは信じてないんだよな俺の話」

「いや、そうは……」

「目が言ってるよ。誰も知らないのをいいことに、でかい話をでっち上げたもんだって」

「だから、そんなこと……」

「いいさ、いいさ。信じなくても何でも事実は事実なんだしな」

斉藤の言葉は最後まで続かない。

藤堂が最後まで聞かないのだ。

おかげで斉藤の言葉は中途半端に終わっている。

ついには言葉を口にすることを諦め、斉藤はため息で話を切り上げる。

「あ、そうそう。この人は斉藤一さん。この人も俺の仲間なんだ」

「……」

斉藤はただ無言でいる。

芳乃に視線を向けようともしない。

「この人は無口だから。あんまり気にしないで」

何も反応を示さない斉藤の代わりに藤堂が苦笑して言う。

けれど、無愛想だとかそういうことではない。
はなっから芳乃という存在を無視しているのだ。
気分がいいはずがない。
好かれたいわけではないにしろ、無視されるとなると腹立たしい。

（別にいいけれど）

人にはそれぞれ相性というものがある。
どうやら芳乃と斉藤の相性はよくないらしい。
それならばそれで、無理をして仲良くする必要も無い。
芳乃も無言のまま、斉藤から視線を外す。

「君の名前も教えてもらっていいかな」

「はい、私は宮崎芳乃といいます」

軽く頭を下げて芳乃は名を告げる。

「そうか。お芳さんか。良い名だ。時にお芳さんは……」

グラリ。

唐突に視界が曲がった。
足に力が入らず芳乃はその場に崩れ落ちそうになる。

「大丈夫かい！？」

素早く藤堂は芳乃に手を差し伸べ、引きとめる。

「すみません……」

頭がクラクラとして自分の声が遠くに聞こえる。
気持ちが悪い。
遠ざかりそうな意識の中、芳乃は必死に立ち上がろうとするが、手に足にもまったく力が入らない。　支えてくれている藤堂の腕がなければ、芳乃は間違いなくその場に倒れ込んでいただろう。

「まだ動かない方がいい」

有無を言わさない力強さでそう言い放つと、藤堂は近くにあった大きな木の下まで芳乃を運び、幹に寄りかからせる。

「ちょっと待っていたまえ。斉藤さん。彼女を見ていてくれますか？」

斉藤は小さくため息を付く。
それを返事と受け取って、藤堂はサッと駆け出していった。

## 出会い（4）

（困ったなぁ）

藤堂が駆けていってしまって、後には芳乃と斉藤の二人が残る。
グルグルと回る意識の中、言葉一つ発さない寡黙な男を前に、芳乃はどうしようもない居心地の悪さを感じていた。
間違いなく斉藤の存在がこの場の空気を更に重たいものにしている。

「……」
「……」

まるで何かの我慢比べのようだ。変に張り詰めた空気がその場を支配している。

「……俺のことは気にするな」
「……」

その場の気まずさを感じ取ったのか、斉藤がボソリという。

気にするなと言われれば、余計に気になってしまうのが人の心理というものだ。
一言発した後、斉藤は芳乃には目もぐれずその場に立ったまま、どこか遠くを見ている。
芳乃の存在を忘れ去り、自分の思いにふけっているようだった。
その瞳は相変わらず暗く冷たい。

斉藤はすべてを包み込む闇夜を思い出す。
光とは決して交わることが出来ない闇。
好もうが好まないが闇は光とは交われない。
それをこの男は愁いでいるのだろうか。

芳乃には斉藤が何か黒く重いものを背負い込んでいるように見える。
藤堂が生粋の明るさを持つように、斉藤は元来の闇を持ち合わせている。
けれどそれ以外に、もっと違う何かが斉藤にはある。
暗さ冷たさ。
その奥に秘められた愁い。

「……どうしてそんなに悲しそうなの？」

その姿を見てぼんやりと芳乃は呟く。

口に出すはずではなかった。
というか、芳乃自身は声に出したつもりもなかったのだが、それは言葉として外に飛び出していたらしい。
斉藤は始めて芳乃に顔をを向け、愕然とした表情で目を見開く。

（ああ、そうか）

その表情を見て思い出したのは、死んだ父のこと。
斉藤はどこか父に似ている。
姿かたちではない。
その雰囲気がだ。

母が死んでから父もこんな風に、ふとした瞬間に遠くを見る時が

ある。
そんな時、芳乃は決まって怖くなる。
遠くを見る目はどこか暗く、いつも陽気な父とは別人に見えた。
芳乃が見えない何かを見ている。
それがどうしようもなく怖くて寂しかった。
斉藤を見ていると、思い出したくない父のその姿を思い出してしまう。
だから、斉藤に向けた言葉は、芳乃がいつも心の中で父に問いかけていた言葉だった。
「……知ったようなことを言うな」
斉藤がそうはき捨てる。
「あ……」
何か答えようとしたその時、視界が遠のく。
暗転。
芳乃はそのまま意識を手放していた。

## 出会い（5）

「大丈夫？」

気遣わしげな優しい声。

目を開けると、そこに険しい顔の藤堂がいた。

「私……」

額に冷たい感触があった。

「手ぬぐいを井戸水で冷やさせてもらってきた。少しは涼みの足しになるだろ？」

覗き込む藤堂の顔から汗が滴り落ちていく。

どうやらこの炎天下の中を走って戻ってきてくれたらしい。

「ありがとうございます。すごく気持ちいいです」

その心遣いが嬉しくて、芳乃から自然と笑みが零れる。

「あれ？　あの方は……」

先ほどまでの場所に斉藤の姿は無い。

「ああ。俺が帰ってきたらすぐ『用事があるから』と帰った。あの人も忙しい人だから」

そう言って藤堂は苦笑する。
芳乃は斉藤の言葉を思い出していた。
『知ったようなことを言うな』
斉藤は確かにそう言った。
あれはどういう意味だったのか。
自分はあの人を傷つけてしまったのだろうか？
斉藤の瞳がひどく心に突き刺さっていた。
「しかし、いくらこの暑さとはいえ倒れるなんて、相当無理をしてきたんじゃないか？」
ぼんやりと考えていた芳乃は、藤堂の言葉に我に返る。
「そうかもしれません。まだ京に来て日が浅く馴れないことも多くあるものですから」
「ああ、そうか。どうりで、君には京訛りがないと思った。それで、お芳さんはどうして京に？　住まいは何処なんだい？」
その言葉に一気に現実に引き戻され、サーと青くなる。
一連の騒ぎで忘れていたが、こんなところでのんびりとしていられる身分ではなかったのだ。
「私、お使いの途中で。どうしようっ。早く帰らなきゃ！」
鬼副長の眉間に皺を寄せた顔が思い浮かぶ。
まだ洗濯が半分以上残っているし、夕飯の下ごしらえだって何も

していない。
やることを思い返して芳乃は青くなる。
「もう少し安静にしていなければ」
立ち上がりかけた芳乃を、藤堂は慌てて押さえ込む。
「いえ。もう本当に平気ですから！　まだ店にも行っていないのに……」
気が付けば日が少し和らいできている。
今どれくらいの時間なのか、とりあえず一刻はたっているはずだ。
これ以上休んでいる時間はない。
「うむ。分かった。俺が君のお使いをしてきてあげるから。その時間だけでも、休んでいてくれよ」
ほんの少し考え込む仕草をしてから、藤堂はニッコリ微笑んで言い放つ。
「えぇ！？　そんな」
藤堂の言葉に芳乃は目を丸くする。
「いいから。ほら、どこに行けばいいだ？」
「だめです！　こんなよくしてもらって、更に迷惑なんてかけられません」
「俺がいいって言ってるんだ。このまま君を行かせて、途中で行き倒れ。なんてことになったら、余計に迷惑なんだ。ほら、早く言って」

強い口調でそう言われて、とうとう芳乃は根負けする。
仕方なく、行くはずの菓子屋の名前と、買ってくるように頼まれた饅頭を告げる。

「饅頭か」

藤堂は一瞬、妙な顔をする。

「あの……」
「いや。昔の知り合いを思い出したんだ。男のクセに甘いものが大好きなやつでさ。普段は元気なくせに、時々体調を崩して寝込むんだ。そんな時、可哀想に思って何かほしいものがあるかと聞くと、決まって甘い物が食べたいと言い出してさ。よく買いにいったんだよな、饅頭だとか団子だとか菓子類をさ」

そう言って、少し寂しそうに笑う。

「その方、今はどうしてらっしゃるんですか？」

その表情が気になって、芳乃は藤堂に尋ねる。

「さあ。今は全然会っていないから。でも、元気なんじゃないかな。きっとそのうち、再会することになるだろうさ。その時は……」

そこまでで言葉を止めて、藤堂は晴れた空を仰ぐ。

「……」
「いけない！　余計な話をしてしまったね。すぐに戻って来るから」

そう言うと、藤堂はまたも走り去っていった。

藤堂の姿が見えなくなると、芳乃は額に乗せられた手ぬぐいにふれる。

一時の休息。芳乃は心地よさに身を任せ目を閉じた。

## 出会い（6）

「本当に何から何まですみませんでした」
「もういいってば。俺が勝手にやってることなんだし」

帰り道すがら、芳乃は幾度と無く藤堂に礼を言う。

「でも、何度言っても言いたりません」

危ないところを助けてもらった上に、倒れた自分を介抱してくれて、その上お使いまで代わりにしてきてくれた。
そして今は、「心配だから」と途中まで送ってくれている。

「ところで家はどこなんだい？　さっき聞きそびれてしまったからね」
「はい。新……」

”新撰組の屯所”

と言いかけて、芳乃は慌てて口を噤む。

「滅多なことでは新撰組の名を出すな」

土方にきつく言われていることだった。
新撰組は、常に倒幕派や尊皇攘夷派に目の仇にされている。
下手に新撰組の名を出せば、それだけでいらぬ争いの種になる。
今はまだ「仮隊士」である以上、おいそれと新撰組隊士であることを触れ回るべきではないという。

「しん？」

途中で言葉を切った芳乃を見て藤堂は首を傾げる。

「あ、えーと。しん……そう！　親戚に厄介になっていているのです」

頭の中で考えを巡らせ、芳乃はそう結論付ける。

しかし、あんなによくしてくれた藤堂に嘘を付くことに少しばかり罪悪感が生まれる。

いっそのこと本当のことを話そうかとも思う。

藤堂はいい人だ。

例え本当のことを話しても害になるとは思えない。

「お芳さんは一人で京まで？」

「あ、はい。父も母ももう亡くなりましたから」

「そうか。苦労しているんだな」

しみじみと言う藤堂。

「あの！」

「お芳ちゃん！」

意を決したその時、芳乃の耳に聞き覚えのある声が飛び込んできた。

見ると、声の主が前から駆けてくる。

「鉄ちゃん」

声の主は鉄之介だった。

「どうしてここに鉄ちゃんが？」
「お芳ちゃんがあまりにも遅いので迎えに来たのですよ。出たのは昼過ぎだというのに、こんな時間までどうしていたのですか？」
「あの」
「待ちたまえ。君は彼女が世話になっているという家の者か？」
「え？　ええ」

芳乃の隣にいる藤堂の存在に気が付いて、鉄之介は面食らったように目を開く。

「俺が口出しすることではないが、彼女にもう少し気を使ってあげてほしい。彼女は先ほど倒れたのだ」

心ばかり口調をきつくして、藤堂は鉄之介に言葉を向ける。

「え！？　それは本当なのですか？」
「あ、それは……」

咄嗟に言い訳しようとした芳乃だったが、鉄之介の真摯な眼差しと瞳がぶつかり口ごもる。
もともと嘘を付くことは苦手な性分な上、相手は鉄之介。
容易に言葉が出てこない。

「幸い、大事には至らなかったが、あまり無理はさせぬほうがいいだろう」
「あなたが彼女を助けてくださったのですね。ありがとうございました」
「いや、行きがかり上……な」
「行きがかり？」

「あ、そ、それはっ」

謝れ謝らないで、通りすがりの浪士と口論になった上、乱闘になりかかった。

など、とても鉄之介の耳にはいれられない。

そんなことを聞いたら鉄之介は卒倒するかもしれない。

慌てる芳乃の姿を見て藤堂はクスリと小さく笑いかがみこむ。

（あのことは二人だけの内緒ということで）

耳元でそう囁かれ、あまりの至近距離に芳乃は顔が火照るの感じた。

「まあ、ともかく。迎えも来たことだし俺は帰るよ。それじゃあ」

顔を上げると、藤堂はそういい残してすでに芳乃たちに背を向けていた。

「ありがとうございました！」

慌てて礼を言う芳乃に、藤堂は振り返らずヒラヒラと手を振って答えた。

## 出会い（7）

先ほどまでの焼けるような暑さが和らぎ、少しばかり風もそよいでいる。
心地よいというには湿気がありすぎるが、それでもマシな方だ。
あぜ道を歩く芳乃を、ここち良さそうに揺れる草が時折撫でる。
その感触が幼い時に裸足で駆け抜けた草むらを思い起こさせてなつかしさを感じる。
もちろん一緒にいたのは鉄之介で、そして今となりに居るのも鉄之介。
時も場所も移り変わり、けれどまた出会うことが出来たことが奇跡のようだった。

「やはり、あなたには無理なのではないですか？」

なつかしさに耽っていた芳乃を、鉄之介のその一言が現実に引き戻す。
見れば鉄之介は心配そうな眼差しを向けている。

「そんなことはないっ」
「けれど倒れるなんて……」
「少し気を張りすぎていただけ。大丈夫。すぐに馴れるもの」
「昔からお芳ちゃんは一度言い出したら聞かないのだから」

困ったように鉄之介は笑みを落とす。

「ごめんなさい」
「謝ることではありません。僕はただ心配なんですよ。あなたは女

子だ。男でも過酷な新撰組でつらいのではないかと」
「あの、そのことなんだけど、このことは誰にも言わないでほしいの」

もしもこのことが、土方の耳にでも入ればとんでもないことになる。
厭味を言われるだけならまだしも、下手をすれば除隊されてしまう可能性だってある。

「しかし」
「お願い！　二度とこんなことがないようにするし、絶対鉄ちゃんには迷惑をかけないから」

鉄之介に向かって芳乃はふかぶかと頭を下げる。
地面を見る芳乃の耳に、鉄之介の小さな嘆息が聞こえる。

「僕には迷惑をかけてくれていいです。馴れていますら」
「それじゃあ！」

顔を上げると、苦笑する鉄之介の顔があった。

「今回だけは聞かなかったことにします。ただし、これ以上は無理をしないで下さい。何か困ったことかがあったらすぐに言ってください。僕もなるべく気にかけるようにしますから」
「うん。なるべくがんばってみるけれど、どうしても駄目になったら鉄ちゃんに相談するから」
「いつでもどうぞ」

そう言って、鉄之介は照れたように小さく笑う。
芳乃もつられて笑う。

不思議だった。
鉄之介の言葉でフワリと心が軽くなる。張り詰めていた気持ちが楽になる。

「よう、お二人さん！　逢引か？」

辿り着いた屯所の門の先に見慣れた姿があった。
原田左之助（はらださのすけ）。
芳乃が入隊試験をした時に、散々茶々を入れた人物だ。
彼が種田宝蔵院流という槍の使い手で、組の十番隊隊長だということは数日後に知ったことだ。
近藤、土方とも新撰組結成以来の付き合いで気安く話をしている。
見た感じの粗暴さからは想像も出来ないが、新撰組内ではれっきとした幹部クラスの男なのだ。
なのだが、その行動はとても上に立つ者のすることではない。
普段よく芳乃にちょっかいを出してきて、食事の時間を削るほど忙しく立ち回っている芳乃は何度キレかかったかしれない。
いや実際、キレたことは幾度かあるのだが、心持が広いのか鈍いのか、芳乃の棘のある言葉も原田は一向に気にせずめげない。

「そんなんじゃな……」

原田の言いように、芳乃は言い返そうと言葉を吐き出す。
が、言葉は途切れる。
芳乃は原田の姿を凝視し言葉を無くす。
ついさっきまでの怒りは消え去り、代わりに氷を当てられたかのように心臓がヒヤリと縮こまる。

赤。
血、血、血。

頬に首筋に羽織に袴に。
全身に飛び散ってこびり付いたどす黒い血の赤。

父が医者だった芳乃は見た瞬間に分かった。
それが人の返り血であるということが。
しかも浴びたその量から察するに相手がかなりの出血をしたことが分かる。
一人ではないにしろ、その量は尋常ではない。

「何かあったのですか？」

凍り付いている芳乃の代わりに、隣にいた鉄之介が言葉を吐く。
鉄之介の顔色も心なし青い。
さすがにこんなにも散々たる姿を目の当たりにするのは初めてのようだった。

「あぁ。これな。長州の浪士に襲われたんだよ。たくっ。こっちとら早く切り上げて酒でも飲みに行こうていう話をしてたのによ。おかげで中止になっちまったぜ」

顔にこびり付いている返り血を擦りながら、原田は忌々しげに言葉を吐き出す。

「まったくだぜ。おかげで、一張羅が汚れちまってよ」

原田の隣りにいた男も同じように血を浴びている。
髪を月代にし束ね後ろに垂らしている男はさほど大きくなく、かといって小柄ということでもない。眉はキリリと上がり気味で目は垂れている。

年の頃は原田と同じくらいに見える。
言葉を交わしたことは無いが、芳乃もその男の名は知っていた。
永倉新八（ながくらしんぱち）。
それが男の名前だ。
原田同様、土方たちとは旧知の間からであり、隊の二番隊隊長でもある。
原田とは仲がいいらしく、よく一緒にいる姿を見かけていた。

「相手は……」

声は震えていた。
不思議だった。
暑いはずなのに体の中がシンシンと寒い。

「全員始末したさ。売られた喧嘩は徹底的にやらねぇと」
「当たり前だ。新撰組を舐めてもらっては困る」

何の動揺もない。
平然と二人は言い放つ。
始末した……つまりは殺したということ。

「私、沖田先生のところにいかなければいけないので、失礼します」

素早く一礼し、芳乃は二人の間をすり抜けていく。
ちらりと鉄之介の気遣わしげな視線とかち合ったが、言うべき言葉がみつからなかった。

「やっぱあいつも女なんだなぁ。血ぃ見て恐れをなしたか」

青い顔をして足早にその場を去った芳乃を見て、原田がそう言葉を吐く。

（そんなんじゃないわよ……）

遠くに聞こえたその声に芳乃は心の中で反論する。

怖かったわけじゃない。
ただ、こみ上げてきたのはもっと違う感情。
何と言って表わしたらいいのか分からない。
けれど、ひどく気分の悪いものだった。

## 回顧（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 回顧（1）

「また迷ってしまったのですか？」

沖田の部屋の障子に手をかけたその時、中から笑いを含んだ声が聞こえてくる。

「どうして私だと？」

一応、足音を忍ばせてきたのだがあっさりばれてしまった芳乃は、ばつが悪そうに眉を顰めて障子を開ける。

身を起こしていた沖田は開きかけの本を閉じて、にっこり笑って芳乃を見る。

「気配で分かりますよ。これぐらい分からないようじゃ、新撰組などやっていられませんからね」

飄々としているが、やはり沖田は只者ではないのだ。

こんな風に床につく前、沖田もやはり人を斬っていたのだろうかとぼんやりと思う。

原田や永倉についていた返り血がまざまざと脳裏に蘇える。

「いやだな。そんなに深刻にならなくてもいいですよ。別に僕は怒ったりしませんから」

黙り込んで気落ちしている様子の芳乃を見て、遅くなってしまったことを気に病んでいると思ったのか、沖田は慰めるように言う。

「すみません。遅くなってしまって……」

芳乃は買ってきた饅頭の包みを沖田に差し出す。

「どうしたのですか？　本当に顔色が悪い。僕も色々と我侭ばかり言っているし、何かとお芳ちゃんに負担をかけているんですよねぇ。きっと」

わざとらしく着物の裾で涙を拭う仕草などしてみる沖田。

「そうじゃありません。そうではなくて、何だか色々なことがあって少し疲れているのかもしれません」

そんな沖田を意に介さず、芳乃はボソリと言葉を吐く。

（うーん。これは）

沖田はポリポリと頬を掻く。

「では、私はまだ仕事が残っていますので」

「あ、お芳ちゃん」

部屋を出ようとした芳乃を沖田は引き止める。

「はい」

「今日の夜、東の対の庭に出てみてください。星がとても綺麗ですから」

にこにこと微笑み沖田はそう告げた。

## 回顧（2）

満天の星が煌いていた。

別にどこに行くつもりはなかった。

夜中にふと目が覚めて気が付いたら外に出ていた。

帰りたいと思った。

思っただけだった。

そのつもりだったのに、思った途端に足は外を向いていた。

帰りたい。帰りたい。帰りたい。

そんな思いに駆られて星空の下、懸命に歩いていた。

草履も下駄も履かず、けれどそんなこと気にもならなかった。

薄手の寝巻き一枚でも不思議と寒さも感じない。

今が真夜中で、もしかしたら野犬が出るかもしれないとか、暗闇に足を取られて怪我をするかもしれないとか、そんなこと考えもしなかった。

ただ、帰りたかった。

『どこに行くの？』

そう声をかけられたことさえ気づきもしなかった。

『危ないよ。帰ろう』

その言葉も、「煩い」と感じた程度だった。

『ねぇっ！』

腕を掴まれ引き止められ、相手を振り返る。
そこにいたのは小さな男の子。
今にも泣き出しそうになりながら、けれど懸命に泣くまいと堪えているようだった。

『離して。私、家に帰るのよ』

その子を睨みながらその手を振り解き、言い放つ。

『どうして帰るの？』
『……』

悲しそうな顔で問いかけられて、答えを返すことが出来なかった。

『父上と母上に会いたいんだね』
『……』
『父上と母上が恋しくなったのでしょう？』
『違う……』

沈黙し続けて、その質問で芳乃は弾かれたように否定する。

『寂しいの？』
『そんなんじゃないもの！』

大きく頭を振る。

『じゃあどうして？　僕のおうちは嫌い？』

そこで初めて気が付いた。
男の子の名前を。
鉄之介。
自分と同い年の男の子。
『ねぇ、嫌い？』
瞳を潤ませてそう聞かれ、芳乃は小さく頭を横に振る。
途端に鉄之介は笑顔になる。
『ああ、よかった。ねぇ、一緒に帰ろ』
『……どうして？』
ぼそりと呟くように言葉を紡ぐ。
『？』
『どうして、追いかけて来たの？』
鉄之介はとても怖がりだ。
夜に一人で用足しにも出られない。
夜、外に出る時には必ず誰かが一緒にいる。
現に一緒に来て欲しいと頼まれたことだってある。
なのに、鉄之介は自分を引き止めにここまでやってきた。
木の葉が風に揺られただけでも泣き出しそうになる怖がりが、明かり一つない暗闇の中を。
問いに、鉄之介はいつもの笑顔であっさりと答える。

『だって、お芳ちゃんは僕の家族だもの。いなくなったら嫌よ』
『……いなくなったら悲しい？』
『うん』

そう答えて、芳乃の手を取る。

その温かさは芳乃の氷のように冷たい手を包み込む。
鉄之介に手を引かれながら、芳乃はポツリポツリと言葉を零す。

『あのね、母上は病気なの。父上は母上のかんびょうをしているの。
だからね、いい子で待っていると約束したの』
『うん』

芳乃の言葉に鉄之介は頷く。

『でもね。本当は帰りたかったのよ』

帰りたかった。
ただ、父と母の側にいたい。
母の病気が悪い。
そのことは芳乃にも分かる。
けれどそれで納得するには芳乃は幼すぎた。
押さえ込んだ感情は、突如として溢れ出し止められなくなった。

『父上と母上に会いたいよぉ……』

呟いた言葉は途中で嗚咽に変わる。

『お、お芳ちゃん』

立ち止まった鉄之介が見たのは、涙があふれ出している芳乃の姿だった。
そんな姿を見て、鉄之介はあたふたとする。
芳乃が泣くところなど始めてみた。
いつも気丈で、転んで血を流しても近所の意地悪な男の子にからかわれても、口をキュッと結んで、絶対に涙など見せなかった。

『一人ぼっちは……嫌なんだもの……』

俯いた芳乃の頬を、涙が伝い地面に落ちていく。
涙を流しながらも、必死でそれを食い止めようと努力はしているらしい。
下唇をきつくかみ締めているのが見える。

『あのね。あのね。泣きたいときにはおもいっきり泣いていいんだよ。母上がいっていたもの。泣くことは悪いことではありませんよって』

それはすぐに泣き出し弱虫とからかわれてひどく落ち込んでいた鉄之介に、母親が言ってくれた言葉だった。

『ひっく。ふ、ふぇーんっ！』

鉄之介の言葉に、芳乃は火が付いたように泣き出す。
小さな身体のどこにそれほどの水分が入っているのだろうというほど、芳乃は泣き続けた。
その間、鉄之介はただ芳乃の手を握り締めて黙って待っていてくれた。
もっとも、あまりの激しさに最初の方は驚いて固まっていただけなのだが。

どれくらい泣いただろう。
やがて芳乃は手の甲で涙を拭き取り、泣いたために赤くなった鼻を啜り上げる。

『ごめんなさい……』

あまりの恥ずかしさに顔を上げられない。
いくら泣いてもいいといわれたにしても、ずっと声を張り上げ泣いていたのだ。
呆れられているに決まっている。

『どうして謝るの？』
『だってずっと待たせてしまったし』

おずおずという芳乃に鉄之介は首を振り言葉を紡ぐ。

『あのね、僕が側にいるよ』
『え？』

その唐突な言葉に驚いて芳乃は顔を上げる。

『お芳ちゃんの父上と母上にはなれないけれど、僕が変わりに一緒に居るから。寂しくなったら僕のところにおいでよ』

キョトンとしている芳乃に鉄之介は微笑みかける。

『それなら一人ぼっちじゃないでしょ？』
『うんっ』

その言葉に芳乃も微笑みを返す。

久しぶりの心からの笑顔だった。
自分でもどしようもない気持ちを、鉄之介は簡単に解き放ってしまった。
その時にやっと気が付いた。
泣き虫の少年は、誰よりも優しさと強さを持っているのだと。
それが、鉄之介が『特別』になったきっかけだった。

## 回顧（3）

風が通り抜け、髪に差した簪を揺らしていく。
あの時は夏の終わりの肌寒い季節だったが、今は夏真っ盛り。
外に出てもさほど寒さは感じない。
十年前の時には、あの後芳乃も鉄之介も風邪をこじらせ大変だった。
それを思い出し芳乃はクスリと笑う。

「お芳ちゃん？」

と、その時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。
振り返ると、鉄之介が立っていた。

「鉄ちゃん？」

まさか会えると思っていなかった芳乃は、一瞬幻なのではないかと疑ってしまった。

「お芳ちゃんも星を見に来たのですか？」
「うん。ここからは星が綺麗に見えるって聞いたから……」

そう言って空を仰ぐ。

そこにあるのは、小さな頃と同じ満天の星空。

「綺麗ですね」
「うん」

どんなことがあろうとも、瞬く星の美しさは変わらない。
時代が変わり、人が変わろうと、やはり星を見て美しいとそう感じることは変わらないだろう。

「憶えていますか？」

空を見上げたまま、不意に鉄之介は芳乃に訪ねる。

「え？」
「ちょうど十年ほど前に、お芳ちゃん夜中に裸足のまま、うちから自分の家に帰ろうとしたことがあったんですよね」
「……憶えていたの？」

てっきり鉄之介は忘れていると思っていた芳乃は、顔を赤くする。

「はい。あれはけっこう思い出深いことでしたからね」

クスクスと鉄之介は笑う。

「何よ。追いかけてきた鉄ちゃんだって、半べそをかいていたじゃないの」
「そ、それは……まだ幼い時の話だし……」

負け時と言い返した芳乃の言葉に鉄之介も赤くなる。

「お互い様」

口を曲げて芳乃は言い放つ。

「そうですね」
鉄之介は何とも言えない顔で頬を掻く。
「あの後、熱を出して大変だったわよね」
「ええ。父上には怒られるし、母上には泣かれるし」
戻る頃には夜が明けていて、家ではものすごい騒ぎになっていた。
その時の光景を思い起こして、芳乃と鉄之介は同時に笑い出す。
なにせ、二人同時に消えたのだ。
やれ神隠しだ駆け落ちだと、話はおかしな方向へと飛んでいて、後一歩で捜索隊が出動するところだったのだ。
「あの時は、鉄ちゃんに本当に迷惑をかけたと思うわ。今更だけど、ごめんなさい」
「いいえ。あの時から、お芳ちゃんは心を開いてくれるようになったんですから。僕は、とても嬉しかったんですよ」
一人でこもっていることの多かった芳乃は、それから鉄之介と外に出るようになった。
そしてそこから、徐々に鉄之介以外とも言葉を交わすようになった。
と言っても、やはり誰よりも鉄之介になついており、もっぱら遊び相手は鉄之介だった。
その所為かどうか、鉄之介と出会って半年で、芳乃はかなり男勝りで活発な少女になっていた。
「あれからもう十年も経つんですよね」

鉄之介の言葉に芳乃は小さく頷く。

離れ離れになって十年。
一緒にいた期間はたったの半年。
それでも、鉄之介の性格はよく知っている。
少し気弱で、けれど優しくて正義感があり真っ直ぐな人。
そしてなにより誰よりも温かい少年。

「あの……」

ずっと聞きたかったことがある。
それを聞くために、芳乃は口を開いた。

## 回顧（4）

「どうして鉄ちゃんは新撰組に入隊したの？」

どこからか一匹、蛍が迷い込んできた。

二人の間を淡い光を放ち通り過ぎやがて消える。

「魂が震える感じって分かりますか？」

蛍が消えた空を見つめたまま、鉄之介は静かに口を開く。

「魂？」

「心よりもっとずっと奥の方が熱くなって、体中が沸き立つような……そんな感じなんです」

「それが、新撰組？」

問いに鉄之介は頷く。

「兄が新撰組に入隊すると聞いて、僕はただそこに付いていっただけなんです。最初は入隊する気などなくて、ただどんなところなのだろうと、興味本位でした」

苦笑を浮かべて鉄之介は頬を掻く。

「けれど土方さんと出会ってあの方の戦いを見たとき、『この人に付いていきたい』　心の底からそう思ったんです。心が……いいえ、魂ごとあの人に惹き付けられ、体中が震えました」

そう言った鉄之介は今までに見たことがないほどに瞳を輝かせている。
その瞳は芳乃を映さず、ここにはいない一人の男を見ている。

ズキリ。

小さく心が疼く。
モヤモヤとする。
どうしようもなく心がトゲトゲしくなっている。
今が夜でよかったと芳乃は心底思う。
自分の歪んだ顔を見られずにすむのだから。

「それじゃあ、鉄ちゃんは土方さんのそばに居たいから、新撰組にいるの？」

思わず少しきつい口調でそんな言葉が口をついてしまう。
言ってから、我ながら馬鹿げた質問だと後悔する。

「もちろん近藤先生や沖田先生その他にも、新撰組にはすばらしい方々がいらっしゃいますし、僕は新撰組が好きだからいるのです。その、もちろん土方先生の側に居たいというのもありますが」

芳乃の問いに鉄之介は少し驚いたように目を見開いてから、穏やかな口調でそう答える。

「ごめんなさい。何だか、おかしなことを聞いちゃったよね」
「いいえ。その、お芳ちゃんは夕刻に見たことを気にしているのではないですか？」
「……」

鉄之介の言葉に、平然と血まみれになっていた原田や永倉の姿を思い出す。

「でも分かってください。京の平和を守るためには、決して奇麗事だけでは成り立たないのです。誰かが汚れた役をこなさなければいけないのですから」

眉を顰め苦渋の表情で訴えるように芳乃に瞳を向ける。

「分かってる。あの時はちょっと驚いただけ。あのくらいで怯んでいては、ここにはいられないもの」

鉄之介に、そして自分自身に言い聞かせるように言葉を吐き出す。

「そうですか。よかった。もしかしたら、帰りたいと言い出すのではないかと思っていたんです」

鉄之介は安堵したように息を吐く。

「……鉄ちゃんは、私がここにいることを反対ではなかったの？」

鉄之介の言葉に目を丸くする。

散々、ここにはいない方がいいというような趣旨の言葉を口にしていたはずなのに。

芳乃の言葉に、鉄之介は「しまった」というような顔をしてから、観念したように口を開く。

「本音をいえばココに居てほしいんです。僕は」

「え？」

思っても見なかった告白に、芳乃はキョトンとして鉄之介を見返す。

「最初は正直、女子がココにいるということ自体妙に抵抗を感じて、それに絶対にココで生活していくなど無理だと思っていたんです……けど」

「けど？」

「この頃は、あなたの姿を見ると安堵するのです。誰よりも元気に仕事をこなしているお芳ちゃんを見ると、僕もがんばらなければと勇気付けられている」

言いながら照れくさいのか、芳乃の視線を避けるように在らぬほうへと視線を持っていく鉄之介。

「私はココに居ます。出て行けって言われたっていきません。ずっと……」

（鉄ちゃんと一緒にいます）

芳乃はそっと心の中で呟き微笑んだ。

## 副長命令（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 副長命令（1）

「さあ！　早く食べてくださいよ。やることが山積みなんですから」

湯気の立つ朝餉を沖田の前に差し出して、芳乃は早口でそう告げる。

「いやぁ、今日は朝から気合が入っているのですね。昨日は、何かいいことでもありましたか？」

キビキビと部屋の片付けをしている芳乃に沖田はクスクスと笑いながら言葉をかける。

「うーん……半分当りで半分はずれです」

『あなたの姿を見ると安堵するのです。誰よりも元気に仕事をこなしているお芳ちゃんを見ると、僕もがんばらなければと勇気付けられている』

昨夜の鉄之介の言葉を思い出し、思わず芳乃の口元は緩む。

我ながら単純だと思うけれど、鉄之介の言葉だけで、いつもの仕事にも数倍張りが出ている。

が、嫌なこともあった。

『土方さんと出会ってあの方の戦いを見たとき、『この人に付いていきたい』　心の底からそう思ったんです』

あの言葉で、鉄之介が土方に心底ほれ込んでいるということが嫌

というほど分かった。
土方には負けたくない。
そんな闘争心から気合も入るというものだ。
もっとも、こんな場所で気合を出しても、土方には到底勝てないというところが悲しいところだが。

「ふぅん。何はともあれ、市村君の力は偉大ですねぇ」

ボソリと呟いて沖田は、うんうんと納得したように頷く。

「え？」

沖田の言葉を耳にした芳乃は、世話しなく動かしていた手を止める。

「いや、こちらの話です」

そうは言うが、沖田の言葉はしっかり芳乃の耳に届いていた。

「……もしかして、沖田先生が鉄ちゃんと会えるようにして下さったんですか？」

もしかしなくてもその通りだろう。
どう考えてもおかしな話だ。
あんな時間に出会うなど偶然にしては出来すぎている。
どうしてすぐに気が付かなかったのだろう。

「沖田先生って、おかしな人ですけど意外にいい人ですよね」

芳乃はしみじみと言う。

「えー。『おかしな人』と『意外に』は余計ですよぉ」

褒められたのだか貶されたか分からないその台詞に苦笑をする沖田。

「だって新撰組幹部なのに全然偉そうではないし、すぐに子供たちを集めて遊びに行っちゃうし、お酒なんかより甘い物が好きだし、その上苦い薬は飲みたくないと駄々をこねるし。おかしな人じゃないですか」

「そんな別に、駄々をこねるなんてそんなことしやしませんよ」

ケラケラと軽く笑い沖田はピラピラと手を振る。

「そうですか。それなら助かります。朝餉の後のお薬、ここに置きますね。食べ終えたら難癖つけずにすぐに飲んでくださいね」

にっこりと微笑み、小さな包みをお膳の端に置く。

「うっ」

沖田は「しまった」と一瞬顔を顰める。

いつもならば忘れたフリをして逃げ出すか、こっそり捨てるか。はたまた理由を付けて回避するのだが、言ってしまった手前、呑まない訳にはいかない状況になっている。

「それでは、お膳は後で片付けに来ます」

「あ、そうそう。言い忘れていましたが、部屋に来るようにと土方さんが言っていましたよ」

立ち上がりかけた芳乃に向かって、沖田は何気ないことのように言い放つ。

「え、えぇっ！　な、何でですか！」

「さぁ？　僕はただ、お芳ちゃんにそう言えといわれただけですので」

お返しと言わんばかりに、にっこり満面の笑顔の沖田。

「さっきの『いい人』は撤回させてもらいます」

天使のような笑顔を向ける沖田に向かって芳乃は恨めし気な目を向けた。

## 副長命令（2）

鳥のさえずりが、微かに部屋の中にも聞こえてくる。
差し込む日差しは部屋を明るくしてはいるが、湿度の高いムッとした空気はいなめない。
部屋の戸を開け放っていても、風一つ入り込んでは来ない。
妙に威圧感を漂わせた部屋の中、芳乃は正座をし目の前にいる男に深く礼をする。

「宮崎芳乃。参りました」

そう言うと顔を上げ、眉根を寄せて不機嫌そうにしている男をチラリと盗み見て、ソッとため息を付く。
こうしてみると、本当に整った顔立ちをしている。
農民の出だという話だが、とてもそうは見えない。
この威厳と風格ならば、身分ある武家の出と言ったところで疑う者はいないだろう。
またはどこかの看板役者か。
悔しいことに、ともかくこの男は人を惹き付ける天性のものがある。

土方歳三またの呼び名を鬼副長。

呼び出しを受けたということは、それ相応の理由があるはずだ。
はずなのだが、芳乃にはその理由が思い当たらない。
何か大きな失敗をやらかした記憶もないし、仕事も稽古も人並みにがんばっているつもりだ。
そりゃあ、粗探しをすれば細かい失敗はやらかしているし、叩け

ば埃の一つも出てくるだろう。
だが、わざわざ副長直々の呼び出し。
まさかそんな細かなことで呼び出しを受けたとは考えられない。
「お前は馬鹿か？」
「はい？」
開口一番、土方に言われた言葉に芳乃は目を丸くする。
思わず土方をマジマジと見返す。
腕組をし、気だるそうに脇息にもたれた土方はあからさまなため息を付く。
「お前、昨日街道で倒れたんだってな」
「えっ！？　ど、どうしてそのことをっ。ま、まさか鉄ちゃんが？」
言われて真っ先に思い出したのは鉄之介のこと。
新撰組内でそのことを知っているのは鉄之介だけのはず。
絶対誰にも言わないと約束してくれたというのに、やはり尊敬する土方には黙っていられなかったということか。
妙に裏切られた気分になってしまう。
「違ぇよ。他からの情報だ。つーか、あいつも知ってやがったのか？　たくっ。どんなことでも報告は怠るなと言っておいたのに」
土方はあっさりと否定して、最後のほうは独り言のようにブツブツと呟く。
「じゃあ、誰がそのことを？」
鉄之介が言いつけたのではないと知り深く安堵したものの、そん

な疑問が残る。
「誰でもいいだろうが。街中にだって隊士は幾人もいるんだ。俺の情報網を甘く見るな」
土方の睨みにハッとして芳乃は両手を握り締める。
そうだ。今は誰からの情報かということが問題ではない。
土方の耳に入ってしまったということが大問題だ。
「も、申し訳ありませんでした！　二度とそんな失態はさらしませんっ。もちろん仕事も手を抜くようなことは絶対に致しません。だから……」
「だからお前は馬鹿だっていうんだ」
芳乃の必死の弁解を遮り、土方は冷たい声で言い放つ。
「え？」
「倒れるほど雑務をしてどうすんだよ。近藤さんはお前になんと命じた？　総司の面倒は見ろといったが、他の隊士の面倒まで見ろとは一言も言っていないだろう。聞けば、洗濯やら個人の部屋の掃除までやってるそうじゃねぇか」
「そ、それは皆が私に頼むから……」
当たり前だと言わんばかりに汚れた着物類を渡され、部屋の掃除も頼まれる。
そういうものなのかと、さして考えもせずにこなしていた。
「そんなもの突き返せばいい話じゃねぇか。馬鹿正直に、いちいち受けてたらきりがねぇだろう。てめぇの洗濯くらいてめぇでさせろ」

「でも！」

ただでさえ『女』の分際で新撰組にいると、冷たい目で見られがちだというのに、そんなことをすれば更に敵を増やすのは目に見えている。

「でもじゃねぇ。いくら雑務をしろと言っても、すべてをやるこたあねぇんだよ。適当に手ぇ抜かなきゃ身体が持たねぇだろうが。大体な、女だからと甘く見るなと言っておきながら、自分が一番女だってことを意識してるんじゃねぇのか？」

「……」

土方の言葉は痛いところを突いてくる。

まさしくその通りなのだから返す言葉がない。

『女』だからと侮られないようにがんばるということは、裏を返せば女だということを意識しているということ。

自分自身が一番引け目を感じているということだ。

「……行くぞ」

黙り込んだ芳乃を見て、土方は徐に立ち上がる。

「え？　行くってどこに？」

「いいから来い」

それだけ言うと土方は部屋を出る。

「ち、ちょっと待ってくださいよ」

サッサと歩く土方の後を芳乃は慌てて追いかけた。

## 副長命令（3）

なにやらおかしな展開になっている。

芳乃は土方の半歩後ろを歩きながら小さく息を吐く。

どこに向かっているのか、土方はまったく答えてくれない。

蝉が力強く鳴き続け、今日も一日暑くなると告げている。

いや、もうすでに十分すぎるほどに暑いが。

街中に入ってからも、土方の歩調は衰えることがない。

屯所を出てから一度も芳乃を振り返ることはせず、ひたすらに自分の歩幅で歩き続けている。

芳乃と土方とでは、その歩幅はまったく違う。

長身の土方が早歩きをすれば、当然小柄な芳乃は小走りにならなければ追いつかない。

涼しい顔をしている土方に対し、芳乃の額にはジットリと汗が滲んでいる。

（一体何なのよ）

いきなり呼びつけられて馬鹿呼ばわりされて、その上訳一つも言わず炎天下の中に引っ張りだされ、どこに行くとも分からない。

こんな理不尽なことがあっていいのだろうか？

飄々と前を歩く土方に蹴りの一つも入れたい衝動に駆られる。

ほどなくして街中を抜けて、ガラリと雰囲気が変わったその場に、芳乃はサッと顔色を変える。

「ここって」

派手な出で立ちの建物。

妙に化粧を塗りたくった女たちが闊歩し、人目を憚ることなく女たちは男にしな垂れかかり、クスクスと妖しい笑い声を漏らしている。

辺りは香の匂いが立ち込め、どこからか三味線や琴の音色が漏れ聞こえてきて、妙な空間を作り上げている。

今まで一度として足を踏み入れたことがなかったが、さすがに芳乃にもそこがどういう場所なのか分かった。

そこは『花街』といわれる言わば男たちの天国。

男は金を出し女を買い一時の温もりを求める。

女は金と引き換えに男に一時の休息を与え情熱を注ぐ。

「ひ、ひ、土方さん！」

思わず素っ頓狂な声を上げ、前を歩く土方の袖を掴み引き止める。

「なんだよ」

不機嫌な顔をして、土方は初めて芳乃を振り返る。

「あ、あの。ここって……」

「上七軒だ。俺の行き付けの店がここにあるんだよ」

真っ赤になって声を上ずらせる芳乃に向かって、平然と土方は言い放つ。

「い、行き付けて……」

この場所で『店』といえば、多分……いやほぼ確定で床を共にする相手がいる場所ということになる。
なにせここは『花街』
まさかここまで来て、酒の一杯で終わりということもありえるはずがない。

「ほら、行くぞ」

捕まれた袖を鬱陶しそうに引き戻そうとするが、芳乃はそれを離そうとはしなかった。

「す、すみません！　私が至らなかったところもあったと思います。土方さんにも少しは迷惑をかけていたのだと思います。心の中では悪態を付きまくっていたし。ともかく、全部謝りますから！」
「おいおい。なんだよ。唐突に」

土方は急に捲し立て始めた芳乃の姿に面食らう。

「それにしてもいくらなんでもひど過ぎます。怨みますからね！？生霊になって枕元に立ちますよ！！」

芳乃は半泣きになりながらそういい募る。

土方はこの『花街』のどこかの店に自分を売るつもりなのだ。
最初から芳乃のことはいいように思っていなかった訳だし、今回のことがいい口実になったということだろう。
人が必死でがんばっているというのに、いくらなんでもあんまりだ。
こんな自分を見たら、天国の両親がどんなに悲しむことだろう。

それに、せっかく再会出来た鉄之介とももう会えなくなってしまう。
会いに来てくれたとしても、合わす顔がない。
昨日の星空の会話が最後なんてひどすぎる。
しかも聞いたのは、目の前にいる鬼副長を褒めちぎる言葉だなんて。
一人さめざめとする芳乃。
「は？」
だが、聞いた当の土方は目を丸くしている。
「とぼけないでください！　土方さんは私を売り飛ばす気なんでしょ！？　一度具合が悪くなっただけで、あまりにも冷酷ですっ」
ググッと土方の袖を持つ手に力を込めて、芳乃はキッと土方を強く睨む。
「……」
「……」
妙な沈黙が一瞬その場に落ちるが、やがて小さく震え出す土方の様子に気が付いて、芳乃は思わず掴んでいた袖を離す。
「土方さん？」
「……ぶっ。あはははっ！」
神妙な芳乃に対し、土方は小さく噴出し、次の瞬間には盛大に笑い出す。

「なっ」

お腹を抱えて、本格的に笑う土方を呆然とみる。

「馬鹿か。だ、誰がそんなことを言った？　大体、てめぇみたいなガキを誰が買うんだ。十年早ぇ……あー、腹が痛ぇ」

声を震わせながらやっとそう言い放つと、またも肩を揺らして笑い出す。

「そ、そんな笑うこと……大体、ならどうしてこんな場所に来たんですか！？」

とりあえず売られるのではないのだと安堵はしたが、今度は勘違いした恥ずかしさも手伝って、沸々と怒りが湧き起こってくる。

「だから言っただろうが。ここには俺の行き付けの店があるって」

「それはさっき聞きましたっ。だから、どうして私まで連れてきたんですか？」

はっきり言って、ここは堅気の女が足を踏み入れる場所ではない。新撰組が堅気かどうかは別にして、女である芳乃がここに来ても何の意味もないはずだ。

「いいから来い」

にやりと笑い芳乃を促し、暫くすると一軒の店の中に足を踏み入れた。

## 副長命令（4）

「おいでやす」

入るとすぐに、店主らしき男がいそいそと近付いてきた。

「君菊は居るか？」

その男に土方は言葉をかける。

「これはこれは土方様。もちろんでございます。すぐに部屋に案内致します。……そちらの娘はんは？」

芳乃の存在に気が付き、店主は不思議そうに首を傾げる。

当たり前だ。

どこに女連れで花街に来る客がいるだろうか。

「ああ。こいつはいいんだ。君菊も承知済みだ」

「そうどしたか。ほな、すぐに部屋を準備しますさかい」

もうすっかり顔なじみらしく、何の追求もないまま芳乃も土方と共に部屋に案内された。

どうやら『君菊』というのが土方の馴染みの芸子。もしくは舞妓か。

ともかく、この店の目当ての相手であるらしい。

部屋へと通され、芳乃は敷かれた座に腰を下ろす。

小奇麗に整えられた部屋には、女中が置いていった簡単なつまみと酒の入った銚子が載せられたお膳が目の前に置かれている。

土方と二人っきりの静まり返った部屋には、まだ昼前だというのに酒を交えたらしい賑わいが部屋に響いてくる。

芳乃は落ち着かなく辺りを見回す。

「おい。行儀良くしていろよ、芳坊」

すっかり馴染んだ様子で、土方はお膳に置かれた銚子を傾けている。

「そうは言われても、落ち着かないんですっ」

あまりにも場違いな場所にいるような気がして、一刻も早く逃げ帰りたい気分なのだ。

その上、一緒にいるのが天敵ともいえる土方だ。

どうにもジッとしていられない。

そんな芳乃の様子をおもしろそうに眺めながら、土方はおちょこに注いだ酒を飲み下している。

（もう、何なのよっ）

その視線に気が付き、芳乃は腹立たしさの勢いから、目の前に置かれた酒をおちょこに注ぐと一口で飲み干す。

「に、苦っ」

あまりの苦さに、芳乃は眉を顰め小さく咳き込む。

酒は小さな頃に、戯れに父の飲んでいたものを舐めた程度。
その時は、大人になればうまいと感じるようになるのかと思っていたが、やはり今もどうしようもなく不味い。

「お子様に酒は早ぇよ」

これ見よがしにさも美味そうに酒を飲み干して、土方は意地の悪い笑みを浮かべる。

「私の口には合いません。一生、おいしいなんて思えないです」

芳乃は憮然として言い放つ。

こんなものを美味いと呑む者の気がしれない。

「時に、一つ言っておくことがある」
「はい？」

土方はコトリとおちょこを膳に戻すと芳乃を見る。

「お前、藤堂平助に会ったな」
「え？　あの人とお知り合いなんですか？」

自分を助けてくれた気さくな青年。
その名前が土方から出るとは思ってもいなかった。

「奴とはもう二度と会うな」
「え？」

思っても見なかった言葉に、芳乃は箸でつまみかけていた干魚を取り落とす。

「なぜですか？」

「いいから近づくな。これは副長命令だ」

問いかけた芳乃には答えず、静かにそう言い放つ。

「そんなの納得が……」

「失礼しますえ」

言いかけたその時、障子越しに涼やかな女性の声が聞こえた。

「入れ」

そちらに一瞥もせず土方は言い放つ。

「あい」

音もなく障子が開き、現れた人物を見て芳乃は息を呑んだ。

## 副長命令（5）

「君菊でありんす」

深く垂れていた頭を上げたその女性を見たとき、芳乃は天女が現れたのかと思った。

透き通るような白い肌に赤く薄い唇。

確かに化粧はしていたが、その美しさは作られたものではなく、彼女本来が持ちあせているものである。

何より、圧倒されるかのような気品と優雅さが彼女には備わっている。

小さく華奢な身体に豪華絢爛の衣装を身につけ、首元まで塗られた白粉と、襟元を大きく開け見える胸元が艶美さを出している。

芳乃が今まで見てきたどんな女性よりも華やかで美しい。

まるでこの世の者ではないように。

「まあ、今日はかあいらしい方をお連れどすな」

芳乃を見て、君菊は鈴を転がすような綺麗な声を出す。

「あ、あの」

笑顔を向けられ、思わず赤くなって芳乃は口ごもる。

「芳乃はんどすな？」

「え？　どうして私の名を？」

「歳三はんから聞いてます」

相変わらずにこにことしながら君菊はそう答える。
「じゃあ、後のことは任せる」
土方は唐突に立ち上がる。
「え？」
「あい。確かに」
驚く芳乃を他所に、君菊は土方に返事をして小さくお辞儀をする。
「ちょっと待ってください！　一体どういうことですか！？」
障子に手をかけた土方を芳乃は慌てて引き止める。
「今日は一日ここで休め」
「えぇっ！　ここでって……」
「フラフラしながら仕事をされても、こっちが迷惑すんだよ」
チラリと芳乃を一瞥して、土方はそう言い放つ。
「どうせ屯所じゃあ、何だかんだで休めねぇんだろ。ともかく、一日で疲れをとって隊務に復帰しろ。いいな？」
「ち、ちょっと！」
言いかけた芳乃を無視して、土方の姿はすでに部屋から消えていた。
「無茶苦茶だ」

男ならば花街で休みもいいだろう。
だが、芳乃は女だ。
女が花街で何をするというのだろう？
取り残された芳乃は、ひたすらに途方に暮れるのだった。

何の躊躇もなく閉められた障子の部屋の中には、芳乃と君菊の二人だけ。
君菊が焚き染めていると思われる心地よい香の匂いが漂っている。
不意にその匂いが強くなり顔を上げると、君菊が静々と芳乃に近づいてきていた。

「あ、あの……」
「いややわ。そない怯えなくてもよろしおす。何もとって食おうやなんて思ってまへん」
思わず身を引く芳乃を見て、君菊は袖を口元に置きクスクスと笑う。
「いえ、怯えている訳では……。でも、何が何なのか分からなくて。いきなり訳も言わずココに連れてこられて、一体土方さんは何を考えているんでしょうか」
「まあ、何も。あの人らしいことやけど、それはさぞや驚かれたでしょうな」
君菊の言葉に芳乃は思わず力いっぱい頷く。

「うふふ。芳乃はんは正直でかわいいお人やわ。歳三はんが可愛がるんも分かりますわ」
「……え？」

とてつもなく耳慣れない言葉を聞いた気がして、芳乃は一瞬止まる。

「可愛がるって、誰が誰をですか？」
「嫌やわ。歳三はんがあんさんをです」
「そ、それは間違っていますっ！　可愛がるじゃなくて、苛めるの間違いでしょ！？　土方さんに限って、可愛がるなんて絶対にないですっ」

一瞬、優く微笑む土方を想像して芳乃は身震いをする。

「まぁ、そうですやろか」

微笑をして君菊は言葉を零す。

「そうですっ」

芳乃は力いっぱい返事をする。

「それじゃあ、どうしてわざわざ歳三はんは、あんさんをココに連れてきてくれはったんですやろか」

口元を隠し、瞳だけを芳乃に向けて君菊は問う。
黒いビードロのような瞳が芳乃を見つめる。
その瞳は、どこか芳乃を非難しているかのようだ。

「そ、それは……」
「さっき、歳三はんにあんさんのことを聞いたと言いましたやろ？　歳三はん、言うてはりました。飛び入りで入隊しはったんは、ようけん小さな子供やと。勢いはあるがどうにも気負い過ぎる性質で危なっかしい。この頃は目に見えて疲れてはるし、体にガタが来るんも時間の問題やと……。だから、休みをとらせてココに連れてきたい。ココならば、気兼ねなく休みが取れるやろうからと」
「……」

そんな風に、土方に気にかけられているとは思いもしないことだった。
顔を見れば嫌味を言われ、てっきり自分は嫌われているものだと思い込んでいた。
自分を追い出す機会を狙っているのだと。
今回ココに連れてこられたのも、何か裏があるのだとはなっから疑っていた。

「せやけど、まさかその子が女子や聞いたときは、うちも驚きましたけどな」

君菊はそう言うと、向けた瞳を和らげる。

「私……嫌われている訳じゃないんでしょうか？」

芳乃が神妙な顔で尋ねた質問に、君菊は喉を鳴らして笑う。

「はい。よく言いますやろ？　好きな子ほど苛めたくなるって。ほんま、歳三はんは天邪鬼な方やから……」

屯所に帰った土方が大きなくしゃみをしたのはその時だった。

## 副長命令（6）

屯所に帰り、芳乃は土方にきちんと礼を述べるつもりだった。

花街での君菊との時間。

それは思ったよりもずっと有意義な時間だった。

最初は花街という場所と、土方とそれなりの関係である君菊にひどく困惑したが、馴れてしまえばそれほど悪いということはない。

酒が飲めない芳乃のためにわざわざおいしい菓子を用意してくれて、君菊は自然な雰囲気で芳乃の言葉に耳を傾けおもしろい話もしてくれる。

芳乃に姉妹はいなかったが、姉がいたのならこんな感じだろうかと思うほど、親身で優しくしてくれた。

本当に土方にはもったいない相手だ。

芳乃はそう思うのだが、君菊はことあるごとに土方のことを庇護するのだった。

言葉に出さなくとも、土方は隊士のことを誰よりも考えている。

天女のように美しい君菊に切々と語られれば、誰だってそう信じずにはいられないだろう。

（私、土方さんのことを誤解していたみたいだ……）

言葉は足りないし厳しいが、それは隊士である自分を慮ってのこと。

それを分からない自分はまだまだ未熟だ。

芳乃はそう考え深く反省した……つかの間だけ。

「ただいま戻りましたー」

昼前から出て帰ったのは門限ギリギリ。
今まで屯所をこんなに離れたことはなかった。
不思議と我が家に帰ったような安堵感がある。
知らず知らずのうちに、新撰組に馴染み始めている自分がいて不思議な気分だった。

「おうっ！　芳坊」

草履を脱ぎ揃えていたその時、ドタドタとした足音と共に原田が姿を見せる。

「だから、その呼び方は……」
「花街に男女のいろはを教わりにいったんだって？」

芳乃の言葉を横取り、原田はニタニタと笑う。

「……はい？」

意味が分からず、芳乃は眉を顰め首を傾げる。

「違うだろ。女を買ったんだろ？　いやぁ、男同士でつうのはよく聞くが、女同士っていうのもあるんだな、やっぱ……」

続いてやってきた永倉が感心したようにしきりに頷いている。

「な、な、なっ」

あまりのことに、芳乃は酸素を求める金魚のように口をパクパクさせるばかりで、言葉が出てこない。

「お芳ちゃん！　新撰組を辞めて、花街に行くって本当ですか！？」

呆然とする芳乃に向かって、更に追い討ちをかける言葉。

しかも尋ねたのは鉄之介。

かなり取り乱した様子で廊下を走り抜け芳乃に駆け寄ると、涙目で訴えかける。

「て、鉄ちゃんまで！　一体どういうことなんですかっ」

もう恥ずかしさと怒りと情けなさで顔を真っ赤にしながら、芳乃はその場にいる面々を睨み付ける。

「ち、違うんですか？」

「あ、当たり前でしょう！　一体誰がそんなことを言ってるの！？」

芳乃はキョトンとしている鉄之介に掴み掛からんばかりの勢いで言い放つ。

「え？　その、皆がそんな噂をしていたものだからてっきり……」

「誰よっ！　そんなデタラメ広めている馬鹿野郎はっ」

怒りのオーラが芳乃を包み込み、鉄之介以下二名は思わず数歩後ろにたじろく。

ただ今の芳乃は怒り全開モードである。

「お、俺は知らねぇぞっ」

ギラリと自分に向けられた瞳を受けて、原田は慌てて首を振る。

「俺だって！」

先手を取って永倉も続いて即座に言い放つ。

「だったら、原田さんたちは誰からそんな馬鹿げた話を聞いたのですか？」

質問……というよりは詰問。

有無を言わさぬ強い口調で芳乃は言葉を向ける。

「えーと……。俺たちは土方さんに……だな。うん。まあ、そういうことだ。それじゃあ、これから一杯やろうぜ、新八！」

「お、おうっ！　じゃあそういうことで」

爆発寸前の芳乃の様子を察知し、原田、永倉はギコチナイ会話を繰り広げるとサァッと逃げ出した。

「あ……ずるい」

取り残された鉄之介は、青い顔で二人が消えた方角を恨めしそうにみやる。

「土方……さん」

「いや、きっと何か誤解が生じているのですよ、とりあえずお、落ち着きましょう。ね、お芳ちゃん」

低くボソリと呟く芳乃に向かい、鉄之介は懸命に言い募る。

関わってしまったのが不運。
けれど関わってしまった以上、見て見ぬふりも出来ない。
この激情家の幼馴染を止められるのは自分だけとばかりに、鉄之介は懸命に芳乃を宥める。

「これが落ち着ける！？　こんな根も葉もないことを言われて！どういうつもりなのか、本人に直接問いただしてくるわっ」
「あ、お、お芳ちゃん！」

止める鉄之介を完全無視して、芳乃はドシドシと怒りに任せて歩き出し、土方の部屋へと向かった。

「お願いですから、無茶なことはしないで下さいよぉ」

後ろから涙声で訴える鉄之介の言葉が届いているのかどうかは……謎である。

## 副長命令（7）

「失礼しますっ」

相手の返事を聞く前に、芳乃は障子を開け放す。

中では、土方と近藤が将棋を指していた。

これでもかと言うほど和んだ雰囲気がその場を支配している。

「お、帰ってたのか？　で、何をそんなに慌ててやがんだ？……と王手」

芳乃を一瞥してからすぐに将棋盤に視線を戻し、土方は王将を一こま進めニヤリと笑う。

「あ、あぁっ！　ちょっと待て、歳」

「待ったはなしだぜ、近藤さん」

どうやら近藤が劣勢らしい。

近藤は土方の言葉に「うむむ」と唸ったまま止まってしまっている。

そんな『戦士の休息』的光景を見ながら、芳乃はワナワナと体を震わせる。

「何を？　じゃないですっ！　どういうことですか！？　私が花街で『いろは』だとかお、女を買っただとか、み、み、身売りするとかっ。一体、土方さんはみんなに何を言ったんですか？」

言葉にするだけでも恥ずかしい。
芳乃は真っ赤な顔で言葉を吐き出す。
「ああ？　俺は何も言ってねぇぞ。ただ、お前の消息を聞かれて『花街にいる』って答えただけだ。他は奴らが勝手に話作って面白がってんだよ」
シレッとした顔をして、土方は悪びれた風もなく言い放つ。
「知っているなら、どうして止めてくれないんですかっ」
そんな土方の態度に芳乃は噛み付くように言い放つ。
そして土方の答えは……。
「そんなの、おもしれぇからに決まってんだろ」
「……」
沈黙。
静まり返るその場で近藤が我に返る。
「こら！　歳っ。そういう言い方は……」
「……よぉく分かりました」
続いて静かなとても静かな芳乃の声。
「前言撤回ですっ！　二度と感謝なんてしませんっ！！　失礼しま

すっ」

バァンッ！！

廊下にまで響き渡る芳乃の怒鳴り声と、壊れたのではないかと思うほど未だかつてない音を響かせて障子が閉まる。

「前言も何も、俺は感謝の言葉なんて聞いてねぇぞ」

憮然とした面持ちで土方はポロリと呟きを漏らす。

「……歳。とりあえず、戦いに出る前に殺されたりするなよ」

土方歳三。

その厳しさから、周りは常に敵だらけだったという。

だがしかし、実はその他にも問題はあるのではないかと思う新撰組局長、近藤勇だった。

## 変革の兆し（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 変革の兆し（1）

慶応三年。十月。

芳乃が新撰組に入隊し、二月半ばが過ぎようかという時だった。

芳乃は秋の昼下がり、鼻歌交じりに表門の掃き掃除をしていた。

ヒラヒラと舞い落ちる葉は色とりどりに色づき綺麗で、芳乃はすこぶる機嫌がいい。

京の秋は美しい。

人と町と自然。それらが混ざり合い、一つの風景を作り出している。

秋の厳かな美しさが芳乃は好きだが、特に京の町はその美しさを何倍にもひきだしている。

変革を望まない静寂。

はるか昔から変わらない寺院やそれらを囲む山々。

ここには不思議な落ち着きがある。

相変わらず、小さないざこざが京の町に無くなることはないが、新撰組の取り締まりが効いているのかどうか、ここ幾日は血生臭い話も縁遠くなっている。

「お、今日は機嫌いいな。どう？　今度お茶にでも……」

「行きません」

通りがかりの隊士にそう言われても、芳乃は機嫌が良いままに笑顔で答える。

いつもならもっとつっけんどんに言葉を吐き出すところだが、今の芳乃は未だかつてないほど機嫌がいい。

こんなことくらいではまったく動じない。

「ちぇっ。まあ、いいけどさ。でも何でそんなに機嫌がいいんだ？不気味……」
「何かいいました」

ボソリと呟く隊士の言葉を聞き逃さず、芳乃は笑顔のまま鋭い睨みをかける。

「い、いや。さぁて、仕事仕事～」

退散とばかりに隊士はそのまま屯所内に消えていく。

「まったく。……でも平和だわ。本当に平和♪」

手を休め、芳乃はうーんと大きく背伸びをし空を見上げる。
突き抜けるかのような青い空に、真っ白な雲が浮いている。
秋の優しい太陽に澄んだ空気。

「あーあ。こんな日が永遠に続けばいいのにな……」

付いたのは幸せのため息。
未だかつて感じたことのない開放感。
芳乃がココまで幸せを感じている理由。
それは土方歳三の不在にある。
顔を見れば何かと突っかかってくる土方は、芳乃にとって最大の天敵。
けれど相手は組の副長。
芳乃はといえば未だしがない仮隊士。
面と向かって言い返す訳にもいかず、芳乃のストレスは溜まっていく一方なのである。

もっとも、面白いほど感情を外に出してしまう芳乃である。
故に土方は芳乃が腹を立てていることを知っていて、ワザと突っかかっておもしろがっている節もある。
周りの隊士たちにもその光景はすっかり定着し、今では土方を睨む芳乃と、ニヤニヤと楽しそうにしている土方の姿を見て『また始まった』と皆も馴れきったものである。
中には、芳乃がいつキレるか賭けをしている者もいる。
知らぬは本人ばかりなのだ。

土方は京を離れ東下り中。
新隊士を募るためだった。
つかの間の平和。
その上、もうすぐ非番の日。
今から何をしようかと考えを巡らせ気分は最高潮だ。

「今度の休みはどこに行こうかなぁ。寺院を回って紅葉を見ようかなぁ。それとも、買い物にしようかしら？　この前、おもしろそうな古書を見かけたのよね。早く買いにいかなきゃ、売れてしまうかもしれないし……」

ザッ！

考えを巡らせていたいた芳乃の間を男が走りこむ。
しかも、集めたばかり木の葉を見事に蹴散らしてくれて。

「ちょっとっ！　何をするの？」

そう言って男を睨んだが、ひどく青ざめた表情を見て芳乃は目を丸くする。

「どうしたのですか？」

顔面蒼白のまま男は言葉を吐き出す。

「た、大変なんだっ！　局長を。近藤局長をっ！」

訳が分からず、けれど何か不穏なことが起きる。
そんな兆しを感じ芳乃の心に翳りを落とした。

## 変革の兆し（2）

大政奉還。

男がもたらしたその言葉は、屯所内を風のように駆け巡った。

騒ぎは騒ぎを呼び、もうどこもかしこもソワソワと落ち着きなく、話題はそのことばかりだ。

「つまり、徳川の将軍様が将軍ではなくなると。そういうことなのでしょう？」

「そういうことです……」

縁側に腰を掛け、芳乃の問いかけに鉄之介は神妙な顔で小さく頷く。

夏夜以来、東の対の間で芳乃と鉄之介は時々二人っきりで会うようになっていた。

不思議と人の訪れの少ない場所で、心置きなく話をすることが出来る唯一の安息地。

今日もどちらともなく、寝付かれない夜をやり過ごそうとココに来ていた。

「皆、大騒ぎね」

局長である近藤が真偽のほどを確かめにいったらしいのだが、どうやら本当のことらしく、ますます隊士たちは困惑しているのだった。

幕府の長たる徳川家。
徳川慶喜が将軍職を朝廷に返上を申し出たのである。
つまりは最高の実権を朝廷に返すということ。
それは幕府の権力が揺るぎ始めている証拠。
幕府に仕える自分たちはどうなるのか。
新撰組が慌てふためくのも当然である。

「ある程度の方々は噂で知っていたらしいですが、新撰組内にはまったくそんな情報は流れていませんでしたから……。動揺するのは当たり前です」

そう言って、鉄之介はため息を一つ付く。

「鉄ちゃんはあまり動揺していないのね」

鉄之介をジッと見て芳乃は言う。

新撰組に心酔している鉄之介のことだから、もっとショックを受けるのではないかと心配したが、鉄之介の様子は普段と変わりなく落ち着いている。
むしろ周りの動揺につられて、芳乃の方が落ち着かないくらいだ。

「そう、見えますか？　それならよかった」

（あ……）

その言葉で気づく。
柔らかく微笑む鉄之介だったが、強く握り締められていた両手が、小刻みに震えている。

「父上が長暇を出された時もこんな感じでした。家族中大騒ぎで。もう世界の終わりだというような。けれど実際は、世界は終わらないし僕たちは生きていかなければならなかった。そして僕は今、ココにいます」
「うん」

もし、市村家が今も美濃にあったなら、鉄之介が新撰組に入ることもなかっただろう。

「時の流れは、いつどこに向かうかなんて分からない。だから、今も『これで終わりじゃない』って思うんです。これからどんな最悪な方向に時代が進んでも、それは僕たち次第でいくらでも修復出来る」

握られた手をフッと解き放ち、鉄之介はその手を見つめ微笑む。

「無限の可能性の中で何を信じるかは自由です。そしてどうせ信じるのならとことん信じたいんです。僕の選択は間違ってはいないと。これが生きてきた意味なんだって」

怖くないはずがない。
先が見えない未来。
けれど鉄之介は身を持って知っている。
怖がってばかりで足を竦ませていては、先にあるかもしれない『幸福』にたどり着けないということを。

芳乃は鉄之介の両手を握り締める。

「お、お芳ちゃん？」

唐突なことに鉄之介は赤くなり瞬きを繰り返す。

「鉄ちゃんの言うとおりだよね。私も一緒に信じる。ここで慌てていても、何も変わらないもの。私たちは、私たちがやるべきことをやればいいのよね」

こういう時、鉄之介のすごさを感じる。
決して目の前の道を見失わない。
その純真な一途さが、芳乃は何よりも好きだ。
ふっと流されてしまいそうな自分を繋ぎ止めてくれる温かな手。
鉄之介に触れその力強さを実感する。

「はい。一緒にがんばりましょう」

十年前と変わらない優しい笑みを浮かべ、鉄之介は芳乃の手を握り返した。

## 変革の兆し（3）

サラサラと川が静かに流れている。
芳乃は橋の上に腰掛けて、ボゥッとそれを眺めていた。
今日は非番の日なのだが、大政奉還で屯所内の騒ぎは相変わらずで、静かに休日を過ごすような雰囲気ではない。
近藤は朝から出かけてしまい、他の面々もどこか殺気だっている。
あの沖田ですら、どこか考え深げで何だか近寄り難い。

そんなわけで、とりあえず屯所を出て来たのだが、どうにもどこかに遊びに行くという気分でもなくなってしまって、妙に時間を持て余していた。

「どうしようかな」

大体、独りで遊びに出ても楽しいはずもない。
鉄之介はきっちり隊務がある上、土方の帰京が早まったらしく何かと忙しい。
とても遊びに誘える状況ではない。
かといって、鉄之介以外の屯所の隊士となんて真っ平だ。
この際、君菊のところにでも遊びに行こうかとも思うが、さすがに突然行くのはまずい。

『あんさんなら、いつもでも大歓迎やわ。いつでも遊びにおいでやす』

と言われてはいるが『お客』を取っている時にでも行ってしまったら、気まずいことこの上ない。

せっかくの休みだというのに、すっかり気分が萎えている。
そんな芳乃に付き合うかのように、空まで厚い雲に覆われている。
これではいつ雨に降られてもおかしくない。

「帰ろうかなぁ……」

泣き出しそうな空を見上げて呟く。

帰って昼寝。
そういうのもありだろう。

「お嬢さん。お暇ですか？」
「え？」

唐突に後ろから声をかけられ、芳乃は驚き声のした方を振り返る。

「久しぶりだね」
「と、藤堂さんじゃないですか」
「よかった。覚えていてくれたんだ」

柔和な微笑みに見覚えがある。
会ったのは夏にただの一度だけ。
けれど、その記憶は鮮明だった。
そこにいたのは藤堂平助。
芳乃の窮地を救ってくれた人物。

「どうしたんですか？　こんなところで」

あまりに唐突な登場に芳乃は目を丸くする。

「いや、たまたま通りかかっただけだよ。そうしたら、何やらかわいい女子の姿があったから、思わず声をかけようと近づいたら、お芳さんだったという訳だ」

隣に同じように腰をかけて、藤堂は爽やかな笑顔を浮かべる。

「あはは……」

何と答えていいのか分からず、芳乃は乾いた笑いを返す。

こんな爽やか青年にそんなことを言われたら、普通の女子ならばクラリとくるところだろうが、あいにくと芳乃はその手の言葉にはひどく疎いうえ、普段無駄に聞き慣れていていた。

「君のこと、ずっと気にしていたんだが。それでその後、体の調子はどうだい？」

「はい。おかげ様で元気に過ごしています。その節は、本当にありがとうございました」

そう言い、深々と頭を下げる。

「そう。それはよかった。世話になっているという親戚の人とも、うまくやっているんだね」

その言葉に、未だに藤堂は、芳乃が新撰組の屯所に居ることは知らないのだということを思い出す。

「あ、はい。……一緒にいるおじさんは意地悪なのですが、息子さんはとても良い方で優しくしてくれるので、全然平気です！」

心持「おじさん」という言葉に力を込めて芳乃は言い放つ。

もちろん、おじさんというのは土方のこと。
その息子とは鉄之介。
屯所内では口に出来ないこと、せめて外では愚痴りたい。
芳乃の精一杯の嫌がらせ。

「へぇ。もしかして、帰りに迎えに来ていた少年が優しい息子さん？」
「はい。そうです。本当にすごく良い方なんですよ」
「まぁね。人が良さそうなのが顔に滲み出ていたし……。お芳さんは、その息子さんとはいい仲なのかい？」

藤堂は唐突にそんな質問をする。

「え？　えぇ！？　ど、どうしてそうなるんですか？　違いますよ」
（そうだったらどんなに嬉しいか知れないけれど……）
と、心の中で思いつつ芳乃は勢いよく首を振る。

「それはよかった」

藤堂はニカッと芳乃に笑いかける。

「え？　それはどういう……」
「あ！　雨だ」

言いかけた芳乃の言葉を遮り、藤堂は声を上げる。

見れば確かに、川の水面にいくつかの波紋が出来、芳乃の頬にも

水滴が落ちて来た。

「雨宿りをしなければ。こっちだ」

言うが早いか、藤堂は芳乃の手を取る。

「あの……」

「今度は風邪をひいてしまう。さあ、早く」

立ち上がると、藤堂は芳乃の手をひいて駆け出した。

## 変革の兆し（4）

静かに降り始めた雨は、やがて町全体を包み込むように雨音を強める。

「本降りになってきたようだ。危ないところだったね」

軒先から身を乗り出し空を見上げ、藤堂は言い放つ。

「ええ。濡れずに済んだことはとても嬉しいんですけど……」

「おいでやす」

飛び込んだ先は茶店。

当然、店に入った途端に店員がやって来た。

これでは、注文をしないわけにはいかない。

芳乃はチラリと藤堂を見る。

（うーん。困ったな）

すっかり忘れていたのだが、『藤堂とは二度と会うな』　そう土方に言われていたのだ。

それが、成り行き上とはいえ、いきなり二人きりで店に入る羽目になるとは。

外は本降りの雨。

中では、店員が席に案内するため笑顔で立っている。

これはもう観念するしかない。

（どうか誰にも見つかりませんように）

芳乃は心の中でそう祈りつつ藤堂と共に席に着く。

「なんにしましょ」

「ああ、代金は俺が出すよ。好きなものを注文するといい」

席に着くと、藤堂はあっさりと言う。

けれど芳乃は慌てて反論する。

「そうはいきません。藤堂さんには、迷惑ばかりかけているのです。このくらいは私が払います」

「いいよ。無理やり引っ張ってきたのは俺なんだし、女子に金を出させる訳にはいかないから」

それを藤堂はやんわりと否定する。

「絶対にだめです！　少しくらい、私に恩返しをさせて下さい！」

思わず立ち上がり、木台に手を付いて、芳乃は藤堂に身を寄せて言い放つ。

「わかったよ。そんなに必死に言われては、断る訳にもいかない。お言葉に甘えさせてもらおうかな」

藤堂は必死に笑いをかみ殺している。

「そうしてください……」

芳乃は我に返り、赤くなり慌てて座りなおす。

ほどなくして、温かな茶とみたらし団子が運ばれてくる。

「さあ、たくさん食べてくれよ。……といっても、お代は君が払うのだけどね」

そういって朗らかに笑う。

親しみ深いその笑顔につられて、芳乃も笑みを浮かべる。

「ああ、よかった。やっと笑ってくれたね。最初目にした時、ひどく憂鬱そうにしていたから、また具合を悪くしたかと心配していたんだ」

そう言いながら団子に手をのばす。

「いえ。そんなことはないです。あの時が特殊で、普段は健康そのものなんですから。私、そんなに憂鬱そうでしたか？」

自分では自覚はまったくなかったのだが、鬱々と考え込んでるうちに顔に出していたらしい。

「ああ。今にも川に身投げするんじゃないかというくらいにね」

「そ、そんなに……」

「ま、それはおおげさだけど、何か思い悩んでるのはすぐにわかったさ。俺でよければ話を聞くよ」

身のない団子の串を芳乃に向けて、藤堂は少しばかり真面目ぶっていう。

## 変革の兆し（5）

藤堂の申し出に、芳乃は暫く思案したのち口を開く。

「悩んでいる訳ではないのです。ただ、周りがひどく殺気立っているので、気が滅入ってしまって」

大政奉還という出来事に、誰もがどこかギシギシとしている。あの沖田ですら、いつもの陽気さは影を潜めていた。

「それもこれも、大政奉還なんて訳の分からないことをするから……」

「大政奉還？」

ため息と共に呟いた言葉を藤堂が反芻する。

「藤堂さんも聞いていませんか？　徳川様が将軍職を返上したという話を」

「もちろん知っているさ。……お芳さんは大政奉還には反対なのか？」

不意に投げかけられた問いに芳乃は考えを巡らせる。

新撰組隊士たちはほぼ反対だろう。

けれど、芳乃自身はどうなのかと問われれば、何とも言い難い。

ただ周りのギシギシとした雰囲気が嫌なだけであって、そのものの意味自体、深く考えてはいなかったのだ。

異国が進入し右往左往し、街中には外敵から守るためなどと安易に刀を持ち、横暴な振る舞いをする者たちが増えていた。
そんな輩を野放しにし、次々とやってくる外船の対応もままならない。
そんな幕府に歯痒い思いをしていることは確かだ。
このまま徳川幕府がこの日本を動かしていけるのかと、小さな不安もあった。

「大政奉還はなるべくしてなった。俺はそう思う」

黙り込んだ芳乃に変わり藤堂がそう口を開く。

「そもそも国を治めるべきは天皇であらせられるべきなんだ。徳川は長く力を持ちすぎた。徳川の慢性とした今の状態ではとても迫り来る外敵に勝てやしない。いや、外敵どころか不逞浪士にさえ無力に等しく怯んでいる。そんな状態で、どうやってこの国を敵から守れる？」

そう語る藤堂の目には、いつかの強い輝きが見て取れる。

「……藤堂さんは、討幕派なのですね」

今まで国を動かしてきた幕府を無くし、新たな国づくりを推進する考え。
幕府を守る新撰組とは相反する。
どちらかといえば、藤堂は新撰組の敵ということになる。
土方が、藤堂にもう会うなといった訳。
それが今ようやく分かった。

「今はそういうことになるんだろうね。けれど、俺は幕府がなくな

ればいいって思っているわけじゃない。ただ……」
「ただ？」
「もう幕府では無理なのだと思う。この国を守りきることがさ。俺はただ、外敵からこの国を守りたいんだ。このまま流れのままにまかせちゃいけない。今は変革が必要なのだと思う」

そう語る藤堂の瞳は強い光を宿している。
それは鉄之介が新撰組を語った時のような、自分を信じ未来を進もうとしている目だ。

「……」
「ああ。ごめん。女子である君には、少しばかり堅苦しい話だったかな」

黙りこんだ芳乃を見て藤堂は照れたように笑う。

「そんなことはないです。藤堂さんはすごいです。ちゃんと色々なことを考えているのですね。自分の道をしっかりと見極めていらっしゃる」

比べて自分はどうだろう？
今だ未来が定まらない。
鉄之介の傍で生きたい。
けれど、近くにいるというだけで自分は何をしているのだろう？
ただ雑務をこなしているだけ。
必死に前に進もうとしている鉄之介の姿を見守ることしか出来ない。
このままで本当にいいのだろうか……。

「ええっと。何だか分からないけど落ち込まないでくれよ。女子は

笑っている方がいい」

俯く芳乃を覗き込み藤堂はニッと笑う。

「女子は、ただそこに咲いているだけで、人を和ます花の様なものだよ。微笑んで、男を見つめていてくれればいい。男はそんな花に会いたくて、戦から生きて帰ろうと思うんだからね」

藤堂に心の中を見透かされた。

そんな気がして芳乃は頬を染める。

「ほら！　雨も上がった。見てごらんよ」

そう言われて空を見てみれば、雲の隙間から光が差し込み大きな虹がかかっている。

「綺麗……」

虹を見るのは久しぶりのことだ。

小さな頃、虹に触れてみたくて、鉄之介と一生懸命に追いかけたことを思い出す。

今もあの時の気持ちに似ている。

ただほしくて我武者羅に歩き続けたあの時。

確信めいたものなんて何もなくて、出来るのは精一杯手を伸ばすことだけ。

そして今も自分は、我武者羅に毎日を生き、そして届かない何かに必死に手をのばしている。

その『何か』が分かるのはいつになるのか。

手に入れられるのか。芳乃には検討もつかなかった。

## 変革の兆し（6）

「今日はありがとう。とても楽しかった」

茶店を出た藤堂は芳乃に言う。

「私こそ、ありがとうございました」

芳乃はふかぶかと頭を下げる。

藤堂は、京の美しい紅葉が見られる寺の話や、町中で起こった面白い話。

行きつけのおいしい豆腐屋など、日常の他愛もない話をしてくれた。

それのどれもがおかしくて、楽しいものばかりだった。

藤堂が何かを察し、話題を気楽なものにしてくれたのだ。

その心遣いが、今の芳乃にはとても嬉しかった。

「ところでお芳さん」

「はい」

「もしよかったら……」

別れ際、藤堂は芳乃に何かをいいかけてから言葉を止める。

「？」

言いかけ口を噤んだ藤堂はクスリと笑う。

「また今度会うときに言うよ。三度目の偶然。それはきっと運命だと思うんだ」

藤堂は茶目っ気を含んだ瞳を向け言う。

「あ、あの……」

藤堂の突拍子もない言葉に芳乃はうろたえる。

「大丈夫。またきっと会える。そんな気がするんだ。じゃあ、さようなら。お芳さん」

困惑気味の芳乃に手を振りつつ、藤堂は人ごみにかき消されていく。

「……おかしな人」

芳乃は小さく笑う。

明るく太陽のような人だ。

（本当にまた会えたらいいな）

京に来て、屯所以外で始めて出来た友人。

確かに、新撰組の考えとは相反する思想を持った人だ。

けれどそれだけの話。

この京には色々な考え方の人間がいる。

それはそれでいいのではないか。

芳乃はそう思う。

例え考えは違っても、仲間にはなれなくとも、友人にはなれるの

だ。

「よーしっ。私も屯所に帰って仕事仕事っ」

そう元気よく言い放つと、芳乃は消えかけた虹をもう一度見上げた。

## 惨夜（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 惨夜（1）

慶応四年。十一月十八日。

悪夢は起こった。

静かな静かな夜だった。

大政奉還の騒ぎも徐々に収まり、皆が平静を取り戻しつつあった。

少なからず脱走する者や、町でいざこざを起こす者たちもいるにはいた。

だが、表面上はそれほどの騒ぎもなく、ただいつもの日常が過ぎていく。

少なくとも、芳乃はそうだった。

……そう。その夜までは。

ガタッ。

戸が乱暴に開かれる音で、芳乃は目を覚ました。

「まったく……。また脱走者？　それとも誰かが酔っ払って、外に落ちたのかしら……」

夢うつつの中、目を開ければまだ外は暗い。

朝までまだ相当の時間がある。

「……っ」

「……！」

ドタドタドタッ。

もう一度寝なおそうかと思案していたその時、幾人かの怒鳴り声や興奮したような声。
慌しく廊下を走り抜ける音が聞こえ、芳乃は完全に目が覚めた。
いつもとは違う。
どこか緊迫した尋常でない雰囲気。
こういう時は決まって斬りあいがあった時だ。
芳乃は慌てて寝床から出る。
傷の手当てをする者が必要だ。
町医者であった父の手伝いをしていたこともあり、怪我の手当てなどはしなれている。
芳乃は屯所の誰よりも手際よく処置をし、一度などは瀕死でもう駄目だといわれた隊士を、適切な処置で助けたこともある。
それ以来、怪我人が出たときなどは、真っ先に芳乃が呼ばれる。
今日はまだ誰も呼びに来ていないが、どうにも気になってしまって眠れそうにない。
芳乃は急いで身支度を整える。

「何事ですか？」

廊下に出た芳乃はその光景に唖然とする。
幾人かの者たちが、庭先や縁側に座り込んでいる。
皆、武具を身につけていたが埃と血に塗れていた。
そこには原田や永倉といった幹部たちの姿もあった。
今まで、何度かいざこざを起こして帰って来た者はいたが、今日は明らかにそれと違う。
まるで戦から返ってきたかのような出で立ちだ。
たまたま斬り合いになったのではない。
斬り合いを目的に出かけて、そして帰ってきたのだ。

体がヒヤリとする。
外気の寒さにではなく、心が冷たくなっていくのを感じる。
いつもこうなのだ。
返り血を浴び、傷だらけで帰ってくる男たちを見ると、ひどく心が冷えていく。
これが新撰組の役割なのだと理解していても、いつも心にどうしようもない、わだかまりが広がっていく。

「おいっ。そんなところに突っ立っているな。邪魔だ」

後ろから唐突に声をかけられ、芳乃はビクリと体を震わせる。
振り返るとそこには、混沌としたその場で、一人涼しい顔をしている土方の姿があった。

## 惨夜（2）

「ひ、土方さんっ。これは一体……」
「……仮隊士風情に話すことじゃねぇ。見なかったことにして寝てろ」
そう吐き捨てると芳乃の間をすり抜けていく。
「え？　ちょっと待ってください……」
芳乃の言葉など聞かず、スタスタと去っていく土方。
「およしなさい。君が口を挟むべきことではありませんよ」
「沖田先生！？」
後を追いかけようとしたところを、腕をつかまれ引き止められる。
振り向くと、ここのところ床に伏せっきりだった沖田の姿がそこにあった。
相変わらず顔色がよくない。
月明かりに照らし出された沖田はひどく具合が悪そうだ。
「いけません。部屋に戻ってください」
心もとない足元を見て、芳乃は慌てて沖田を支える。
「僕に構わないで下さいよ」
いつになく、どこか投げやりに言い放ち、芳乃の手を払いのけよ

うとする。

「何言ってるんですか！？　そんな今にも、倒れそうな顔色をしてらっしゃるくせにっ」

「どうして……」

「え？」

沖田は搾り出すように言葉を吐き出す。

様子がおかしい。

病に臥しがちな今でさえ、決して感情をむき出しにすることをしない沖田だというのに、今日は芳乃にも分かるくらいに苛立っている。

いや、苛立っているというよりはむしろ……。

「沖田先生……。泣いているのですか？」

芳乃から顔を背けた沖田の顔は見えない。

けれど、うな垂れ微かに体を震わせている沖田の姿は、泣いているかのようだった。

「いいえ。泣いてなどいませんよ。泣くはずがないじゃないですか」

心配して覗きこんだ芳乃に沖田は笑ってみせる。

いや、笑ったつもりだったのだろう。

けれど芳乃には、その顔が泣いているように見えた。

泣き叫んだ方がまだマシの痛い笑顔。

嫌な予感がした。

新撰組では幾度となく殺生ごとは起きた。

けれど、今日はいつもと違う。

何かが違うのだ。
心の中で警鈴が鳴り響く。
「……助けるつもりだったんだ」
途切れ途切れに声が聞こえる。
原田のものだった。
いつもの快活さがない。
どこか神妙な面持ち。
「若い隊士が早まっちまった……」
「……だめだったか」
それに土方の声が続く。
「あいつは藤堂は馬鹿だっ」
苛立たしげな原田の怒鳴り声が、芳乃の耳にはっきりと届いた。
「！？」
何を言っているのか分からなかった。
耳に届いたその名と、言っている意味がうまく組み合わない。
「沖田先生。藤堂って……」
そんなことがあるはずはない。
あの太陽のような人が、こんな血生臭いことに巻き込まれるなどありえない。
そう思うのにどうしてだろう？

心臓が早鐘している。

「……」

沖田は無言になる。

話していいものかと思案している様子だった。

「沖田先生。お願いです。話てくださいっ」

人違いだと。

聞き違いだという答えを聞きたかった。

『やっぱり運命だったんだね』

三度目の偶然で、きっと藤堂はそう言って八重歯を出して、あの太陽のような笑顔を見せてくれるはずだ。

その時は言うつもりだった。

自分は新撰組だと。

違う考えを持っているけれど、友人にはなれますよね？　と。

「お芳ちゃんが入る前に、隊を抜けた奴だよ。藤堂平助。元々は僕たちの仲間だったんだ」

沖田はポツリとそう答える。

「それで……その人は……」

「……ついさっき死んだよ」

それは妙に平坦な言葉だった。

何の感情も交えない無機質な言葉。

『大丈夫。また会えるよ。そんな気がするんだ』

つい一月前の藤堂の笑顔と言葉が、今もはっきりと思い出せる。

グラリ。

一瞬目の前が真っ暗になり体から力が抜ける。

「お芳ちゃん！？　大丈夫かい？」

心配そうな沖田の声。

いつの間にか、支えていたはずが今は沖田に支えられている。

周りの喧騒がひどく遠くに聞こえる。

これは夢なのかもしれない。

ただの夢。

そう思いたかった。

「……え？」

呆然とする中、視界の端に捉えたのは、ありえないはずの姿。

「どうして……」

「え？　お芳ちゃんっ」

沖田の声を聞かず、芳乃は走り出す。

裸足のまま、視界を掠めた人物を追って庭を走り抜けた。

## 惨夜（3）

見間違えじゃない。
幻でもない。
確かにその人はいたのだ。

「待ってくださいっ」

屯所の門を出たところで追いついた。
数歩先にその男は居る。

「……」

男は無言のままに振り向く。

会ったのはただの一度。
けれど覚えている。
鮮明に記憶に焼きついている姿。
夜を纏うかのようなその男。

「どうしてあなたがココにいるのですか？　……斉藤さんっ」

新撰組に斬られたという藤堂。
ならば、その『仲間』であるはずの斉藤がこの場にいるのはどう考えてもおかしい。
けれど、目の前にいるのは確かに斉藤その人だった。

「……」

更に男は無言。
芳乃の姿を一瞥し、確かに認識したはずなのに、何事もなかったかのように歩き出す。
芳乃は反射的にその後を追いかけ、そして前に立ちはだかり、斉藤の行く手を阻むように両腕を広げる。

「邪魔だ」

そこで初めて、息を付くかのように静かに言葉を吐き出す。

「藤堂さんが斬られました」
「知っている」

斉藤の答えは早かった。
驚く様子も悲しむ様子もない。
ただ、月が出ているといわれ、ああそうか。と頷くような、そんな淡々とした言葉運びだった。

「知ってるって……ならどうして……」
「……俺は新撰組隊士。藤堂たちのいるところには、間者として入り込んでいただけのこと。奴らは裏切り者だ。だから……」
「だから、密告した。殺されるということを知りながら。そういうことですか？」

一寸の感情もない言葉に、芳乃は震える声で尋ねる。

「その通りだ」

答えは簡潔だった。

一番聞きたくない答え。
それをためらう事もなく、臆することなく吐き出す。
『この人も俺の仲間なんだ』
屈託のない藤堂の笑顔を思い出した。
「どうして……。だって仲間だってっ。藤堂さんは死んだのですよ？　なぜ、そんな平然としていられるのですか！？」
気が付くと涙が止めなく溢れていた。
後から後から流れ出す涙は、芳乃の頬を伝う。
それは、藤堂が死んだという悲しみか、斉藤が藤堂を裏切ったという怒りか。
それとも新撰組の隊士でありながら、何の手だても出来なかったことへの後悔なのか。
すべての気持ちが入り混じり、心が痛くてはちきれそうだった。
擦り切れているだろう足の痛みや、秋風の寒さも何も感じない。
ただ、心が悲鳴をあげている。
「俺はそういう男だ」
泣きじゃくる芳乃の横をすり抜け様に、斉藤は言い放つ。
斉藤の姿は、闇夜に溶け込むかのように消え去った。
「お芳ちゃん。帰りましょう……」
いつの間にいたのか、そこには鉄之介の姿があった。
いつもと変わらない温かな笑み。

「これは正しいことなの？　鉄ちゃん」

芳乃には分からなかった。
詳しい事情は何も知らない。
けれど、斉藤が裏切り藤堂は殺された。
そういうことだ。
それは多分、新撰組の正義の名の下に。
日本を守りたいと、澄んだ瞳をした青年が殺されたのだ。
それが事実。

「違いますよ。お芳ちゃん。正しいか正しくないのかではありません。信じるか。信じないか……それだけです」

そこには芳乃が知らない少年がいる。
虫を殺すことさえ躊躇っていた小さな優しい鉄之介ではない。
前に進み揺ぎ無く自分の信じるものを見定めている瞳。
今の鉄之介ならば、例え百の屍でも踏み越えていくだろう。
そう。この新撰組という場所で。
芳乃には、そんな鉄之介がどうしようもなく遠くに感じるのだった。

## 穏やかな時間（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 穏やかな時間（1）

数日後、ことの真相は明らかになった。

元々、新撰組隊士だった藤堂らは、伊東甲子太郎を筆頭に御所護衛を理由に新撰組を離脱。

が、それは名目上でのことだった。徐々に尊皇攘夷が高まった伊藤一派は、徳川の世を守ろうとする新撰組とは考え方の相違が生じる。

大政奉還が叶えられたことを好機と見て、新撰組局長である近藤を暗殺しようと目論んだらしい。

それを間者として送り込まれていた斉藤が新撰組に情報を流し、伊東一派襲撃へと話がまとまったのである。

まず筆頭の伊東を倒し、その後駆けつけてきた藤堂らと乱闘。

藤堂を始めとした数名の命を奪い、その他の者たちもチリジリに逃亡したということだった。

ただし、これは一部の隊士の間だけが知る真実。

表だっては新撰組の名は出ず、ただの辻斬りとも小さないざこざによる偶発的な襲撃とも言われている。

「お前は藤堂と面識がある。その上、斉藤にも会っちまったらしいからな。一応、ことの真相は話しておく。……が、絶対に他言無用だ」

土方に呼び出された芳乃は、その話をどこか遠くの話のように聞いていた。

芳乃は藤堂が死んだ姿を見ていない。

つい一月前、笑顔で手を振って別れた人。
それなのに突然、『死んだ』と言われても納得のしようがない。
「それでは失礼します」
一通りの話が済むと芳乃は静かに席を立つ。
「……それからお前は今日一日休め」
立ち上がりかけた芳乃に、土方はぶっきら棒にそう言い放つ。
「なぜですか？」
「沖田からの申し出だ」
眉間にシワを寄せて土方は額に手を置く。
「沖田先生の？」
「そんな辛気面引っさげて、ウロウロされちゃあたまらねぇんだろうさ。お前、ひでぇ顔してやがる」
「……」
藤堂が亡くなったというあの夜以来、芳乃は仕事にも身が入らず、どこか心ここにあらず。という状態だった。
それを沖田は敏感に察しているのだ。
「私は平気です。だから休みなど……」
「四の五の言うんじゃねぇよ。いいからさっさと行け」
「……」
土方は一度言い出したら聞かない。

芳乃は一礼し部屋を後にした。

（だから会うなと言っておいたんだ……馬鹿が……）

芳乃の姿が見えなくなると、土方は眉根を寄せて舌打ちをする。

間者として藤堂に同行させた斉藤の話を聞いたとき、嫌な予感がしたのだ。

苦渋に満ちた表情で土方は障子を開け放つ。

空は青く澄んでいる。

「藤堂……」

せめて苦しまずにいけたのなら。

そう祈らずにはいられない。

『新撰組』という居場所を共に作り育て、そして自ら袂を分かち離れていった友が。

許されるはずも許されようとも思わない。

この道に立ったその時から覚悟してきたこと。

いくら血を浴び屍を踏むことになろうとも、悪鬼のごとくと罵られ様と歩みを止めはしない。

涙を流す資格もないのだと分かっている。

泣くのは他の者たちの役目。

泣いて卑怯者と人でなしと云えば言い。

悲しみの涙も怒りの涙も、すべてを洗い流してくれるはずなのだから。

「泣き喚いた方がまだ救われる」

眩しいほどに晴れ渡った太陽を仰ぎ見て土方はそう呟いた。

## 穏やかな時間（2）

土方の部屋を出た芳乃は、沖田の部屋へと向かう。

「沖田先生、失礼します」

静かに障子を開けると、床に就き静かに寝息を立てている沖田の姿が見えた。

「あ……」

沖田が昼間から寝ていることは珍しかった。

布団に入ってはいるのだが、寝入っているということはなく、芳乃が来ればいつもじゃれかかってくるのが常だったのだが。

こんな風に、声をかけたにもかかわらず目を覚まさないということは珍しい。

（起こすわけにもいかない……か……）

芳乃は小さく嘆息し沖田の部屋を出る。

休みを貰ったところで行きたいと思うところもない。

そんな気分になれるわけもない。

廊下に出てフラフラと当てもなく歩いていた芳乃は、ふっと庭先の隅に木刀が立てかけてあるのが目に入った。

芳乃はそれに手を伸ばす。

「えいっ……」

木刀を振り上げる。

「えいえいえいっ……」

それを何度も繰り返す。

徐々に額に汗が滲む。

幾度となく振り上げた腕が軋む。

昔、嫌なことがあるとこうしてよく木刀を振っていた。

無心に振り続けていれば、いつか心が晴れる。

そんな気がしていたから。

「お芳ちゃんっ。止めてください！」

どのくらいの時が立ったのだろう。

唐突に腕を掴まれ、芳乃は木刀を取り落とす。

「鉄ちゃん？」

あまりにも険しい顔の鉄之介の姿に、芳乃は驚いて目を丸くする。

「いや、その。ずっと見ていたのですが、どうもあなたが自棄になって木刀を振っているように見えて……」

「ただ稽古をしていただけ。どうしても吹っ切れないことがあって、だから稽古をしていれば迷いが消せるような気がして」

芳乃は取り落とした木刀を拾い上げる。

と、それを鉄之介は取り上げる。

「……出かけましょう」

「え？」
「僕、今日は非番なんです。土方先生に、お芳ちゃんも休みをいただていると聞いて……。だからその、こんな機会は滅多にないことだろうと思いますし」
「いいの？」
「あ、えっと。もちろん迷惑じゃなければの話で……」
鉄之介のしどろもどろの言葉に、芳乃は大きく首を振る。
「迷惑なはずないよ」
芳乃は笑みを零し答えた。

## 穏やかな時間（3）

京の町は華やいでいる。

紅葉の季節は過ぎても、長い歴史の中で息づいてきた寺院は厳かに京の町々を彩り、そして静かに息づいている。

「ああ、綺麗だ」

芳乃と同じように感じたのだろう。

隣を歩いていた鉄之介が静かに呟いた。

「本当に」

綺麗だった。

澄んだ空気と町と自然。

人々が右往左往し戸惑う時代の中で、けれどこの空間は不思議と緩やかだ。

流れの中にただそこにある。

「今日は市が開かれているのですよ。行ってみませんか？」

「うん」

その提案に芳乃は大きく頷く。

鉄之介と一緒の時間を共有出来るのならば、場所などドコでもよかった。

それに、今は賑やかな場所にいる方が気がまぎれる。

静寂は、どうしても思い出したくないあの夜のことを思い出して

しまうから。

「お嬢はん。見てっておくれやす」

「思い出にお一ついかがですやろか」

「おいでやすー」

櫛や手鏡。

着物や反物。

菓子が売っていたと思ったら、野菜売りがいたり……。

店を見て歩くだけでも楽しい。

「……」

辺りを物色していた芳乃は、一軒の店先にあった簪に目を留める。

艶やかな紅色の簪は、君菊が差していた一つに似ている。

自分には鮮やか過ぎると分かっていても、その美しいそれは芳乃の憧れだった。

男所帯の屯所にいるのだから、あまり洒落っ気を出すものでもないと納得しているのだが、売られているのをみると、つい目が離せなくなってしまう。

「どうしましたか？」

先ほどまで、一定の歩みを保っていた芳乃が立ち止まったのに気が付き、鉄之介が尋ねる。

「あ、ううん。なんでもないの」

「見ていたのはこれ？」

慌てて誤魔化そうとしたのだが、鉄之介は目ざとく芳乃の視線の先の簪に気が付く。

「あ、うん。綺麗な簪だなって思って」
「……おじさん。これ、下さい」

芳乃の言葉を聞くやいなや、鉄之介は即座に店主にそう言葉をかける。

「え！？　どうして？　別に私は……」
「いいから。このくらいなら僕でも買えますから。今更なんですけど、入隊祝いとして受け取ってくださいよ」
「まいど！」

店主から鉄之介に手渡された簪は、そのまま芳乃の手に渡る。
「けど……」
「このくらい、僕にさせてください」

照れたように笑いながら鉄之介は言う。
「本当にいいの？」
「ええ。きっと似合うと思いますから」
「ありがとう」

芳乃は早速と簪を髪に挿す。

「変じゃないかな？」

芳乃は不安そうに鉄之介を見る。

ここ何年か、すっかり「女の子らしい」という形容詞からかけ離れてしまっていた。
久しぶりにこういう飾りっ気のあるものに触れると、妙にこそば

ゆい様な恥ずかしいような気がしてしまう。
「とても似合っています」
「あ、ありがとう」
照れもなくそう言いきる鉄之介の言葉に、芳乃は顔が火照るのが分かる。
他意はない、ただの社交辞令なのだと分かっていても嬉しくて仕方がない。
「じゃあ、今度は私がお礼をしなければ。何か食べたいものとかない？」
「いえ。それならば、付き合ってほしい場所があるのですが」
「うん。いいよ。でも、どこに？」
賑わいの中を歩きながら芳乃は上機嫌で尋ねる。
が、返ってきた答えに思わず足を止める。
その場所はあまりにも意外な場所だった。
「よく、聞こえなかったのだけれど。もう一度言って……」
「油小路に行きたいのです。御陵衛士の方々が亡くなったというその場所に」
忘れようとしていた現実に引き戻される。
芳乃を真っ直ぐに見据えたまま、鉄之介は答えを待っている。
周りの喧騒がやけに遠くに感じる。
先ほどまでの和やかな雰囲気はない。
変わりに何とも言えない緊張感が二人の間にある。
「行きましょう」

芳乃の答えが出る前に、鉄之介はそう言うと踵を返し歩き出していた。

## 輝魂（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 輝魂（1）

鉄之介の考えていることが分からなかった。

鉄之介も、御陵衛士たちを斬ったのは新撰組なのだという真相は知っている。

芳乃が、その中の一人である藤堂平助と顔見知りであったことも知っているはずだろうし、そのことでひどく気に病んでいるのだって分かっているはずだ。

それなのに、鉄之介はその現場に行きたいという。

興味本位や野次馬根性などではないのだということは、幼い頃の鉄之介を知っている芳乃には分かっている。

だが芳乃にはその真意が分からない。

「ここですね」

そこは何の変哲もない小さな通りだった。

凄まじい乱闘があったはずだというのに、その欠片も見えはしない。

ただ、誰が供えたのか、小さな桃色の花びらを揺らす名も知らない花が置かれている。

ここでこの場所で、藤堂やその他の幾人かの者たちの命は露と消えたのだ。

芳乃はギュッと唇をかみ締める。

「おい、貴様らっ」

その場に立ち尽くしていたその時、芳乃たちの前に男が姿を見せ

る。

「お前たち、新撰組のものだなっ」

不躾に男は芳乃たちをジロジロと見ながら言葉を放つ。

「なんなのですか？　あなたは」

男の眼差しには、はっきりとした敵意が見て取れる。

殺気立った気配は、芳乃にもヒシヒシと伝わる。

鉄之介が緊張した面持ちで、けれど臆することなく言い放つ。

「お前に用はないっ。そっちの女！　俺を見忘れたとは言わせぬぞっ」

その言葉に男の顔を見て思い出す。

夏の頃、菓子屋に行く途中にぶつかり、云いがかりをつけてきた男だった。

「あなたも御陵衛士ですか？」

あの時、どことなく藤堂が庇うかのような態度をしていたのを思い出す。

「ああ、そうだとも。貴様、よくもこんなところにのこのこと来れたものだな。まんまと罠にはまった藤堂を笑い者にしに来たか？」

「！？」

藤堂の名に芳乃はビクリと体を震わせる。

「何のことですか？」

御陵衛士の蔑んだ目を見返し芳乃は震える声で言葉を紡ぐ。

「何の。だと？　白々しい！　貴様ら新撰組が伊東先生を罠にはめ、藤堂らを殺害したことだっ。それだけではなく、貴様は新撰組と通じていながらそれを隠し、藤堂に近づいたっ。無邪気な顔をして、藤堂から我々のことを聞き出していたのだろう！！　なんと、卑しい女だっ」

「私はそんなことしていませんっ。藤堂さんが新撰組と対立していたことも知らなかったのですから」

身に覚えのない言いがかりに、怒りで体が震える。

「知らなかった？　はんっ！　知らないといって白を切り通せると思っているのか？　どのみち貴様が新撰組と関わっていることは、調べが付いている。お前も藤堂殺しに加担したことには変わりないっ」

「そんな……こと……」

”ない”ときっぱりと言えない。

何も知らなかった。

けれどその無知さえ罪だ。

藤堂がこんなにも、新撰組と関わりのある人物だということを知っていれば、もっと何かが変わったかもしれない。

少なくともこんな結末ではなくすることは可能だったのではないか。

「変な言いがかりはよして下さい！　彼女は何も知りませんよ。ただ、顔なじみの方が無くなったので、手を合わせに来ただけのこと

ですっ」
「邪魔だ小僧！　女、お前知っていたのだろう？　藤堂はお前を気に入り、我らの仲間に加えようとまでしていたのだということを。……本当に馬鹿な奴だ」
そう言った男の目は幾ばくか潤んでいた。

## 輝魂（2）

「う……そ……」

男の言葉に目の前が暗くなる。

『もしよかったら……やめておきましょう。また今度会うときに言うよ。三度目の偶然。それはきっと運命だと思うんだ』

藤堂のそんな言葉を思い出す。

今にして思えば、あの時藤堂は、芳乃に護衛陵士のことを言うつもりだったのかもしれない。

芳乃が新撰組の仮隊士だとも知らずに。

（私は本当に馬鹿だ）

考えが浅はかだった。

なんて子供染みた考えをしていたのだろう。

敵味方でも友達にはなれるだろうなどと。

刀を携え信念を貫こうとしている者たち。

彼らはいつでも命をかけて自分の道を進んでいる。

そんなことですら、芳乃はたった今気づかされたのだ。

命を賭す者が歩めば相手の命もまた然り。

命と命のぶつかり合い、そんなところに生半可な気持ちで飛び込んではいけなかったのだ。

「貴様らの所為で、先生や藤堂はっ」

憎悪が芳乃を貫く。
今までこれほどまでに人に憎まれたことがあっただろうか？
その激しさに芳乃は思わずたじろく。
「おいっ、小僧。貴様も新撰組の者だったな。土方と一緒にいるのを見たことがある」
シュッ。
その言葉と共に男の刀がスラリと抜かれる。
「くっ。お芳ちゃんは逃げて……」
鉄之介は後ろの芳乃に言い放つと刀を抜く。
「鉄ちゃん！」
「でやぁっ」
止める間もなく、相手から刀が振り上げられる。
キンッ。
それを鉄之介は受け流す。
が、足元はおぼつかなくよろついている。
キンッキンッキンッ。
相手の方が上。
見ていれば分かる。

鉄之介は必死で受け止めてはいるが、相手に斬り込むことが出来ずにいる。
剣の腕ではなく、それは経験の差だ。
多分、鉄之介が真剣を持って相手と本気で向き合うのは、初めてのことなのだろう。
刀を持つ動きが鈍い。

「貴様らまとめて殺してやるっ」
「こんなところで死ぬわけには行かない！」

男の言葉に、鉄之介はそう言うと男の刀を押し返す。

「うわっ。貴様ぁ」

押し返された男は体制を崩すが、それも一瞬のことで、すぐに鉄之介に向かっていく。

キンッ。

鉄之介の手から刀がはじけ飛ぶ。

「鉄ちゃんっ」

このままでは、鉄之介が斬られる。
芳乃は咄嗟に落ちた鉄之介の刀に目をやると、そのままそれを掴み取る。

「ほぅ。今度はお前が相手か？」

おもしろそうに言い、男は芳乃に向けて刀を構える。

芳乃も刀を握りなおす。
それは木刀などより数段重みがある。

「やぁっ」

キィンッ。

受け止めた刀は更に重い。

キンッキンッキンッ。

刀の重みに手放しそうになりながらも相手の刀を受ける。
気迫はある。
けれど、相手の太刀筋はめちゃくちゃだった。
小娘と舐めているのか、実践には弱い性質なのか。
それは分からないが、芳乃は間合いを計り、一瞬の隙を突き刀を絡め取る。
戯れに沖田が刀の稽古をつけてくれた時に、「必殺技ですよ」などと冗談めかして教えてくれたものだった。
まさか、こんな場所で役立つとは思いもしなかった。

「くそっ」

相手は丸腰。
芳乃は刀を突きつけたまま止まる。

「お芳ちゃん！　とどめをっ」

鉄之介の声がする。
それは分かっている。

相手は自分たちを殺そうとしたのだ。
とどめをささなければいけない。
けれど、そこから芳乃は動けずにいた。
（私はここでこの人を殺して、一体どうしたいの？）
ふと、そんな考えが脳裏を過ぎる。
藤堂たちが殺されたのを逆恨みし、自分たちを襲ってきた。
そして自分はそれを返り討ちにする。
ただそれだけのことだというのに、最後の一振りであるはずの刀が振り下ろせない。
「お芳ちゃん！」
鉄之介の言葉に我に返る。
男が虚を付き駆け出し、落とした刀を拾い上げる。
「死ねっ」
シュッ。
振り落とされる刃の筋を芳乃は見た。
あまりにもすばやい動きで、今度は避けることも受け止めることも出来ない。
呆然と立ち尽くす芳乃の前に、鉄之介が立ち防ぐ。
芳乃に降り注ぐはずの刃を、鉄之介が体を盾にして受け止めようとしていた。

## 輝魂（3）

（だめっ）

あまりの恐ろしさに、芳乃は硬く目を瞑る。

キンッ。

刀と刀が交わる音で、芳乃は目を開ける。

「貴様っ」

御陵衛士の低く唸るような声が、芳乃の耳に届く。

「……」

受けた相手は無言のまま刀を押し返し、そのまま相手に突きを浴びせる。

「ぐわっ」

聞こえてきたのは苦しげなうめき声。

鉄之介の背越しにいた芳乃に、その様子は見えなかったが、男が引き抜いた刃が赤く染まっていたのが見えた。

「あ……」

その血の色に芳乃は恐れを抱く。

また人の命が消えるかもしれない。
敵も味方もなく、ただそのことが恐ろしかった。

「やめてっ」

思わず尚も刃を収めようとはせず、相手に向ける男の腕を掴む。
そのことに驚き、相手が静かに芳乃に眼を向ける。
目が合う。

「え？　斉藤……さん？」

思っても見なかった相手の正体に、芳乃は暫し言葉を失う。

「くそっ。斉藤一か！」

芳乃に注意が要ったのを見て、御陵衛士は慌ててその場から退散していく。
その時、思わぬことが起こった。
刀を鞘に収めることも惜しんで走り出した男の前を、運悪く子供が飛び出してきた。

「邪魔だ退けっ」

焦っていた男は、むき出しの刃を子供に突き出していた。
前を見ず駆け出してきた子供は、避ける間もなく、男の刀に突っ込む形となってしまった。
それはカマイタチのように子供を襲う。
構わず男は逃げ出し子供はその場に倒れこむ。

「いけないっ」

ここに来て、芳乃はやっと我に返り、倒れこんでいる子供に駆け寄る。

「しっかりしてっ」

「痛い……痛いぉ」

抱き起こした芳乃の着物の裾に、赤い血が付く。

子供の肩がべったりと赤く染まっている。

芳乃は素早く胸元から手ぬぐいを引っ張り出すと、赤く染まっている肩をきつく結ぶ。

「早くこの子を医者に見せなければっ」

「……僕がこの子を運びますっ」

駆けつけた鉄之介がそう申し出る。

「七条通りを抜けて小路を入ったところに、診療所があったはずだ。案内する」

京に一番長くいる斉藤はそう言うと、先頭に立って走り出す。

その後を、芳乃と鉄之介は付いていった。

## 輝魂（4）

「すみまへんなぁ。今取り込み中なんやわ」

駆け込んだ診療所の主は、忙しそうにあたふたと動き回りながら言い放つ。

「どういうことですか！？」

子供は鉄之介の腕の中で、苦しそうに細い息をしている。

止血をしているとはいえ、血は今だ完全に固まってはいない。

大人にしてみれば少しの出血量でも、子供では命取りになることもある。

「今、お侍様が運び込まれはって。なにせ、幕府の偉いお方やから。すんませんが、他を当たってくれませんやろか……」

「何をしているっ。早くせぬか！　痛くてたまらんっ」

そう耳打ちしていた時、中から苛立たしげな男の声が響いてきた。

「ただいま、まいりますっ。そないなことですから、えろうすんまへんな」

芳乃たちを気の毒そうに一瞥して、医者はサッサと奥に引っ込んでいった。

「そんな！　中の男は怪我をしているといっても全然元気じゃないのっ」

「構うな……。目立つのはまずい」
今にも、文句を言いに駆け出しそうな芳乃を斉藤が引き止める。
「しかしどうしましょう？　早く治療をしてあげないと……」
「持たないかもしれん。ここでないとすると、後はこの近くに医者はいない」
「私が治療する」
気が付くと芳乃はそう言っていた。
「お前が？」
その言葉に驚き斉藤は目を見開き、鉄之介も目を丸くして芳乃を見ている。
「組では、私は幾度か刀傷の隊士を治療したことがあるんです。道具さえあれば、何とか出来ないこともないと思う」
これから別の診療所に駆け込むよりも、ずっと助けられる確立はあがる。
迷っている時間はないのだ。
医学を学んだのは父からだった。
町医者をしていた父は、分け隔てなく病人やけが人を助けていた。
そのため自然と患者は多く、時々は芳乃も手伝いをしていた。
大方の治療法は頭の中に入っている。
新撰組に来てからは、合間を見ては医学書に目を通したりもしていた。
けれど、見るとやるとでは大違い。
しかも、子供の治療となれば話は別。

慎重にやらなければならない。
芳乃は震えそうになる手を押さえ治療を始める。
「大丈夫。大丈夫だからね。絶対に助けるから」
絶対に死なせるわけにはいかない。
小さな小さな命。
ここで散らせてしまっていいはずがない。
誰も死んでなどほしくない。
けれど、助けることも守ることも出来ないなら、それはただのエゴでしかない。
自分は何も変わってはいないのだ。
いつだって自分は身勝手で我がままだ。
鉄之介の傍にいたいからといって新撰組に入り、けれど心どこかで、人を斬る新撰組の隊士たちの姿を嫌悪していた。
同じ道を行きたいといいながら、分かろうとはせず、ただ鉄之介の後ろに付いて行っていただけだった。
それが今回のことを招いた。
浅はかな自分の考えで、とうとうこんな小さな子供まで巻き添えにしてしまった。
「死なせはしないから。私が必ず助けるからね」
それが今自分が出来ること。
やらなければいけないことだから。

## 輝魂（5）

「いやはや。これは驚きましたわ……」

やっと侍の治療を終えた医者は、子供の傷跡を見て感心しきりに頷いている。

「成功といえるでしょうか？　なにせ、子供の怪我に触れたのは初めての事で」

汚れた手をたらいにつけながら、芳乃はハラハラとした気持ちで医者を見る。

「完璧ですわ。医者の私が言うんや。間違いない。あんさん、女子にしとくんわ勿体無いお人やなぁ。さぞ、腕のええ医者になれますのに……」

「俺は行く」

治療の間中、ずっと無言のままに座り込んでいた斉藤が立ち上がる。

「あ、それでは僕たちも帰ります。この子の家には連絡を頼みましたから。あとのことはお願いします。行きましょう。お芳ちゃん」

「うん……」

治療は終えたものの、ぐったりしたままだった子供が心配で、芳乃はもう一度振り返る。

「あ……」

と、横たわっていた子供と目が合った。

「おねーちゃん。ありがとう」

目が合うと、子供はそう言って嬉しそうににっこりと微笑んだ。
その屈託の無い笑顔に心が震える。
たくさんの命が消えていく時代。
それでも、助けられる命もある。
そして、自分の力は小さくとも役に立ったのだ。
芳乃の中に温かな光が生まれた。

「あの斉藤さん！」
「……」

小走りで追いついた芳乃は、斉藤に声をかける。

「先ほどはありがとうございました。助けていただいて」
「別に。たまたま通りかかっただけのこと。それに、あんな腑抜けた様で刀を持つ姿は見るに耐えん」
「……」

淡々とした口調の中に鋭い棘がある。

「何を迷っていた？　お前が死んだところで、何も変わりなどしない。藤堂は死に、俺たちは生きている。ただその事実があるだけだ。死にたくないのなら躊躇うな。ここではより生きたいと思うものが

生き残る」
「生きたいと思っても生きられない人もいます。死にたくないのに死ぬ人も。私はあなたのようになれない」

迷いが捨てられない。
理不尽な『死』を受け入れることなど出来ない。
それが他人のものであっても。

「お前はなぜここにいる？」
「え？」
「この場所でお前は何がしたいのだ？　これからもまだ人は死ぬ。お前がここにいたとて何が出来る？」
「……」

斉藤の言葉が突き刺さる。
言い返す言葉もない。
新撰組にいながら、自分は彼らに見合う強い信念を持ち合わせてなどいなかった。
彼らは命を軽んじているわけではない。
ただそれよりも、強い信念があるだけだ。
命を投げ出すほどの命をかけられるほどの。
けれど、自分にはそれがない。
刀を持ち、斬るべき相手を目の前にして、そのことにようやく気が付く。

「……斉藤先生はなぜこの場所に？」

黙りこんでしまった芳乃に変わり、鉄之介がそう尋ねる。

「花を添えに。名前も知らんが、野原でよく見かけて、藤堂が気に

入っていたから摘んできた。俺は暫く、この場所を離れることになりそうだから」

芳乃を一瞥することもなく、足早に歩きながら斉藤は言い放つ。

その横顔からも感情を読み取ることは出来ない。

「どうして？」

藤堂を斉藤は裏切り者だといった。

そんな相手に花を添えるなど。

「俺はあいつが嫌いじゃなかった。ただそれだけだ」

「……」

どうして気が付かなかったのだろう。

ここにも藤堂の死を悼んでいるものがいた。

芳乃はキュッと唇をかみ締める。

また同じような状況になったとしても、斉藤は迷わず同じように、見事に間者を務めあげることだろう。

もし、死に追いやる相手が最愛の人であったとしても。

どんなに心が悲鳴を上げようとそれを押しとどめて。

彼らにとって生死は問題ではないのだ。

問題なのは魂。

自分の信念と魂の輝き。

「俺はもう行く」

「あ、ありがとうございました」

鉄之介は背を向ける斉藤に言う。

「死にたくないのなら迷うな。迷わない生き方をしろ……」

振り返ることはせず、斉藤は静かにそう言い去っていった。

## 輝魂（6）

屯所に帰る道の途中、鉄之介が足を止める。

「今日はすみませんでした！」

勢いよく頭を下げる鉄之介。

「え？　どうして謝るの？」

「僕があの場所に連れて行ったばかりに、お芳ちゃんを危険な目に合わせてしまった。僕はあなたを守りきれなかったっ」

鉄之介は口惜しそうに唇をかみ締める。

「そんなことはない。鉄ちゃんはちゃんと私を庇ってくれたじゃない。謝るのは私の方。私はあの時、あの人にとどめをさすべきだったのに……」

それが出来なかった。

仮にでも、新撰組の隊士であるのにも関わらず。

「いいえ。僕があなたを守るべきだった。あの場所に行くのは危険だということも分かっていたはずなのに、それでもあなたを連れていったのだから」

「どうしてあの場所に？」

芳乃は鉄之介を見る。

「お芳ちゃんは、御陵衛士の方々が亡くなられたことを納得していなかったでしょう？　ひどく気に病んでいた。だから連れてきたのです。せめて、彼らが最期を遂げた場所を見ておいてほしくて。……僕はあの夜、彼らが戦う姿をみたのです」

そこで鉄之介は息を付く。

「これだけは言えます。彼らは、決して同情されるものでも、惨めなものでもなかった。戦いの中で、自分の信念をぶつけ命を散らせたのです。だから、僕はその場所をあなたに知っておいてほしかった」

真っ直ぐなその瞳にうそは無い。

「ありがとう……鉄ちゃん」

もしかしたら鉄之介はもう気が付いていたのかもしれない。
芳乃の心の中にある思いを。
芳乃さえ気が付いていなかったこの思いを。

「私……」
「お芳ちゃん？」

鉄之介の姿が滲む。
芳乃は泣いていた。
涙が溢れ出す。

（どうして今頃になって気づいてしまったのだろう？　どうして今のままじゃだめなんだろう……）

人が死ぬのは嫌だ。
それは、力で人々を守る新撰組とは違う考え。
芳乃はもう気が付いてしまった。
自分は人を斬る事は出来ないのだと。
刀で人を守る強さはないのだと。
命を燃やし輝き続ける彼らの傍にいて気が付いてしまった。
鉄之介の傍にいながら、行き着いたのは逆の考え。

（私が生きるべき場所は『新撰組（ここ）』じゃない）

それは、鉄之介と道を違える。
そういうことなのだ。

## 決別（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 決別（1）

静かな夜だった。

風もなく、ただ月明かりだけが煌々と降り注ぐ。
その場で身を正し、芳乃は目の前にいる男、土方歳三を見る。
この男もまた静かだった。
明らかにいつもと違う、芳乃の様子を感じ取ったのだろうか。
軽口を叩くこともなく、芳乃を真っ直ぐと見る。
その眼差しは、凪いだ海のように静かで穏やかだった。

「……お話を聞いていただけますか？」

けれど、芳乃がここにきた訳をしれば、その眼は途端に色を変えるだろう。
刃のように鋭く冷たい眼差しに。
けれど不思議と芳乃は恐ろしくなかった。
芳乃の心もやはり静かだった。
それは諦めではなく、揺ぎ無い強い決意が心を締めていたから。

「聞いてやるから、ここにいるんだろうが。話てみろよ」

いつものようにぞんざいな口調。
けれどそこには、どこか真摯な響きがある。

「私は、新撰組を脱退します」

真っ直ぐに土方を捕らえたまま、芳乃は言い放つ。

静まり返ったその場に、凛っとしたその声が響く。

「ふん。『したい』じゃなくて『します』…か。お前、自分が言っている意味が分かってるのか？」

土方には動揺も怒りも見て取れない。

ただ瞳に微かな狂気が混じるのを芳乃は見た。

「分かっています。私は自分がどうしたいのか何が出来るのか、今まで何も考えてはいませんでした。ただ、一人になるのが恐くて、自分の居場所がほしくて。だから、私はこの新撰組に入ったのです」

鉄之介がいる場所。

ならば、自分もそこで一緒にありたいと思った。

鉄之介がいるのなら、自分もそこで見出せる何かがあるのだと思っていた。

「けれど、ここに居て何かが違うと思ったのです。ここは、私に居場所を与えてはくれたけれど、私がいたいと思う場所ではなかった。……勝手だということは分かっています。生意気だということも。けれど、このままココにいることは、自分自身を偽るということです。私は自分を偽ることをしたくありません。私は、私が進むべき道をいきます」

「……俺が、はいそうですか。と、お前を笑顔で送り出すとでも思っているのか？　正気の沙汰とは思えねぇ。新撰組を抜けたがってる奴らが、逃亡するのはてめぇだって知ってんだろうが」

「……」

脱隊者は切腹すべし。

それが新撰組の掟。

一度入ったら、おいそれと抜け出すことはできない。

だから、戦局が悪い今は逃亡を図るものが後を絶たない。

今ならば、そんな者たちに混じって逃げ出すことも芳乃には出来た。

けれど、芳乃はそれを拒んだ。

「私が新撰組に入れるきっかけを作ってくれたのは、土方さんです。だから、ここを出るのも土方さんの許可をいただきたいのです。私は、自分の進むべき道に誇りを持っています。ここにいる、鉄ちゃんや沖田先生、土方さんがそうであるように。だから、その出発はけじめあるものにしたい。きちんと認めて頂きたいのですっ」

「誇り？　はっ！　ふざけんな！！　結局てめぇは、血生臭ぇここが嫌になって逃げ出すんだろうがよっ。格好のいいことをいうなよ！　所詮は、てめぇもただの臆病者じゃねぇかっ」

攻撃的な言葉。

けれど、そこにはどこか悲しげな響きがある。

「違いますっ。逃げるのではありません！　前に進むのですっ。新撰組と私。道を違えてしまった。違えてしまったけれど、前に進むことには変わりありませんっ」

土方から目を逸らさず、あらん限りの想いを乗せて言葉にする。

「……」

と、土方は徐に席を立つ。
刀掛けに収まっていた愛刀を取り、芳乃の前に仁王立ちになる。

## 決別（2）

そんな土方を、芳乃は微動だにせず見つめる。
一歩も引くつもりはない。
この部屋に入った時から、何があっても逃げ出さない。
そう心に決めていた。
ココで逃げ出すようでは、これから先、前に進むことなど無理だ。

鞘からゆっくりと引き抜かれる刃。
美しい鋼が姿を現す。
この刃が、一体幾人の命を奪ったことだろう。
幾度、血の朱色に染まったことだろう。
禍々しい美しさを放つそれは、いつ芳乃の肌を切り裂いても不思議はない。

「脱隊者は死あるのみ……だ。それでもその戯言をほざくか」

剣先は、真っ直ぐ芳乃に向けられる。

「私は、何と言われようとも行きます。もしそれが許せないと言うのならば、ここで私を切り殺してくださっても構いません」

こうなることを予期していなかったわけじゃない。
確立は半々。
いや、むしろ切り殺される確立の方が高かった。
ここはそういう場所なのだと、芳乃はもう嫌というほど分かっていた。

「……」

「……」

そのまま、幾ばくかの時が動くが、二人はそのまま止まったままにらみ合う。

「……強情だな」

先に動いたのは土方だった。

芳乃に向けた刀を慣れた手つきで鞘に収める。

カチリと小さな音を立てて、刀はあるべき場所に還る。

「行きたきゃ行けよ。元々てめぇは仮隊士。隊士名簿に名前も載せてねぇ。そんな奴が一人いなくなったところで、新撰組にゃ痛くも痒くもねぇさ」

芳乃に背を向けてそう言い捨てる。

「土方さん……」

「早くしろ。俺の気がかわらねぇうちに行けよ」

「ありがとうございます」

芳乃は深く頭を下げる。

土方歳三。

大嫌いだった。

出会ったときから嫌いでしかたなかった相手。

けれど、嫌う反面惹かれていた。
誰よりも強い人。
強くあろうとしている人。

「私は、新撰組にいられたことを誇りに思います。土方さんに感謝しています」
「……サッサといけ。荷物まとめて出ていきやがれ」

投げやりに言い放つ。

「失礼します」

ゆっくりと立ち上がり障子に手をかける。

「芳乃……死ぬなよ」

微かに聞こえた呟き。
顔を上げると、土方の強い眼差しとかち合う。

「あなたも生きてください。どうか、どんなことがあっても。名誉ある死より、無様な生を私は望みます」

ふと過ぎったのは藤堂の顔。
思い出す度にズキリと痛む。
きっと忘れることはないだろう。
理想を掲げ死んでいったあの優しい人を。

「そこからお前と俺は違う。違いすぎる。お前は生きろ。そして証明しろよ。てめぇの理想が正しいことを」

不敵な笑み。
これは挑戦だ。
道を違える自分への。

「ええ。もちろんです」

芳乃は艶やかに笑う。
初めて土方と対等な位置にいるのだ。
負けられるはずがない。
受けて立つ。
道を違え、そしていつか一本の道でまた出会う。
だから、その日まで振り返らない。
閉められた障子。
違えた二人。
それが新撰組との決別だった。

## 決別（3）

部屋の荷物はさほど多くはなかった。
もとは風呂敷包み一つで飛び込んだ新撰組。
出て行くときも同じでいい。

「お芳ちゃん。入りますよ」

入ってきたのは沖田だった。

「お、沖田先生！　何、起きてるんですか？　ちゃんと寝てて下さい。薬、薬はお飲みになったのですか！？」

「いやだなぁ、お芳ちゃん。なんだか、世話女房みたいじゃないですか。あぁ。ということは、僕は女房に捨てられる、甲斐性なしって感じですかね？」

クスクスとおかしそうに笑う。

「沖田先生……」

出会ってまだ半年と経たないのに、初めて見た時よりも数段やつれているのは、誤魔化しようがない。
こうして歩いてここに来ることさえ、相当な体力を使ってしまったはずだ。

「いやですよ。そんな顔をしないで下さい。別に責めてるんじゃないですよ。ただ、餞別を渡しにね」

そう言うと懐から、重そうな紙包みを手渡す。
触った感触から相当な額の銭が入っていることが分かった。
「だめです。ただでさえ、私はお役目を放棄して身勝手をしようとしているのに、こんなものいただけません！」
「いいえ。貰っていただかないと困りますよ。どうせ、もういらなくなるものですし……」
沖田は笑顔でドキリとするようなことを言う。
「なっ。なにをいってらっしゃるんですか！　サッサと病気を治して、菓子屋でもまるまる買い占めたらいいじゃないですかっ。毎日、お汁粉食べてお団子を食べて、それから……」
「あはは。そういう手もありますね。でも、いいんです。そもそも、毎日甘いものばかり食べていたら、ブクブクに太って、剣など振れなくなっちゃうじゃないですか。それに、食べたくなったら誰かにたかりますから平気です。いえ、それもけっこう楽しいもんなんですよ」
沖田が笑顔でいればいるほど、芳乃は泣きたくなってしまう。
新撰組で一番気がかりなのは沖田のことだ。
どんなに気丈に振舞っていても、時折乱れる呼吸やおぼつかない足元で、病状の悪さが見て取れる。　この人の『命』はそう長くはない。
「あの土方さんを言いくるめちゃうんですから、お芳ちゃんは本当に強者ですよ」

「その土方さんをいつもからかっている沖田先生は、その上をいってますけど」

沖田のいつもの軽口に、泣きたい気持ちを抑えいつものようにツンッと答える。

「そうそう。お芳ちゃんはそうでなきゃ。いつまでもお元気で」

「もちろんです。沖田先生も駄々をこねず、薬、ちゃんと飲んでくださいね。元気になったら、これでたくさん菓子を買って会いに来てください」

渡された紙包みを沖田へと返す。

やっぱりかなわないな。と、沖田は朗らかに笑う。

「お芳ちゃん、彼がいつもの場所で待っていますよ」

「え？」

思っても見なかった言葉に、芳乃は沖田を見返す。

「きちんと話をしていった方がいい。君の気持ちを全部伝えておいで」

「ありがとうございます」

芳乃は沖田に深々とお辞儀をし、東の対の庭に向かった。

## 約束（1）（前書き）

注意！＜必読＞：歴史上の人物が登場していますが、完全フィクションです。
歴史的事実・年代については、一部差異があることをご了承ください。
また、ぬるめですが残虐な描写があります。

作者のかなり偏ったイメージと知識のもと作られた作品です。
それでも構わないという心の広い方のみ、ご観覧いただければと思います。

## 約束（1）

そこに鉄之介はいた。

静かな微笑と澄んだ真っ直ぐな瞳。

優しく包み込むような、鉄之介の温かな雰囲気が何よりも好きだった。

この人とならば、どんなことがあっても幸せでいられる。

そう思っていた。

いや、本当は迷っているのだ。

今ここで離れてしまったら、今度こそ会えない。

もう、約束は何一つないのだから。

「ここを出て行かれるのですね」

「はい」

揺らぐ気持ちを押しとどめ芳乃は頷く。

「この後はどうされるのですか？」

「江戸に戻ります。医者を志そうと思っているのです。江戸に父の知り合いの町医者がいるので。暫くの間、修行をしたいと手紙を書きました」

それが行き着いた答えだ。

芳乃は『死』よりも『生』をみつめてみたいと思った。

命を賭して守ろうとする者たちがいるように、その命を守ろうとする者もいる。

町医者だった父のように、刀を握るのではなく人を守りたいと、

今は心底思っていた。

「そうですね。あなたの父君もお医者様でしたし。女子で医者という道は厳しいと思いますが……」

「きっとなってみせます。鉄ちゃんとは違うやり方で、国を人を守ります」

今度はただ追いかけるのではなく、自分自身の足で未来を目指すのだ。

それは、鉄之介と共に新撰組にいたからこそ決心できたこと。

「お芳ちゃんは強くなりました。もう、僕がいなくても大丈夫ですね」

鉄之介はほんの少し寂しそうに笑う。

「いつも私は鉄ちゃんの後を追いかけてばかりだったね。その優しさに、いつも甘えてばかりだった」

「いいえ。甘えていたのは僕の方ですよ。お芳ちゃんが新撰組に来て、僕はいつもあなたの素直な心に勇気付けられていた。傍で笑ってかけてくれた言葉が、いつも僕の背中を押してくれたから。本当は幾度となく挫けそうな時だってあったんですよ。あなたがいたからこそ、僕は迷わずここまでこれたんです」

そう言う鉄之介の瞳は強く輝いている。

「……それだけで十分です」

『約束』は果たされなかった。
けれど、それ以上のものがここにはあった。
見つけられた。
傍に居るということが重要ではない。
離れていても、同じ想いを持っているということ。
それが大切なのだ。
寄りかかって生きていくのではない。
自分の足で立ち道を見つけて歩む。
同じ方向に進めば道はやがて混じり出会うのだから。

「また出会えるはずだから、さよならはいいません」

「はい。またきっと会いましょう」

笑顔で別れる。
そう決めていたはずなのに、涙で視界が歪む。
声が震えそうになるのを、済んでのところで押さえ込む。

「あなたに一つだけ謝らなければ……」
「え？」

鉄之助は、涙を堪え空を見上げていた芳乃を、後ろからふわりと包み込んだ。

## 約束（2）

「て、鉄ちゃん！？」

唐突に後ろから抱きすくめられた芳乃は、思っても見なかったことに驚き、拭き損ねた涙は溢れ出し頬を伝う。

「お願いです。こののまま聞いてください」

「……」

振り向こうとした芳乃に、鉄之介が囁くように言い放つ。

「お芳ちゃんとの約束。守れなくてごめん」

「え？」

「迎えに行くって約束したのに、それを破ってしまった」

「！？」

「美濃を離れた時、僕は死んだようなものだと、自分にそう言い聞かせて、お芳ちゃんのことは忘れようと思ったんだ。甘い夢を見ると現実が辛すぎて。だから、一番楽しかった思い出ごと、お芳ちゃんのことも記憶から消していた」

美濃を離れてからの、鉄之介の生活がどんなにつらいものだったか、芳乃にそれを知るすべはない。

けれど、鉄之介は芳乃が知るよりずっと苦労して来たに違いない。

辛さや痛みを知っているからこそ、優しいだけじゃない、今の強い鉄之介がいるのだ。

「てっきり、お芳ちゃんは忘れているのだと思ったけれど。沖田先生かが話してくださったんだ。あなたが、約束を頼りに僕のところに来たのだと。正直、嬉しかった。すごくすごく。けれど、僕にはもう譲れない道が出来ていて、あなたを巻き込むべきではないと思ったから知らないフリを通した」

ほんの少し、鉄之介の声は震えている。

「あなたが出て行くと決めた時、沖田先生は僕も一緒に行くべきだとおっしゃった。あなたと一緒にいること。それも一つの生き方なのだからと」

静かに静かに鉄之介は語る。

優しすぎるくらいの抱擁に、芳乃は切なくなり涙が止められない。

「けれど、鉄ちゃんはもう決めているのでしょう？」

あまりの鉄之介らしさに、泣きながらも笑みが零れる。

鉄之介は芳乃とは来ない。

不器用すぎるくらいの少年の一途さ。

一度歩み出した道を引き返すことも、違えることも出来ないのだ。

安易な幸せよりも、茨の信念を貫く。

鉄之介とはそういう人だ。

「ごめん……」

「謝ったって許さない。本当は針千本飲まなきゃいけないのよ？」

スッと鉄之介から体を離し振り向く。

「お芳ちゃん……」

シュン落ち込んだ鉄之介の顔。

「針千本は許してあげる。けど、代わりに新しい約束してね」

芳乃は精一杯の笑みを浮かべて悪戯っぽく言い放つ。

「決して命を粗末にしないといこと。どんなことがあっても、命を投げ出さず精一杯生き抜くと。そう約束して」

志半ばで散っていったたくさんの命。
それがどれほど多いことか。
命など捨てられると人は言う。
けれど、捨てた命一つがどれほど重いか。
それを知っているのは、死んだ者より遺された者たちだ。

「はい。必ず。どんな困難な道であっても、逃げ出しません。約束しましょう」

そう言って、鉄之介は小指を差し出す。
芳乃はそこに自分の小指を絡める。

「……」
「……」

指と指を絡めたまま、芳乃と鉄之介はどちらともなく唇を合わせる。

唇を重ねただけのたどたどしい口づけ。
それは星々が輝く静かな夜だった。

# 終章

明治　春

桜の花がヒラヒラと舞い落ちる。
それを見るとはなしに、一人の若い女が見ている。

「女先生ー！　お客様ですよ」

「はーい」

軒先からの声に答えてからため息をつく。

「あーあ。女先生っていうの定着しちゃってるなぁ。昔の芳坊に比べたらマシなんだろうけど……」

そんなことを一人心地で呟きクスリと笑う。

『新撰組』というあの場所にいた時から月日が経ち、時代は大きく変革している。

局長であった近藤は斬首され、芳乃が小姓をしていた沖田は病死。そして、誰よりも強く生き抜いていた新撰組副長土方は、幕府無き後、新たに作られた新政府軍と戦い、函館で戦死したと知ったのは、ついこの間のことだ。
命が儚く散っていく。

「みんな、死に急ぎすぎですよ。本当に、どうしようもない人たちなんだから」

呟きは誰に届くことなく消えていく。

サアァと風が芳乃の間を吹きぬけ、桜の花を散らしていく。

風を感じると思い出す。

京にいた熱く激しい彼らを。

魂を輝かせ、『誠』の信念を掲げ命を燃やしつくした男たち。

決して忘れることはないだろう。

芳乃は新撰組脱隊後、江戸にいる父の知り合いの医者の元に身を寄せ、医学を学んだ。

そして数年の歳月を経て、故郷である美濃で診療所を開いている。

「まったく、貴重な休憩時間に客って誰？　また決闘だとかで怪我したーなんて奴だったら、張った押してやるんだからね！」

ここ最近は西洋式が色々と話題になっているのだが、つい最近、西洋式の喧嘩だなどといい、決闘をして怪我をしたという馬鹿が担ぎ込まれたばかりだった。

「いえ。患者さんじゃないですよ？　昔、美濃に住んでいて、久しぶりに戻って来たたそうです。そうそう。『約束があるわけじゃないけど、迎えに来た』とかって、よくわからないんですが言っていました」

助手を務めている青年の言葉に、芳乃は動きを止める。

「えーと、名前は……」

名前を聞く前に、芳乃は駆け出していた。

そこにいるはずなのは、ただ一人なのだから。

「お久しぶりです。お芳ちゃん」

温かな優しい笑顔。

いつの間にか背が高くなっている。

総髪で後ろに束ねられた髪は短く切られ、顔は少し大人びたようだった。

けれど、その瞳は昔と変わらず澄んでいて……。

「おかえりなさい」

芳乃は、花のように美しい微笑みを浮かべる。

時代はやがて緩やかに穏やかな時代を迎える。

激動の時代を経て。

けれど、残るものもある。

新たな時代を覗かせても強い『想い』は消えることはない。

例え、容がなくとも、想いは確かにここにある。

## 終章（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

詳しい後書きは活動報告で！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9253p/

風の少年・花の少女

2011年4月5日03時57分発行